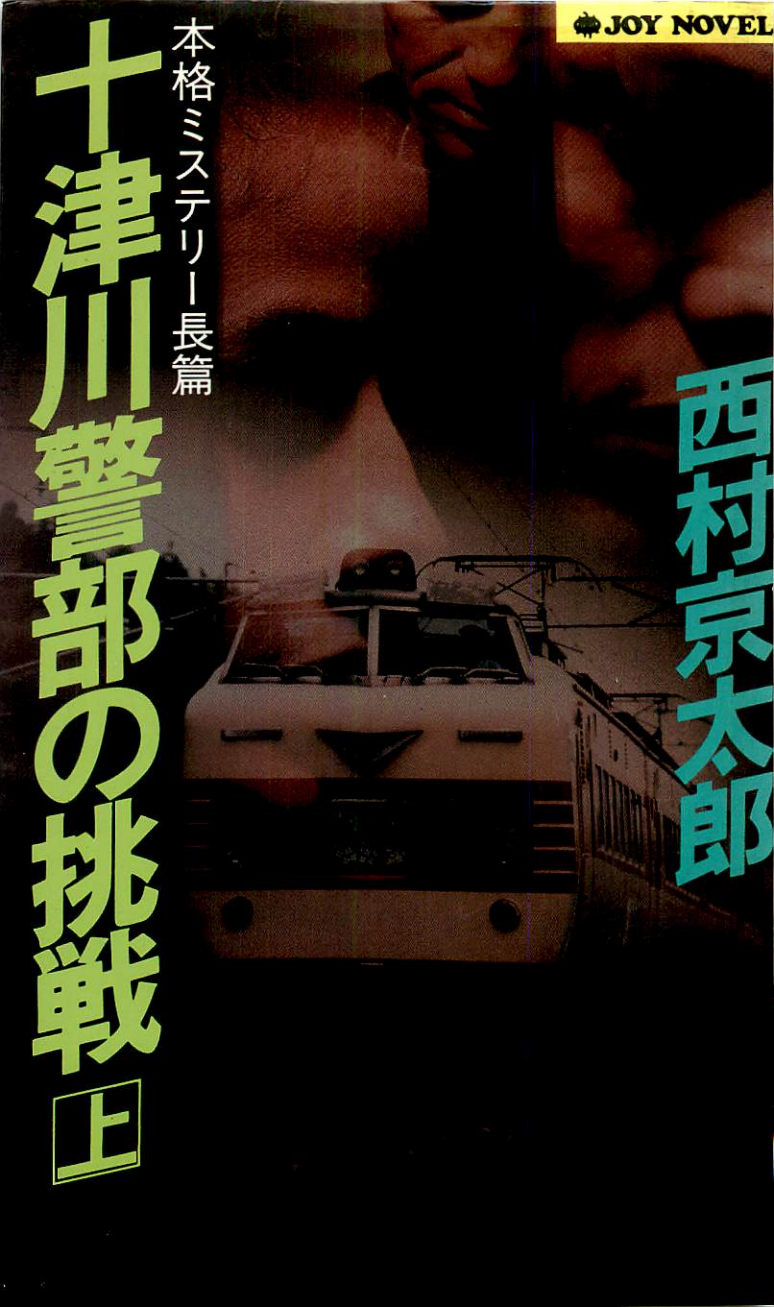
JOY NOVEL

本格ミステリー長篇

十津川警部の挑戦 上

西村京太郎



「小樽へ行ってくる」と言って家を出た62歳の老人が、東京で死体で発見された。老人は20年前に警視庁を退職した元刑事だった。前科のある男が自首して来て、事件は解決した。とくに警視庁の上層部は解決を急いだ。が、元刑事が、かつて担当し、解決した事件を追っていたことを知った十津川警部は、早すぎる事件の〝解決〟に自ら待ったをかけた。元刑事が小樽に訪ねた人物が不自然な死に方をしているのも気になった。殺された元刑事が追っていた事件――それは美貌の若い女性が暴行され、殺害されるという連続殺人事件で、赤いポルシェが決め手となり、容疑者として代議士の秘書が浮かんだ。しかし、男は、自分は無実であるとの遺書を残し、自殺した。世論の非難を浴びた警察は、アル中の変質者を犯人として逮捕し、事件は〝解決〟というものだった。そして20年後のいま、解決した事件を追っていた元刑事が殺されたのだ!!



JOY NOVELS

本格ミステリー長篇

十津川警部の挑戦 上

西村京太郎

実業之日本社

父の失踪 5
小樽への旅 20
過去へ 36
警視庁 51
世界は二人のために 66
ラブユー東京 82
第三の事件 98
容疑者一号 114
男の像 129
逮捕 145
追いつめて 160
二十年の空白 177
よみがえる過去 192
襲撃 208
行方不明 224

カバー写真　南　正時
装画・挿画　辰巳四郎
装丁　サン・プランニング

父の失踪

季見子は、父の様子が変ったのは、母が亡くなったせいだと、思っていた。

父の佐々木完治は、昔、警視庁捜査一課の刑事だった。

二十年前に辞めているから、二昔も前である。

辞めた時、父は四十二歳だったから、定年退職ではなかったらしい。

なぜ、辞めたのか、季見子は知らないし、聞いたこともない。去年の秋に病死した母は、時々、「お父さんが、警察を辞めてくれてよかったよ」と、いうことがあったから、刑事時代の父の生活は、多分、ひどく、不規則だったのだろう。

現在、二十五歳の季見子は、刑事としての父の姿を、ほとんど知らない。彼女の知っているのは、中央鉄鋼という中堅会社の人事部で、労務管理の仕事をしている平凡なサラリーマンとしての父の姿だった。

父は、酒好きな点を除けば、バクチもやらず、家を無断であけることもせず、模範的な家庭人だった。少くとも、娘の季見子の眼には、そう映っていた。

（家庭的で、物静かな父）

という印象が、季見子には強い。

去年、母が亡くなってから、父の様子が、おかしくなった。

ひとりで、考え込んでいたり、季見子に黙って、家をあけたりするようになった。

泥酔して、帰宅して、季見子の手を焼かせることもあった。

季見子は、そんな父の変化を、三十年近く連れ添ってきた母を失ったせいだと、思っていた。

季見子は、M銀行の総務部に勤めていて、恋人も

いる。彼のことは、亡くなった母には、話してあったが、父には、まだだった。その中にと思っていたのだが、母が急死して、何となくチャンスを失ってしまった感じだった。

恋人の原田にも、正式な結婚の話は、父の気持ちが、落ち着いてからにして欲しいといってあった。

七月八日に、原田と、夕食を一緒にし、そのあと、六本木で、飲んだ時も、季見子は、同じことを、彼に、いった。原田の方が、結婚に積極的だったからである。

帰宅したのは、午後十一時を過ぎていた。

父は、いなかった。

代りに、ダイニングルームのテーブルに、手紙が置いてあった。

〈用事があって、小樽へ行ってくる。十日の夜には、帰れる筈だ。

父〉

いかにも、父らしい、ぶっきらぼうな置き手紙だった。

何の用で、父が小樽へ行ったのか、季見子には、わからなかった。

小樽へ行った父から、連絡の電話はなかったが、季見子は、別に、心配はしなかった。

戦前派の父は、いちいち、家庭に連絡するのは、恥みたいな考えを持っていたからである。

翌日の夜、電話があったが、父からではなかった。

「警視庁捜査一課の十津川という者ですが」

と、中年の男の声が、いった。

「はあ」

とだけ、いったのは、季見子の知らない名前だったからである。

「お父さん、おられますか？　佐々木完治さんですが」

「おりませんわ。今、出かけているんです」

「どちらへ、お出かけですか？」
と、相手は、しつこく、きいてくる。
季見子は、急に、不安になってきた。
「父に、何かあったんでしょうか？」
「そんなことは、ありません。都内にお出かけですか」
「いいえ、旅行ですわ」
「いつ、お帰りですか？」
「明日にでも、帰ると思いますけど」
「帰られたら、すぐ、私に、連絡するように、お伝え下さい」
と、十津川はいい、電話番号をいった。
（何だろう？）
と、季見子は、考えてしまった。警視庁捜査一課といえば、二十年前、父が働いていた場所である。
そのことと、何か、関係がある用事なのだろうか？
（まあ、父が帰ってくれば、わかることだわ）
と、季見子は、自分に、いい聞かせた。意外に、つまらないことで、例えば、捜査一課で働いた人や、現職員で、パーティをやるので、父にも、ＯＢとして、出席して欲しいという、そんな電話だったのかも知れないのだ。
十日の夜になった。
父が、旅行から帰るので、季見子は、父の好きな近所のにぎり寿しをとり、ビールを冷やして、待っていた。
母が亡くなってから、ちょっと、様子がおかしいから、こんな時に、元気づけてやろうと、思ったのである。
テーブルの上に、寿し徳のにぎりを置き、ビールのコップを用意し、酒の肴も並べて待っていたのだが、夜の十時になっても、十一時になっても、父は、帰って来なかった。
季見子は、急に、心配になって来た。
何といっても、父は、もう、六十二歳である。
頑健さを、いつも自慢しているが、反射神経は、

鈍くなっているだろう。それで、暴走する車を避け切れなかった。そんな事故に巻き込まれてしまったのではないだろうか？

ふいに、電話が鳴った。

季見子は、受話器を取った。

「十津川です」

と、相手が、いった。季見子は、拍子抜けしながら、

「父は、まだ帰って来ませんけど」

「連絡もありませんか？」

「ええ。連絡がないのは、いつものことですわ」

「どこへ行かれたのか、教えて頂けますか？」

と、相手は、丁寧に、きいた。

「小樽へ行くと、手紙には、書いてありましたけど」

「北海道の小樽ですか？」

と、十津川は、念を押した。

「はい」

「手紙といわれましたが、置手紙ですか？」

「はい」

「正確に、何と書いてあったのか、教えてくれませんか」

「読むんですか？」

「お願いします」

と、十津川が、いう。

季見子は、父の手紙を持って、電話のところに戻り、

「読みます。『用事があって、小樽へ行ってくる。十日の夜には、帰れる筈だ。父』ですわ」

「何の用で行くのかは、書いてないんですね？」

「はい。これだけですわ」

「わかりました。また、電話します」

と、十津川はいい、季見子が、何かいいかけた時には、もう、電話は切れてしまっていた。

季見子には、十津川という刑事が、なぜ、父のことを、あれこれ聞くのか、わからなかった。とにかく、父は、二十年前に、警視庁を辞めているのだ。

（父は、警察の厄介になるようなことをしたのだろうか？）

しかし、それなら、呑気に、電話で問い合せて来たりはせず、いきなり、家に、押しかけてくるだろう。

それに、最近の父の様子を思い出してみても、母の死のあと、少し、おかしくはあったが、警察を恐れている感じではなかった。

その夜、とうとう、父は、帰って来なかった。

翌日、季見子は、心配になって、会社には、電話で欠勤する旨を伝え、家で、父の帰りを待った。

昼を過ぎたが、父は、帰らない。連絡もない。

季見子は、父の勤務先の中央鉄鋼に、電話してみた。会社の方に、連絡が入っているかも知れないと、思ったからである。

電話には、人事部の管理課長が出た。

「佐々木さん？　とっくに、辞めていますよ」

「辞めた？　本当ですか？」

季見子は、びっくりして、きいた。

「ええ、去年の十一月末日で、退職されています。退職金も、支払われていますよ」

と、管理課長は、事務的な口調でいった。退職金のことで、何かいって来たのかと、思ったらしい。

「その時、辞める理由を、いっていましたか？」

と、季見子は、きいた。

「一身上の都合ということでしたね。それ以上のことは、聞いていませんよ」

と、管理課長は、いう。

季見子は、当惑したまま、電話を切った。

管理課長が、いうのだから、本当なのだろう。しかし、季見子は、全く、気がついていなかったのである。

母が亡くなったのが、去年の十月二十六日だった。その一ケ月後に、父は、季見子に黙って、会社を辞めていたことになる。

その後も、父は、朝、家を出て、夕方、帰宅した。

ずっと、会社勤めを続けているように、振る舞っていたのだ。

なぜ、父は、そんなことをしたのだろうか？

母が亡くなったショックで、父は、サラリーマンを辞めてしまったのか？

それにしても、なぜ、私に、本当のことを話してくれなかったのかと、季見子は、それが、腹立たしかった。

父は、十一月末に、辞めたという。それから、今日まで、いったい、何をしていたのだろうか。じっと、考え込んでいたり、突然、泥酔したりしたことはあったが、それは、何だったのか。

今まで、季見子は、母を亡くしてから、勤めていても、面白くなくて、それで、考え込んだり、酔っ払ったりしているのだろうと、思っていたのである。

それが、どうも、違っていたらしい。父は、母が亡くなった直後に、会社を辞め、何か、季見子の知らない仕事をやっていたような感じがしてきた。

「小樽へ行く」という置手紙を見た時、季見子は、小樽に、何をしに行ったのだろうかと、不思議だった。

親戚や、知人に、小樽に住んでいる者はいなかったからである。恐らく、会社の関係で、行ったのだろうと、季見子は、思っていたのだが、その会社を、七ケ月も前に、辞めてしまっていたとすると、わけがわからなくなってくるのだ。

ひょっとして、飛行機の事故でもあったのではないかと、季見子は思い、新聞や、テレビのニュースを、気をつけて見たのだが、それらしい記事も、出ていなかった。

十二日になっても、父は、戻らなかったし、連絡もなかった。

季見子は、警視庁捜査一課の十津川という刑事に、電話をかけてみた。何か、父のことで、知っているような気がしたからである。

しばらく待たされて、十津川が出た。

十津川の態度は、前と違っていた。
最初、彼の方から、電話をかけて来て、父のことを、あれこれ、聞いた筈である。季見子の方が、戸惑ったくらいなのだ。
それなのに、今日の十津川の様子は、ひどく、よそよそしかった。第一、もう一度、電話しますといって、昨日も、今日も、連絡して来なかったではないか。
「佐々木です」
と、いっても、十津川は、「そうですか」と、いっただけである。
それでも、季見子は、すがるような思いで、
「父が、まだ帰って来ないんです。十津川さんが、何か知っているんなら、教えて頂けませんか」
と、いった。
「大丈夫ですよ。すぐ、帰りますよ」
十津川は、簡単に、いった。
季見子の心配が、全く、相手に通じていない感じで、彼女は、いらだちながら、
「でも、二日も、おくれているし、何の連絡もないんです。明日になったら、小樽へ行ってみようかと、思うんですけど」
「いや、そんなことはしないで、じっと待っていらっしゃい。お父さんは、必ず、帰りますよ」
と、十津川は、いう。
「父が、なぜ、小樽へ行ったか、十津川さんは、知っていらっしゃるんですか」
「いや、知りません」
「でも、そちらから、電話をかけて来て、父のことを、いろいろと、お聞きになったじゃありませんか」
季見子は、軽い腹立たしさを覚えながら、いった。
そんな季見子の抗議に対して、十津川は、
「そうでしたか」
と、いった。
「十津川さん」
「はい」

「何か、父のことで、隠していらっしゃるんですか？それなら、いって下さい」
「何も隠してはいませんよ。私が、警視庁へ入った時は、すでに、佐々木さんは、辞められたあとですから、よく存知ていないのです」
「それなら、なぜ、電話をかけて来られたんですか？父のことで」
「それは、警視庁のOB会のことで、近況をお聞きしたかっただけですよ」
「本当ですか？」
「ええ。本当です」
「十津川さんが、何もご存知ないのなら、仕方がありませんわ。こちらで、父を探しに行って来ます」
と、季見子は、いった。
なぜか、十津川は、あわてた調子で、
「それは、いけません。じっと、お父さんの帰りを、待っていらっしゃい」
季見子には、十津川の態度が、不可解だった。
父の失踪については、何も知らないという。そのくせ、季見子が、小樽へ、父を探しに行くというと、やめなさいと止めるのは、どういうことなのだろう。
父のことで、彼が電話して来たのだって、警視庁のOB会云々のためとは、信じられなかった。
父の近況について聞きたかったといっているくせに、十津川が、心配していたのは、父の旅行のことだけである。本当に、近況を知りたいのなら、父の健康状況だって、父の現在の仕事のことだって、聞くべきではないのか。
（本当に、心配してくれているわけではないのだ）
季見子は、それを結論にして、電話を切ってしまった。
明日、小樽へ行ってみよう。そう思い、季見子は、二階の父の部屋を調べてみることにした。
父が、書斎として、使っていた六畳の部屋である。
季見子は、掃除してあげようとして、入って、父に叱られたことがあった。それ以来、足を踏み入れた

ことがない。

襖を開けて、中に入り、季見子は、灯をつけた。

大きな机が、窓際に置かれ、反対側には、布団が、敷きっ放しになっていた。父は、何か調べていて、そのまま、ここで寝てしまうことも、あったらしい。

本棚には、警察関係の本が多かった。そのことが、季見子には、まず、意外だった。二十年前に、警察を辞めてから、父が、警察のことを話すのを、季見子は、聞いたことがなかったからである。

最近買ったらしい警察関係の本もある。それに、警察の内部の広報誌の山。ずっと、この雑誌は、購読していたようである。

(父は、まだ、警察に、未練があったのだろうか?)

それが、不思議だったが、季見子が一番知りたかったのは、父が、小樽へ行った理由だった。

小樽で、誰かに会うつもりだったのなら、その相手の名前を知りたい。

父は、いつも、黒い皮の手帳を持っていたのだが、どこを探しても、見つからなかった。持って、出かけたのだろう。

電話機の傍に、メモ帳がある。それを、繰って、一つの言葉を、見つけ出した。

〈小樽——がんがん部隊〉

書かれてあったのは、それだけである。

(何のことだろう?)

と、季見子が、思った時、階下で、突然、小さな物音がした。

季見子は、びくっとした。

耳をすませたが、また、静かになっている。

(気のせいだったのだろうか?)

と、思った時、

「がたッ」

と、今度は、はっきりと、物の倒れる音がした。

父がいれば、昔とったきねづかで、飛び出して、見てくれるのだが、今は、季見子一人である。

それでも、季見子は、自分を勇気づけながら、そ

つと、階段を、降りて行った。
ひょっとすると、父が、帰ったのではないかという気もあった。
十日に、帰るといったのに、それが、のびのびになり、おまけに、連絡をして来なかった。それが、照れ臭いので、こそこそ、帰って来たのかも知れない。
そんなところのある父だった。
「お父さん？」
と、階段の途中に、立ち止まって、一階の暗がりに向って、呼んでみた。
返事がない。
一階の廊下の灯はついているのだが、部屋の電灯は、消してある。
季見子は、怖いのを我慢して、六畳の部屋に入ると、壁のスイッチに、手を触れた。
オンにしようとした瞬間である。
突然、人の気配が近づき、大きな手が、背後から、季見子を、抱きしめた。
手が、彼女の口を、ふさごうとする。
「声を立てると、殺すぞ」
と、男の声が、いった。
が、季見子は、その前に、悲鳴をあげていた。
「この野郎！」
と、相手は、怒声をあげ、季見子のくびを締めた。
強い力だった。
痛みと、苦しさが、同時に、季見子を襲った。叫ぼうと思うのだが、声にならない。
相手の手に、ますます、力が加わってくる。季見子の意識が、薄れてきた。
（このまま、死ぬのだろうか――）
と、思った時、ふいに、相手が、季見子の身体を、放り投げた。
季見子には、何が起きたのか、わからない。
ただ、息を、ぜいぜいしながら、ぼんやりと、暗闇の室内を見ていた。

黒い影が、一つではなく、二つ、激しく、ぶつかり合っているのが、見えた。
片方が、逃げ出した。
襖の倒れる音が、した。
二つの影が、部屋を飛び出していった。
季見子は、のどを押さえながら、よろよろと、立ち上って、電灯をつけた。
ぱっと、六畳の部屋が、明るくなった。
その明りの中に、若い男が、入って来て、季見子を見た。
季見子が、あわてて、逃げようとすると、相手は、手を振って、
「怖がらないで下さい。私は、警察の人間です」
といい、黒い警察手帳を取り出して、彼女に、見せた。
それでも、季見子は、信じられずにいると、相手は、
「警視庁捜査一課の日下刑事です」
と、名乗った。
どうやら、本当らしいと感じて、季見子は、その場に、座り込んだ。
急に、力が抜けていく感じで、溜息をついてから、
「さっきの男は？」
と、きいた。
「残念ですが、逃がしてしまいました。足の速い男です」
「あなたは、なぜ、ここにいたんですか？」
季見子は、咎めるように、きいた。助けてくれたのは、有難かったが、疑問は、疑問だった。
若い日下刑事は、軽い困惑の表情を、浮べながら、
「上司の十津川警部に、指示されたんです。こちらで、何かあるかも知れないので、注意して、守れ、と。こちらに着きましたら、玄関横の窓ガラスが開いていたので、おかしいと思ったら、あの男が、忍び込んでいたわけです」
「十津川警部さん？」

「ええ」
「なぜ、急に、十津川さんが、私のことを、心配して下さったんですか？　おかしいわ」
　季見子は、皮肉をこめて、いったのだが、日下は、わからないという顔で、
「理由は、聞いておりません。とにかく、急いで、行って来いと、いわれただけです」
「父が、小樽から帰って来ないことと、関係あるんですか？」
「小樽って、何のことか、わかりませんが」
　と、日下は、首をかしげた。本当に、わからないという顔付きだった。
「十津川さんに、電話して、確かめたいんですけど、今、どこに、いらっしゃるのかしら？」
「もう、自宅へ帰っていると思います」
「電話番号、知りません？」
「わかりません。申しわけありませんが――」
「いいわ。明日、かけます」
と、季見子は、いった。
　十津川に対する腹立たしさは、まだ、消えていなかったが、眼の前の若い刑事には、関係のないことだと、思い直して、
「今、お茶をいれますわ」
　といった。
　だが、日下は、気を遣わないで下さいといい、軽く一礼して、家を出て行った。
　二階へあがって窓から見ていると、日下は、前の通りのところで、立ち止っていた。
　季見子は、しばらく、日下刑事の様子を見ていた。通りの電柱のかげに立って、じっと、季見子の家を、見張っている。
　彼のおかげで、殺されかけたのを、助かった。感謝しなければいけないのだろうが、季見子は、単純に、その気には、なれなかった。
　十津川という警部の態度が、まずおかしい。
　最初、父のことで、電話して来たのは、向うなの

だ。それも、一度ではなかった。

それなのに、父が失跡したあとは、妙に、冷たかった。

そして、今度は、部下の刑事に命じて、季見子の護衛をさせている。その変り方が、彼女には、不可解だし、信用できない感じがするのである。

通りの向うで、電柱のかげに立っている日下刑事にしても、確かに、今は、季見子を守ってくれたが、じっと見ていると、彼女を守ってくれているのではなく、監視しているような気もしてくるのだ。

季見子は、もう一度、父の部屋に入った。

〈小樽――がんがん部隊〉

の文字が、嫌でも、眼に入ってくる。

がんがん部隊というのは、いったい何なのだろうか？

父は、軍隊経験があると、聞いていた。戦争末期、軍隊に入ったが、内地で、敗戦を迎えたらしい。

がんがん部隊というのは、その時、父が入っていた部隊の愛称か何かなのだろうか？

父は、敗戦の時、二十歳だった。敗戦の時、日本全国で、さまざまなことがあったらしい。

そんな秘話のような読み物を、季見子は、読んだことがある。

場所によっては、ひどいこともあったようである。

父が、敗戦の時、小樽にいて、そこの部隊で、何かあったのか？

そのことが、四十年以上たった今、父を、小樽に、行かせたのだろうか？

季見子は、机の引出しから、名刺のホルダーや、手紙の束を取り出して、調べてみた。

三十分近くかかって、一枚の名刺を見つけ出した。

〈〇〇部隊の戦友〉

と、父が、書き込んである名刺である。名刺の主は、N銀行の支店長だった。

季見子は、自宅と書かれた方の電話番号を回した。

「佐々木完治の娘の季見子ですけど」

と、季見子が、いうと、

「ああ、お嬢さんですね？　どうしました？」

「敗戦の時、父は、日本のどこにいたんでしょうか？」

と、季見子が、きくと、相手は、

「お父さんは、何といわれているんです？」

「父は、今、留守なんです。それで、どうしても、そのことが、わからないと、困る事情が、出来たんです」

と、季見子は、いった。いろいろと、質問されるかなと思った、相手は、あっさりと、

「九州の大分にいましたよ。米軍が、沖縄の次は、九州に上陸して来るらしいということで、緊張していましたがね。戦争が終ってしまって、助かりました」

と、いった。

「では、北海道へは、一度も、行かなかったんですか？」

「ええ。行きませんよ」

「父のいた部隊ですけど、がんがん部隊という愛称が、ついていませんでした？」

「愛称ですか？　そんなものは、ついていませんでしたね。あの頃は、どうせ、全員、戦死すると思っていたから、冗談をいう余裕はなかったんですよ」

相手は、説明する口調で、いった。

「父に、最近、お会いになりましたか？」

と、季見子は、きいてみた。

「そうですね。一ケ月ほど前に、渋谷で、会いましたよ。時間ねえ。私が、仕事を了えてからだから、夕方の七時頃だったと思いますね」

「その時、父と、何か、お話をなさいましたか？」

「久し振りに会ったというので、私は、一緒に、飲

もうと思いましてね。行きつけの店へ誘いました。佐々木さんは、つき合ってくれたんですが、意外に、話が弾まなかったですねえ。佐々木さんは、何か、問題を抱えているみたいでしたよ。前に会った時は、昔の軍隊時代のことで、話が弾んだんですが、一ケ月前の時は、同じ話をしていても、佐々木さんは、生返事ばかりされていましたよ。何か、思い悩んでいることが、あったんだと思いますね」

「それが、何なのか、おわかりになりますか？」

「さあ。はっきり、佐々木さんは、いいませんでしたからね」

と、相手は、いったが、間を置いてから、

「あの時、一つだけ、佐々木さんが、いったことを、思い出しましたよ。あの時は、何ということもなく、聞き流してしまったんですが」

「どんなことを、父は、いったんでしょうか？」

「唐突にこういわれたんです。『男は、一生に一度くらい、命がけでやらなければならない問題を持っているんじゃないか』とです。今でも、佐々木さんが、何を頭に描いていったのか、わからないんですがね」

（そのことと、小樽行が結びつくのだろうか？）

小樽への旅

午前二時近くになって、季見子は、やっと、眠ることが出来た。

翌朝、季見子は、起きると、テレビのニュースを見てみた。

昨夜のことが、どんな風に、報道されているか、知りたかったからである。

しかし、ニュースは、全部見たが、季見子が襲われた事件は、最後まで、出て来なかった。

別に、報道して貰いたいわけではないが、あの日下という若い刑事は、当然、事件のことを、上司に報告した筈だと、思ったからだった。

それなら、嫌でも、ニュースになっている筈である。

多分、十津川が、おさえて、マスコミに、知らせなかったのだろう。

(なぜ、そんなことをしたのだろうか?)

季見子は、九時を過ぎてから、警視庁に、電話をかけた。

十津川を呼び出して貰ってから、

「なぜ、あんなことをなさったんですか?」

と、きいた。

「何のことか、わかりませんが」

十津川は、本当に、当惑したような声を出した。

季見子は、むっとしながら、

「あなたの部下の日下という刑事さんのことですわ。私は、昨夜、強盗に、家の中で襲われました。丁度、その時、日下刑事さんに助けて頂きましたが、お礼は、お礼として、お聞きしたいことがあるんです」

「どんなことですか?」

「なぜ、日下さんを、うちへ寄越したんですか? な

ぜ、私が、襲われると、わかったんですか？」
「いや、別に、わかりませんよ。ただ、佐々木さんのいらっしゃる地区で、痴漢が出るので、取締ってくれという電話があったので、日下君に、行って貰ったわけです」
「日下さんは、そんな風には、いいませんでしたよ」
「もう一度、お聞きになれば、正確にいうと思いますがね」
と、十津川は、いった。
「それは、あなたが、日下さんに、口止めなさったんでしょう。それに、昨夜の事件は、あなたが、マスコミに、洩らさなかったんだと思いますわ。新聞に出ていませんでしたもの。なぜ、そんな小細工をなさるんですか？」
「別に、何もしていませんよ。日下君の話では、昨夜は、お宅の近くでは、何の事件も起きなかったと、いっていましたがね」
「なぜ、そんな嘘をつくのかしら？」
「嘘はついていませんよ」
と、十津川は、いった。
季見子は、のれんに腕押しの感じに、ますます腹を立てながら、
「この際、いっておきますわ。私は、今日、父を探しに小樽へ行きます」
「小樽へ？　行くんですか？」
十津川は、明らかに、あわてている。
「これから、行って来ます」
「それは、やめなさい。お父さんは、間もなく、帰って来ますよ」
「十津川さんは、今、父がどこにいるか、ご存知なんですか？」
と、季見子は、きいた。
いや、知りませんが――
「それなら、なぜ、止めるんです？　行方不明になった父親を、探すのは、娘としたら、当然のことじゃありません？　それとも、私が、父を探すと、十

津川さんは、お困りになるんですか？」
季見子は、意地悪く、きいてやった。
「そんなことは、ありませんが、お父さんが、連絡して来た時、あなたが家にいないと、困ると思うのですよ」
「それは、おかしいわ。父が無事なら、私が留守だって、ちゃんと、帰って来る筈ですわ。そうでしょう？」
「もう一日、待てませんか？」
と、十津川が、いった。
「待てませんわ。今日中に、行くつもりです」
季見子は、宣言するように、いった。
「やみくもに、小樽へ行っても、お父さんは見つかりませんよ。本当に、心配なら、警察に、捜査願を出しなさい。警察が、探します」
「その警察が、信用できないんです」
それだけいって、季見子は、がちゃんと、電話を切った。
気持が、すっとすると同時に、十津川に対する新しい疑惑も、生れて来た。なぜ、十津川という警部は、彼女の小樽行を、やめろというのだろうか？
何か、季見子に、行かれては困ることがあるのかも知れない。
東京から、小樽へ行く直通の飛行機はない。季見子は、身廻品をショルダーバッグに詰め、キャッシュカードを持って、家を出た。
日下という若い刑事の姿は、もう、見当らなかった。
まっすぐ、タクシーで、羽田空港に向った。道路が、渋滞していて、羽田に着いたのは、十一時過ぎである。
一一時三〇分発のＪＡＬ５０９便の切符を買うことが出来た。
まだ梅雨が明けず、学校の夏休みも始まっていないので、それほど、混んではいなかった。
搭乗すると、機内は、八十パーセントほどの乗客

である。

窓際の席に腰を下すと、季見子は、緊張した気分になった。

小樽に行けば、父は、見つかるのだろうか？

季見子を乗せたＪＡＬ５０９便は、一二時五五分に、千歳空港に着陸した。

タラップを降りながら、季見子は、周囲を見廻した。

梅雨がない北海道といわれるだけに、よく晴れた空が、頭上に広がっている。それは、都会の真ん中の空港と違って、周囲は、広々とした原野である。

（気持がいい――）

と、季見子は、爽やかな空気を吸い込んだが、ふと、空港建物の三階にある送迎デッキに眼をやって、眉をひそめた。

送迎デッキには、七、八人の人影があって、手を振ったりしているのだが、その中に、サングラスをかけた若い男がいた。

（あの刑事だわ）

と、直感した。

日下という刑事である。

家の前から、姿を消したと思っていたら、十津川が、指示して、ここへ、先廻りさせたのだ。

多分、一便前の飛行機で、着いたのだろう。

電話で、季見子は、十津川に向って、小樽へ父を探しに行くと、宣言した。それに、素早く反応したということらしい。

視線が合うと、相手は、送迎デッキから、さっと、姿を消してしまった。

（なぜ、こんなことをするのだろう？）

と、季見子は、到着ロビーに向って歩きながら、考え込んだ。

日下刑事は、東京では、確かに、季見子を守ってくれた。

しかし、送迎デッキにいたのは、そのためとは、思えなかった。彼女の行動を監視しているとしか考

えられない。
父は、突然、小樽へ行った。
今まで、一度も行ったことがない小樽へである。
少くとも、季見子は、小樽のことを、父から、聞いたことがなかった。
その小樽行が、警察にとって、面白くないことだったのだろうか？
（しかし、父は、二十年前に、警察を辞めているのに――）
とも、思う。
その後の二十年間、何事もなかったのだ。
季見子は、父から、刑事時代の話を、聞いたことがない。
季見子は、ロビーから、連絡橋を渡って、千歳空港駅へ歩いて行った。
時々、振り返ってみたが、日下の姿は、眼に入らなかった。といっても、相手は、プロである。季見子にわからないように、尾行するぐらい、簡単だろう。
札幌で、乗りかえることにして、季見子は、一三時二五分発の特急「ライラック13号」に、乗った。
四両編成の短かい特急列車である。
車内は、すいていたが、日下が乗ったかどうかは、わからなかった。
札幌には、一三時五七分に着いた。
ここで、一四時一一分発の快速列車に、乗りかえる。
札幌発、長万部行だが、札幌から小樽までが、快速になる気動車である。
小樽着一四時四七分。
午後の陽射しが、爽やかだが、強かった。
季見子は、持って来たサングラスをかけた。
改札口を出てから、まだ、昼食を食べていないことを思い出し、駅近くの食堂に、入った。
小さな食堂で、メニューを見て、ハンバーグライスを注文した。そのあと、自分の気持を、引き立て

るためにビールも、頼んだ。
これから、どうしたらいいのだろうか？
と、運ばれて来たビールを、飲みながら、考えた。
父の写真を、持って来た。それを、この町の人たちに見せて歩いたらどうだろうか？
父は、かなり特徴のある顔立ちをしているから、会った人は、覚えている可能性がある。しかし、小樽の人、全員に、見せるわけにもいかない。そんなことをしていたら、何ケ月も、かかってしまうだろう。
唯一の手掛りといえば、父が、書いた「がんがん部隊」という言葉である。
季見子は、食堂で、料金を払う時、店の主人に、
「がんがん部隊って、知っていますか？」
と、きいてみた。
三十歳ぐらいに見える小太りの相手は、首をかしげて、
「がんがん部隊？　何ですか？　それは」
「私にも、わからないんです。私の父が、がんがん部隊に、会いに、東京からこちらへ来て、いなくなってしまったんです」
と、季見子は、正直に、いった。
「そいつは、大変だなあ」
と、相手は、いってくれたが、結局、がんがん部隊のことは、知らないという返事しか貰えなかった。
礼をいって、季見子は、店を出ると、公衆電話ボックスを見つけて、中に入った。
そこにあった電話帳のページを、繰ってみた。
ひょっとして、「がんがん部隊」が、電話帳にのっているのではないかと思ったからだが、いくらページを繰ってみても、出ていなかった。
（どこへ行ったら、がんがん部隊に、会えるのだろうか？）
季見子は、駅に戻り、タクシーのりばで、タクシーに、乗り込んだ。
「とりあえず、この小樽の町を、ぐるりと廻って下

さい」
と、季見子は、中年の運転手に、頼んだ。
運転手は、いい客だと思ったらしく、即席で、観光案内をしながら、車を走らせた。
小樽駅から始まって、旭展望台、博物館と廻って有名な運河へ着いた。
「ちょっと、おろして」
と、季見子が、急に、いった。
運転手は、車をとめ、ドアを開けてから、したり顔で、
「ここは、景色のいいところで、観光客は、必ず、写真を撮りますよ」
と、いった。
が、季見子は、その説明を、聞いていなかった。
彼女は、呆然と、運河の対岸に連なる石造りの倉庫群を、眺めていた。
夜には、ガス灯がつくという。
運河の水面は、どんよりと暗い。
ふと、季見子は、眼を閉じた。二、三秒してから、眼を開けた。
(この運河の景色を、前に見たことがある)
と、思う。
父も、母も、小樽の話をしたことはなかった。季見子自身も、物心ついてから、小樽には、来ていない。
だから、小樽は、初めての土地と思っていたのだ。
列車を、小樽駅で降りた時も、その気持は、変らなかった。
(しかし、この運河は、前に見ている)
と、思うのだ。
よく、初めての土地なのに、前に来たことがあるような気がすることがあるといわれる。それを、何とかいうらしいが、今の季見子の気持は、それではなかった。
(前に、来たことがある)
と、思うのだ。

父か、母が、季見子が、まだ、物心つかない時、ここへ、連れてきたことがあったのでは、ないだろうか？

多分、二歳か、三歳の時だ。そうだとすると、父が、まだ警視庁で働いていた頃ということになる。

季見子は、運河沿いの散歩道を、ゆっくりと、考えながら、歩き出した。

ここは、若者の散策の場所とみえて、時々、若いカップルと、すれ違った。

父も、母も、季見子を、小樽へ連れて行ったという話をしたことは、なかった。

だが、季見子は、自分が、幼い時、父か母に、連れられて、ここに来たのだと、思った。

そして、父は、今、この小樽で、行方不明になってしまっている。

「大丈夫ですか？」

と、運転手が、声をかけた。

どうやら、季見子が、運河に飛び込むとでも、思ったらしい。

季見子は、笑って、「大丈夫よ」と、いってから、タクシーには、余分に払って、帰って貰うことにした。

しばらく、ひとりで、考えたかったからである。

今度の旅で、父は、この運河を見に来たに違いない。季見子は、そう確信した。それに、二十何年か前にも、父は、ここに、立っていたに違いない。

季見子は、町の繁華街に向って、歩いて行った。

わざと、古びた喫茶店を見つけて、中に入ってみた。

有難いことに、六十五、六歳の老人夫婦がやっている店だった。こういう夫婦なら、「がんがん部隊」について、何か知っているかも知れない。

二人いた客が、店を出て行ったあと、季見子は、カウンターに、席を移して、マスターに、話しかけた。

「小樽に、がんがん部隊って、あるらしいんだけど、

知りませんか？」
と、季見子が、きくと、マスターは、あっさりと、
「ああ、知ってますよ」
と、いった。
季見子は、ほっとすると同時に、何か、拍子抜けの感じを受けながら、
「それ、どんな部隊なんですか？　今でも、生き残りの人がいるんでしょうか？」
「生き残り？」
マスターは、おうむ返しにいってから、クスッと笑って、
「そういえば、今、残ってるのは、みんな、婆さんばかりだねえ」
と、いい、隣りで、カップを洗っている奥さんを見た。
「最高は、七十二歳だそうですよ」
と、奥さんが手を動かしながら、いった。
「がんがん部隊って、女の人たちの集まりなんですか？」
季見子が、きくと、マスターは、眼を、ぱちぱちさせて、
「お客さんは、何だと思っていたんですか？」
「戦時中の兵隊さんたちかと、思っていたんですけど」
「部隊っていうからですか？」
と、マスターは、また、笑った。
「戦争とは、関係ないんですね？」
「ぜんぜん。行商のおばさんたちのことですよ。この辺でとれた新鮮な魚を、札幌あたりに売りに行くんだけど、みんな大きなブリキの箱を背負って、団体で動くんで、がんがん部隊と、呼ばれているんですよ。昔は、何十人っていたけど、今は、少くなったし、年寄りばかりになってしまっていますよ」
と、マスターは、いった。
「いつ頃から、がんがん部隊というのは、あるんですか？」

季見子は、もう一杯、コーヒーを注文してから、マスター夫婦に、きいた。
「日本が戦争に負けてすぐからじゃないかしら」
と、奥さんの方が、いった。
「だから、もう、二十年も、三十年も、やってるんだよ」
と、マスター。
「誰か、その中の一人に、紹介して頂けませんか？」
「あんたが、行商をやるんですか？」
「いえ。会って、話を聞きたいんです。仕事のことなんか」
「新聞か、雑誌の人なの？」
と、マスターが、きいた。季見子は、どう返事したらいいか、迷ったが、
「ええ。まあ」
と、あいまいな返事をした。
「誰か知っているかい？」
と、マスターが、奥さんに、きく。
「タキさんなら、知ってますよ」
「その人に、会ってみますか？」
と、マスターが、季見子を見た。
「ええ。ぜひ、会わせて下さい」
「電話してみましょう」
と、奥さんは、気軽くいって、タキさんという人に、連絡をとってくれた。
それから、一時間ほどして、タキさんが、店にやって来てくれた。
七十歳だという、柴田タキさんは、小柄だが、元気のいいお婆さんだった。
昭和三十年頃から行商の仕事をやっていて、今でも、札幌の近くまで、列車に乗って、売りに行くという。
季見子は、タキのために、ケーキと、紅茶を注文してから、父の写真を、見せた。
「この人が、あなたか、あなたのお仲間に、会いに来たと思うんですけど、心当りはありません？」

と、きくと、タキは、眼鏡を取り出して、ゆっくりと、写真を見た。
「来ましたか？」
季見子は、せっかちに、きいた。
「この人、東京の人かね？」
「ええ。東京から、あなた方に、会いに来た筈なんですけど」
「それなら、定子さんに会いに来た人だ」
と、タキは、いった。
「その定子という人も、あなたと同じ行商の仲間ですか？」
「そうだよ。あたしとは、もう三十年も一緒にやってるよ」
「定子さんには、どこへ行けば、会えますか？」
「あたしが、案内してあげるよ」
「お願いします」
「このケーキを食べてからでいいかね？」
タキは、呑気に、いった。
タキは、ゆっくりと、ケーキを食べ、紅茶を飲み終ると、よっこらしょと、腰をあげた。
「この近くなんですか？」
と、季見子は、相手に、きいた。
「歩いて、すぐだよ」
と、タキは、いった。
七十歳でも、タキの足は、しっかりしたものだった。毎日、重い荷物をかついで、行商しているからだろう。
彼女は、すぐ近くだといったが、実際には十五、六分も、歩かされた。
長屋風の家が、並ぶ地区に来て、その一軒の前で、タキが、立ち止った。
「定子さんは、ここに、ひとりで、住んでるんだよ」
と、タキは、その家を、指さした。
平家建の小さな家だが、玄関の横には、植木鉢が、きちんと並び、花が、咲いていた。
（ここに、父は、来たのだろうか？）

と、季見子は、思いながら、「伊藤」と書かれた表札を見やった。

「伊藤定子さんと、いうんですか？」

「そうだよ。一昨日から、会ってないんだ。あたしが、用があって、長万部の親戚へ行ってたもんだからね」

と、タキは、いいながら、玄関を開け、中に向って、

「定子さん。いるかい？」

と、大声で、呼んだ。

季見子も、タキと一緒に、家の中を、のぞき込んだ。

返事はない。

「変だね。まさか、病気で寝てるんじゃないと思うけどねえ」

タキは、そんなことを呟きながら、もう一度、

「定子さん！　お客さんだよ」

と、呼んだ。

「留守なんでしょうか？」

「開けっ放しで、不用心だよ。きっと、近所に、買物に行ってるんだと思うけどね」

「私は、ここで、待っていますわ」

と季見子は、いった。

「外で？」

「ええ」

「それなら、中に入って待ってなさいよ」

「いいんですか？　留守に、あがったりして」

驚いて、季見子が、きくと、タキは、先に玄関を入りながら、

「三十年のつきあいだからね。定子さんだって、あたしの留守に、勝手にあがってるよ」

と、いった。

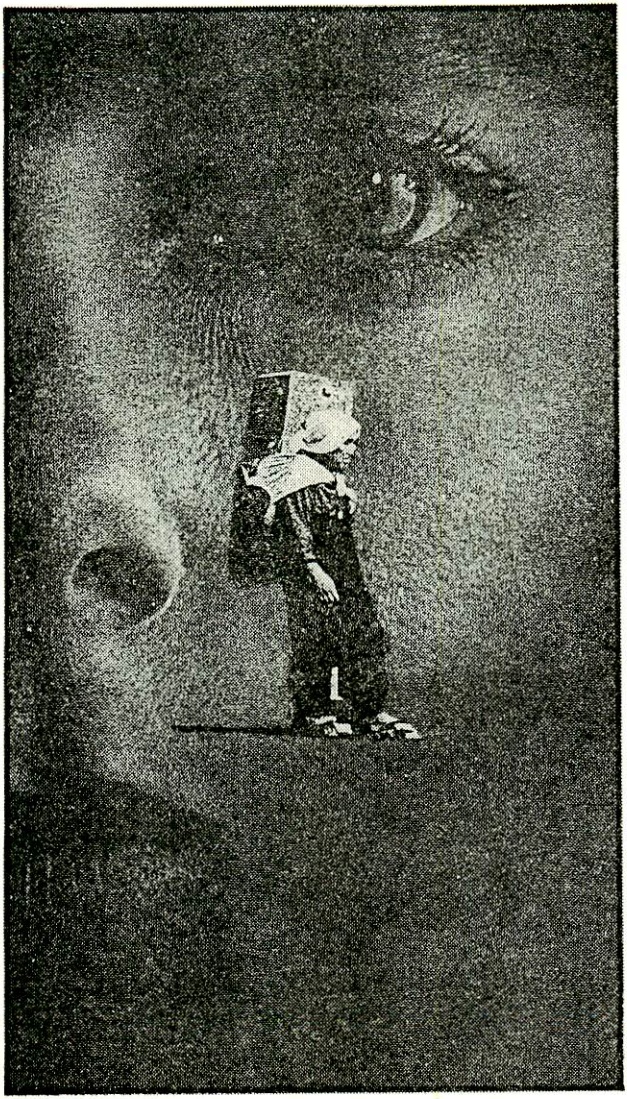
六畳と、四畳半の二間だけの家だった。

先に、座敷に上って行ったタキが、突然、

「わあっ」

と、悲鳴をあげて、その場に、座り込んでしまっ

た。
小柄な老婆の身体が、かもいから、ぶら下っていたのだ。
季見子も、真っ青な顔になりながら、必死に、ぶら下っている老婆を、見つめた。
黒い紐で、首を吊っているのだ。
「定子さん？」
と、タキにきいたつもりなのだが、声が出ない。
驚きと、恐怖で、季見子の身体は、小刻みにふるえている。
タキは、畳の上にうずくまって、眼を閉じ、口の中で、何か呟いていた。念仏でも、呟いているのだろうか。
季見子は、がくがくする足で、家の外に出ると、近くにいた人たちに向って、
「助けて！」
と、叫んだ。
何事だという顔で、寄ってくる人たちに、
「警察を呼んで下さい！」
と、甲高く、いった。
五、六分して、パトカーが、やって来た。
警官二人が、おりて来て、家の中を見たが、あわてて、車の無線電話で、事件を、連絡した。
パトカー二台と、鑑識の車が、駆けつけた。
堀井という刑事が、ぶら下っている死体を見てから、季見子に向って、
「あなたが、発見者ですか？」
「私と、この人です」
と、季見子は、まだ、へたり込んでいるタキを、指さした。
「仏さんは、あなたの知り合いですか？」
「いえ。このお婆さんが、よく知ってるんですわ」
「じゃあ、あなたと、仏さんの関係は？」
と、堀井刑事は、厳しい眼で、季見子を見た。
鑑識は、ぱちぱちと、現場写真を撮りまくってから、やっと、老婆の死体を、畳の上におろした。



そんな光景を、季見子は、見やりながら、
「別に、関係は、ありませんわ」
「関係がないのに、なぜ、ここにいるんですか？」
咎める感じで、堀井が、きいた。
「観光に来て、行商の人が珍しいんで、会いに来たんです。そうしたら、こんなことになっていて」
と、季見子は、いった。父のことは、警察には、今は、いいたくなかった。
「そうですか？」
と、堀井は、タキに、きいた。
タキは、呆然とした顔で、横たえられた死体を見ていたが、
「定子さんですよ」
と、堀井に、いった。
「この家の主の伊藤定子さんということですね？」
「ええ。そうですよ」
「どうして、こんなことになったか、わかりますか？」
タキは、やっと、生気を取り戻し、畳の上に、座り直してから、
「どうして、こうなったか、あたしにだって、わかりませんよ」
と、刑事に、いった。
「自殺するような様子は、なかったんですか？」
「そんな様子なんか、ありませんでしたね」
「しかし、ひとりで、ここに住んでいたんでしょう？」
「ええ」
「子供は、いなかったんですか？」
「息子さんが、結婚して、旭川にいると聞いていますけどね」
「ひとり暮らしで、寂しくて、発作的に、自殺したということは、考えられませんか？」
と、堀井が、きいている。
季見子は、刑事が、この事件を、自殺と決め込んでいるような気がして、仕方がなかった。

「あたしには、わかりませんよ」
と、タキは、いった。
「あなたは、どうですか？」
堀井刑事は、じろりと、季見子を見た。
「私は、今もいったように、行商の話を聞きたくて、この人に、案内して貰って、ここへ来たんですわ。死んでるなんて、思ってもみませんでした。第一、ここへ来たのは、今日が初めてなんです」
「どこから来たんです？」
「東京からです。名前は、佐々木季見子です。観光に来たんです」
と、季見子は、いった。
「そうですか？」
と、堀井は、タキを見た。
「ええ、この人は、関係ありませんよ。東京から来た人で、あたしが、定子さんを紹介しようと思って、ここへ、お連れしたんですよ」
と、タキは、いってくれた。

タキが、父のことを口にしなかったことに、季見子は、ほっとした。それでも、季見子は、タキと一緒に、小樽警察署に連れて行かれ、調書をとられた。警察を出たのは、もう、夕方になっていた。
「どうして、定子さんは、あんな死に方をしたんでしょうか？」
と、季見子は、タキに、きいてみた。
「さあねえ、わかんないねえ。やっぱり、ひとりで、寂しかったのかねえ」
「でも、旭川には、息子さん夫婦が、いらっしゃるんでしょう？」
「そうだけど、息子の嫁とは、あんまり、上手くいってなかったようだからね」
「私の父は、本当に、定子さんに、会ったんでしょうか？」
「と、思うよ。あたしが、あの家を教えたら喜んで、出かけて行ったからねえ。だから、会った筈だよ」
と、タキが、いった。

過去へ

その日、季見子は、小樽市内のホテルに泊ることにした。

坂の多い小樽の町の高台にあるホテルで、窓を開けると、市内の灯がきらめき、その向うに、暗い海が、広がって見えた。

夕食をすませたあと、事件の経過を知りたくて、部屋のテレビをつけてみた。

午後七時のニュースだった。

〈七十歳の行商人死ぬ
がんがん部隊の伊藤定子さん〉

と、いうテロップが出た。

彼女の顔写真が、画面に現われる。まだ、若々しい顔だから、十年か、或いはもっと前の写真かも知れない。

アナウンサーが、事件の経過を説明する。

行商の柴田タキさんが、観光客の佐々木季見子さん（二十五歳）の頼みで、仲間の伊藤定子さんを訪ねたところ、定子さんが、かもいから、帯紐で、首を吊っているのを見つけ、警察に届けた。

佐々木季見子さんが、小樽の行商の人たち、通称、がんがん部隊の話を聞きたいというので、タキさんが、この仕事にくわしい定子さんに、紹介することにしたのである。

小樽警察署で調べたところ、外傷はなく、孤独感から、自殺したのではないかと見られるが、他殺の可能性も否定できず、その面からの捜査も、すすめている。

がんがん部隊は、最盛時には、二百人近い人数だったが、今は、三分の一に減っており、死んだ伊藤

定子さんは、三十年以上、行商を続けているベテランだった。

それだけで、ニュースは、別のものに、変ってしまった。

季見子は、自分の名前が出たことに、戸惑いながら、これから、どうしたらいいだろうかと、考え込んだ。

伊藤定子という行商の人に会えば、何か、父の消息が聞けると思ったのに、その伊藤定子は、死んでしまった。

（あれは、本当に、自殺なのだろうか？）

と、季見子は、考える。

誰かが、季見子の邪魔をしようとして、殺したのではないのか？

九時のニュースになると、小樽署は、自殺と断定してしまった。

その理由を、二つ、あげていた。

最近、痛風で、足が痛み、行商に行くのが辛いと、なげいていたこと。

息子夫婦との仲が、必ずしもうまく行っていないということで、八年前に亡くなった夫のもとに、早く行きたいと、もらしていたこと。

この二つの理由だった。

いかにも、もっともらしい理由である。

息子夫婦と別れて、ひとりで生活していたことも事実のようである。だからといって、自殺が、本当なのだろうか。

次の日、朝食を、一階の食堂でとりながら、季見子が、新聞を見ると、新聞の記事も、「自殺」と、なっていた。

正直にいって、季見子にとっては、伊藤定子の死が、自殺でも、他殺でも、どちらでもいいことだった。定子の死で、父の消息がつかめなくなるのが、困るのだ。

季見子は、もう一日、泊ることにして、昼近くなると、ホテルを出て、昨日の喫茶店に、出かけて行

った。
モーニングサービスの札が、出ていた。店の中は、がらんとしている。
季見子は、「昨日は、ありがとうございました」と、マスター夫婦に、礼をいってから、カウンターに腰を下し、ミルクと、トーストを、注文した。
「昨日は、大変でしたねえ」
と、マスターが、季見子に向って、いった。
「びっくりなさったでしょう?」
マスターの奥さんが、いう。
「本当に、びっくりしましたわ。マスターは、あのお婆さんのことを、よく知っているんですか?」
「いや、私らは、よく知らんのですよ。知っているのは、タキさんです」
「昨日、私を、連れて行って下さった方ですね?」
「そう、あの婆さんは、仲が良かったみたいですよ」
と、マスターは、いった。
季見子は、ひとりで、柴田タキを訪ねる気で、マスターに、彼女の家を、聞いた。
タキは、定子と違って、息子夫婦、それに彼等の子供たちと一緒に、住んでいるのだということだった。
季見子は、タキの好物を聞き、近くの果物屋で、西瓜を買い、それを持って、彼女の家を訪ねた。
タキは、家の庭で、二人の孫と遊んでいた。季見子の顔を見ると、顔を曇らせて、
「昨日は、大変だったねえ」
と、いった。
「タキさんは、あの人と、仲が良かったんでしょう?」
「そうだよ。行商仲間では、あたしと、定子さんが、古手だからね。いつも一緒に、商売してたね」
「痛風だったというのは、本当なんですか?」
と、季見子が、きいた。
タキは、二人の孫を、家の中に、追いやってから、
「足が痛いっていってたけど、そのくらいで、弱音

を吐くような人じゃなかった筈なんだがねえ」
と、首をかしげた。
「じゃあ、タキさんは、自殺する筈がないと、思っているんですか？」
と、季見子は、きいた。
「あたしには、わからないよ。警察は、自殺だって、いってるからねえ」
と、タキは、いった。
「私の父が、会いに行った時は、どうだったんでしょうか？　楽しく、話相手になってくれたんでしょうか？」
季見子が、きいた。父と、あの伊藤定子が、何を話したのか、知りたいのだ。
「あたしは、案内しただけで、すぐ、帰ってしまったからねえ。あの男の人は、あたしがいると、困るみたいな顔をしていたからね」
と、タキは、いう。
「そうですか――」
季見子は、がっかりした。
タキは、それを、気の毒だと思ったのか、
「今日の夕方、定子さんのところへ、あたしたちが、何人か集まるんだよ。定子さんの遺体の前で、みんなで、酒でも飲んで、昔話でもしようと思ってね。あんたも、来たらどうだね」
「いいんですか？　親しい方だけで、集まるんじゃないんですか？」
「まあ、そうだけどね。定子さんの息子夫婦にも、連絡せずに、やるつもりだけど、あんたとは、女同士だし、あんたのお父さんのことで、定子さんから、何か聞いてる人がいるかも知れないからね」
と、タキは、いってくれた。
季見子は、それに、甘えることにした。いったん、ホテルに戻り、陽が落ちてから、日本酒を買い、それを持って、定子の家へ、出かけて行った。
六畳の部屋に、棺が置かれ、その前に、十二、三人の行商のお婆さんたちが、もう、集まっていた。

全員が、六十歳から七十歳くらいの年齢で、陽焼けして、逞しい顔つきをしている。
もう、酔っ払っている人もいた。
タキに紹介して貰った季見子は、一升びん二本を、お土産にして、差し出した。
「あんたも、一緒に、飲みなさい」
と、一人が、命令するように、季見子に、いった。
季見子は、酒に強い方ではないが、差し出されるままに、コップを受け取り、注がれた冷や酒を、飲んだ。
「この人のお父さんが、この間、亡くなった定子さんに、会いに来たんだよ。誰か、そのことを、定子さんに、聞いてないかね？」
と、タキが、みんなの顔を見廻した。
「その人のお父さんて、昔、刑事さんだったんじゃないのかね？」
と、一人が、きいた。
「二十年前まで、刑事をやってました」
と、季見子は、そのお婆さんに、答えた。
「それなら、定子さんから、聞いたことがあるよ」
「どんなことでした？」
「なんでも、二十年前のことを、あれこれ、聞かれたって、いってたよ」
二十年前という数字は、季見子にとって、というより、失跡した父にとって、特別な意味を持っていた。
父は、二十年前に、突然、警察を辞めている。
季見子は、そのことについて、父に質問したこともなかったし、父が、話したこともなかった。
季見子は、かなり大きくなるまで、父が、かつて、警察で働いていたことすら、知らなかったくらいである。今から考えると、父や、母の間で、その話題は、タブーであったのかも知れない。
だが、二十年たった今、突然、父と警察のことが、よみがえって来た感じなのだ。
急に、警視庁捜査一課の十津川警部から、電話が

入って来るし、若い刑事が、季見子の周辺に、うろつくようになった。その上、父は、この小樽に、二十年前の話を、聞きに来たという。

「父は、二十年前の何を、定子さんに、聞きに来たんでしょう？」

と、季見子は、相手に、きいた。

「それがねえ、いろいろと、聞かれたというだけで、定子さんは、具体的にいわなかったねえ。あたしも、別に、興味はなかったから、それ以上、聞かなかったんだよ」

「二十年前も、定子さんは、行商をなさっていたんですね？」

「ああ、もちろんさ。あたしだって、この仕事を始めて、もう、二十五年だものね」

「二十年前、この小樽で、何か、事件があったんでしょうか？」

と、季見子は、きいた。

行商のお婆さんたちは、がやがやと、話し合っていたが、タキが、代表する恰好で、

「ふたむかしも前のことだからねえ。何か事件といわれても、わからないねえ」

と、いった。

確かに、そうかも知れない。自分に関係がなければ、一ケ月前のことでも、人間は、覚えていないものだ。

だが、父が、伊藤定子に、二十年前のことを、聞いたということは、彼女が、何らかの意味で、その事件に、関係していたのではあるまいか。

「定子さんが、二十年前に、何か、大きな事件に巻き込まれたということは、なかったのかしら？」

と、季見子は、きいた。

「そんなこと、なかったよ」

「定子さんは、真面目だものね」

「一度だって、警察の厄介になったことはないんだよ」

そんな言葉が、彼女たちの口から、一斉に飛び出

した。

どうやら、季見子は、彼女たちの自尊心を傷つけるような質問をしてしまったらしい。いや、傷つけたと、彼女たちに、誤解されてしまったらしい。

季見子は、他にも、いろいろと、聞きたいことがあったのだが、気まずい空気に、押し出されるように、外へ出た。

もし、伊藤定子が、自殺ではなくて、誰かに殺されたのだとしたら、その原因は、父が、彼女を訪ねたせいかも知れない。季見子はそんな気がした。

季見子は、ホテルへ戻ると、これから、どうしたものかと、考えた。

念のために、自宅へ電話をかけてみた。ひょっとして、父が、帰っているかも知れないと、思ったからである。

しかし、空しく、呼び出しのベルが、鳴るだけだった。

(父は、伊藤定子に、何を聞きに来たのだろうか?)

それがわかれば、少しは、父の失跡の理由に、近づけるかも知れない。

翌日、季見子は、ホテルで朝食をすませると、市の図書館に、行ってみることにした。

二十年前の新聞を読んでみたかったからである。

縮刷版はないといわれ、綴じ込みの新聞を見せて貰うことにした。

「小樽日報」という地元の新聞である。

二十年前といっても、その何年何月ということがわからないので、父が、警察を辞めた年、昭和四十二年の一年間の新聞を、一月分から、眼を通していくことにした。

まだ、受験の季節に遠いのと、夏休みになっていないせいで、図書館の中は、がらんとしている。

季見子は、古い新聞のページを繰っていて、すぐ、疲れてしまった。

何を探したらいいのか、それが、わからないからである。

大量殺人とか、何億円もの銀行強盗といった派手な事件なのか、それとも、逆に、交通事故のような小さな事件なのかも、わからないのである。

疲れたので、同じ階に設けられている休憩室で、ソファに腰を下した時、季見子は、サングラスをかけた男が、自分を見ているのに、気がついた。

眼が合ったとたん、相手は、視線をそらせてしまったが、図書館で、サングラスをかけているというのが、異様だった。

年齢は、三十五、六歳だろう。

季見子の見たことのない男だった。

(私を、見張っているのだろうか?)

と、考えたが、面と向って、きくわけにもいかなかった。たとえ、そうであっても、相手は否定するだろう。

季見子は、その男を、気にしながら、また、新聞に、眼を通すことにした。

小樽は、東京のように、凶悪事件が、頻発しては

いないようだった。が、それでも、三面には、さまざまな事件が、ニュースとして、のっていた。

(この中のどれだろう?)

父は、昔、刑事だった。

そこに、カギがありそうである。一般の人間なら、大きな事件に、関心を持つのが、自然である。

小さな傷害事件より、五人も、六人も殺すような連続殺人に、関心を持つのが、一般の人間だろう。

だが、刑事は、違う筈だと、季見子は、考えた。

どんな大きな事件でも、犯人が検挙され、解決していれば、もう、関心はなくなるだろう。

関心があるのは、未解決の事件ではあるまいか?

小樽駅を舞台にした五千万円、強奪事件というのが、二十年前に、起きていた。

もちろん、まだ、国鉄時代で、列車で運ばれた五千万円の現金が、駅員を装った男二人に、白昼、強奪された事件である。

大事件として、扱われている。

それが、一ケ月後になると、「迷宮入りか？」と、書かれていた。

どうやら、この事件は、犯人が、あがらないままに、時効になってしまったようである。

（この事件だろうか？）

しかし、父は、東京の警視庁の刑事だった。北海道の小樽の事件には、介入できない筈である。犯人が、東京の人間なら、別だろうが、それらしいことも、新聞には、出ていなかった。犯人が、全く不明のまま、時効になってしまっている。

東京からやって来た観光客が、ホテルで殺されたという記事もあった。

殺されたのは、一人で旅行していたＯＬである。胸を刺されての、出血死だが、室内が荒らされていたことから、物盗りに入った犯人が、居直って、彼女を殺したのだろうと、警察は、判断したと、書いてある。

ホテル荒しの常習者一人を、二日後に逮捕したが、証拠がなく、釈放してしまった。

この事件も、結局、未解決のまま、二十年たってしまっているらしい。

だが、この事件も、地元の警察が捜査していて、東京の警視庁とは、関係はないということになる。

運河に、身元不明の男の死体が、浮んでいたという事件もある。

年齢は四十二、三歳の男で、なぜか、全裸で、運河に浮んでいるのが、発見された。後頭部を、強打された痕があり、警察は、殺人事件とみて、捜査を始めているのだが、結局、身元さえわからないままに、迷宮入りしてしまっていた。

（これだろうか？）

しかし、この事件も、地元の警察の担当した事件で、東京の警察は、関係ないのではないだろうか？

（わからないわ）

季見子は、疲れ切って、眼を閉じると、考え込んでしまった。

結局、季見子は、新聞にのっていた事件をいくつか、メモしただけで、その日は、ホテルに、帰ることにした。

一番困るのは、検証する方法がないことだった。父に連絡がとれるか、父が、定子という行商の人に、何を聞いたかがわかれば、どの事件か、見当がつくのだが、今は、そのどちらも、不可能である。父は、相変らず行方不明だし、問題の行商のお婆さんは、死んでしまった。

季見子は、ルームサービスで、夕食をとりながら、自分のメモしてきた字を、眼で、追った。

市役所の課長が、デパートの屋上から飛び降りた事件。理由がわからない。

運河に浮んでいた身元不明の男の溺死体。

東京から来た若いカップルが、小樽で行方不明に。

小樽の漁船が原因不明の沈没。

これらの事件の中に、父の追いかけていたものがあるかどうか？

それに、季見子は、二十年前の一年間だけを、新聞で、追ってみたのだが、そのあとで、解決してしまっているかも知れないのだ。

（もう一度、明日、図書館へ行って、調べてみよう）

と、季見子は、思った。

もっと大きな事件の記事を、見逃がしたかも知れない。

夜の十時過ぎて、ベッドに入ったが、なかなか眠れなかった。

仕方なしに、見たくもないテレビを見ていた時、部屋の電話が鳴った。

「佐々木様に、お電話です」

と、交換手がいう。遅い時間なので、男の声になっていた。

「誰からかしら？」

「向うも、佐々木と、おっしゃっています。男の方です。おつなぎしますか？」

「つないで下さい」

と、季見子は、あわてて、いった。父かも知れないと、思ったのだ。
「季見子か？」
と、男の声が、いった。
ひどく遠いところから聞こえてくる感じだった。
「お父さん？」
「ああ。すぐ、東京に帰りなさい」
「東京へ？」
「そうだ。何もいわずに、すぐ、東京へ帰りなさい。一刻も早く、東京へ帰るんだ」
「今、どこにいるの？」
「私のことは、どうでもいい。お前のことが、心配なんだよ。一刻も早く、東京へ帰りなさい」
「お父さん。すぐ会って、話を――」
と、いいかけた時、電話は、切れてしまった。
季見子の顔が、青かった。
しばらくは、呆然としていたといってもよかった。思いがけない電話だった。
季見子は、気を取り直すと、交換に、電話をかけた。
「佐々木ですけど、今の電話、どこから掛ったのか、わかりますか？」
「さあ。多分、道内からだと思いますが、どこからかは、わかりません。何か、おかしなことでも、ありましたか？」
「いいえ。どうも、ありがとう」
と、季見子は、いった。
電話を受けている時は、父からだと思い込んで、話していたのだが、冷静になって、考えてみると、父かどうか、わからなくなってきた。
父に似た声は、声だった。
だが、もし、本当の父なら、なぜ、すぐ、このホテルに、会いに来ないのだろうか？
遠くにいるので、すぐ、会いに来られないとしても、それなら、いつの何時まで、小樽へ行くから、待っていなさいと、父なら、いう筈ではないのか。

それなのに、ただ、東京へ帰れというだけだった。季見子が、心配していることは、わかっている筈なのにである。

それとも、父は、どこかに、監禁されていて、娘に、早く帰京するようにいえと、脅迫されていたのだろうか？

無理に、いわされていたと考えれば、ああいう電話でも、納得がいくのだ。季見子の質問には、答えてはいけないと、いわれていたろうからである。

そうだとすると、父のことが、改めて、心配になって来た。

季見子が、東京に帰らずに、小樽に居続けたら、父は、危険になってしまうかも知れない。

季見子は、今の電話のことを、思い出してみた。

今になれば、もっと、冷静に、本物の父かどうか、考えながら、話をすれば、よかったと思うが、電話をしている時は、そんな冷静さなど、程遠かった。

（困ったな）

と、季見子は、思った。

あれが、ニセモノだったのなら、明日も、明後日も、小樽にいて、父の足跡を、追えばいいのだが、本当の父で、脅かされているのなら、帰らなければ、父が、危くなる。

季見子は、窓の外に、眼をやった。

小樽の町の灯りが、眼の下に広がる。その向うに、暗い海が見える。

（どこにいるの？）

と、季見子は、その暗い海に向って、問いかけてみた。

父は、まだ、この小樽の町のどこかにいるのだろうか？

それなら、連絡してくれればいいのにと、思った。

その頃、警視庁捜査一課の若い日下刑事は、小樽のホテルから、東京へ、電話をかけていた。

相手は、上司の十津川警部である。

「佐々木季見子は、今日、市立図書館に行きました。

約四時間、館内で、過ごしています」
「図書館で、何をしていたんだろう？」
「司書の話では、二十年前の新聞を、一年分借りて、眼を通し、メモしていたそうです」
「二十年前のねえ」
「私は、図書館の外で、待っていたんですが、サングラスをかけた若い男が、彼女のあとを追けるようにして、中に入って行きました」
「彼女が、何をするか、監視しているんだろうね。われわれと、同じさ」
「自宅で死んでいた行商人ですが、道警では、自殺として、処理するようです」
「そうか」
「質問してもいいですか？」
「何だね？」
「なぜ、佐々木季見子を、監視する必要があるんですか？　彼女が、危険な存在だとは、とうてい、思えませんが」
「別に、危険だから、君を、北海道へやったんじゃない」
「と、いいますと？」
「前にもいったが、彼女が、心配だからだ。東京でのようなことがあると、困るからね」
「しかし、東京での事件の時、あの犯人を、追いかけようとは、なさいませんでしたが」
「その件についての質問は、禁止だ。今は、答えようがないからね」
と、十津川は、いう。日頃の彼からは、考えられないような、あいまいな、いい方だった。
「もう一つ、質問をしていいですか？」
と、日下は、きいた。
「私に、答えられることならいいがね」
「二十年前に、何が、あったんですか？　佐々木季見子の父親も、どうも、二十年前のことを聞きに、小樽へ来たようですし、娘の季見子も、ここで、二十年前の新聞を調べています。二十年前に、何か、

大きな事件が、あったんですか？」
「君は、いくつだったかね？」
と、突然、十津川が、きいた。
日下は、面くらいながら、
「二十七歳ですが」
「二十年前なら、君は、七歳だな」
「そうです」
「二十年前に、何か事件があったとしても、君には、関係がない事件だよ。それに、殺人事件でも、すでに、時効だ」
「それは、そうなんですが――」
「そんなことより、佐々木季見子は、いつまで、小樽にいるつもりだろう？　それがわかるかね？」
「ホテルで、聞いた話では、外から、彼女に、電話がかかったそうです。男の声で、佐々木だと、名乗ったというんですが、行方不明の父親ではないですかね」
「それで、季見子は、どんな反応を、見せているんだ？　あわてて、東京に帰る様子かね？」
と、十津川が、きく。
「わかりません。今日は、小樽のホテルに泊ると思いますが、明日、どう動くかは、わかりません」
と、日下は、いった。
「では、君も、引き続き、彼女を、見守っていてくれ」
「今日、図書館で、彼女を監視していた男ですが、捕えて、なぜ、そんなことをするのか、聞いてみましょうか？」
と、日下は、きいた。
「無駄だよ」
「なぜですか？」
「どうせ、何も知らないと、いうに決っているからだ。逆に、図書館へ行って、どこが悪いと、反撃されるよ」
「警部は、あの男が、何者なのか、知っておられるんじゃありませんか？」

「いや、知らんよ。知っていれば、君に、いうよ」
と、十津川は、いった。
しかし、日下は、十津川が、何か知っているような気がして、仕方がなかった。
今度の件では、十津川の態度は、少し変だと、日下は、思っている。
日頃の歯切れの良さが、全くないのだ。佐々木季見子を守れと命令されたが、その理由も、あいまいである。
それに、佐々木季見子の父親のことである。
今度のことは、彼の失跡から始まっていると思う。
そして、次に、娘の季見子が、狙われた。
十津川は、それを予期していたような気がするのだ。だからこそ、日下を、用心のために、あの家に、行かせたのだろう。
(いったい、どうなってるんだ?)
と、日下は、思う。
日下は、上司の十津川を、尊敬もしているし、信頼もしている。
だが、今度の件では、どうも、十津川の指示が、よくわからないのだ。北海道まで、佐々木季見子を、尾行せよといわれたが、ただ、見守って、彼女の行動を報告しろというだけで、なぜ、そうするのか、理由を、教えられていない。聞いても、教えてくれないのである。
日下は、若いだけに、いらだってくる。
日下は、今、季見子と同じホテルに、泊っている。
彼女の部屋と、同じ階である。
日下は、カーテンを開け、窓の外に、眼をやった。
遠くに、暗い海が見えたが、視線を、近くに持って来た時、ホテルの前の道路が、見え、その反対側の電柱のところに、男が一人、立っていた。
サングラスをかけた若い男である。市立図書館で見た男だった。

警視庁

午前一時。

東京の警視庁捜査一課の部屋にも、人の姿は、ほとんど消えてしまっている。

ただ、十津川が、一人だけ、回転椅子に、腰を下して、じっと、考え込んでいた。

ドアが開いて、人影が入って来た。ベテランの亀井刑事だった。

「コーヒーでもいれましょう」

と、亀井が、いった。

「帰らなかったのかね？　カメさんは」

「帰りかけたんですが、急に、コーヒーが飲みたくなりましてね」

と、亀井はいい、部屋の隅に置かれたコーヒーポットのスイッチを入れた。

十津川は、黙って、煙草に火をつけた。

コーヒーの香りが、漂ってくる。

「日下君から、連絡がありましたか？」

と、亀井は、コーヒーを注ぎながら、十津川に、きいた。

「ああ、あったよ。佐々木さんの娘が、小樽で、二十年前の事件について、古い新聞を調べているらしい」

「やっぱり、そうなりましたか」

亀井は、コーヒーカップを、十津川の前に置いた。

「まだ、二十年前のどの事件かは、わからないようだがね」

「もし、気がついて、自分で調べ始めたら、どうなりますか？」

「危いな。今でも、危険な状態にあるような気がしているんだよ」

と、十津川は、小さな溜息をついた。

亀井は、粉ミルクのびんを取り出して、十津川の前に置いてから、
「父親の行方を追わせなければ、安全ですか？」
「多分ね。しかし、それは、無理だろうね。彼女の方は、母親が亡くなって、父親と二人だけだった。その父親が、行方不明になってしまったんだからね。必死になって、探そうとするのは、当然だよ。それを、止めるのは、酷だと思う。といって、このまま、探させていると、彼女が、危険になるのは、眼に見えているんだ」
「このまま、黙って、見守っていますか？」
と、亀井は、きいた。
十津川の顔に、苦渋の色が走った。
「何とか、穏便にすませたいと思って、日下君に、彼女を守るように、いってあるんだがね」
「部長や、課長は、知っているんですか？」
「知っている。私の一存だけで、日下君を、北海道に、やれないからね」
「部長たちも、何とか、穏便にと、思っているんですか？」
「もちろんだ」
と、肯いてから、十津川は、
「部長にしても、二十年もたって、眠っていたあの事件が、生き返ってくるとは、思っていなかったろうからね」
「警部は、あの事件が起きた時、まだ、警察に入っていらっしゃらなかったんじゃありませんか？」
と、亀井が、きいた。
「ああ、そうなんだ。私が入った時は、もう終っていた」
と、十津川は、いった。
「それが、本当は、終っていなかったということになるわけですかね」
「カメさんは、もう、警視庁にいたんだろう？」
「私が入ってすぐの事件ですから、印象に、強く残っていますが、その時は、新米で、あの事件は、担

当していません。佐々木さんが、あの事件に、関係されていたわけです」
「佐々木さんは、若手の刑事として、張り切って、動いたらしいね」
「そうなんです。前に一度、佐々木さんの書いた捜査ノートを見せて貰ったことがありますが、彼が、いかに、あの事件に、のめり込んでいたか、よくわかります」
「そのノートなら、私も、警視庁へ入って、すぐ、見せて貰ったよ。確かに、カメさんのいう通り、情熱を感じさせるノートだったね」
「あのノートは、昨日、資料室に行ってみたんですが、ありませんでした。日時が経ったので、処分したといっていましたが――」
「二十年たっているからねえ」
「それだけで、処分したんでしょうかね？」
「おい、おい、カメさんまで、あの事件を、もう一度、むし返そうと、思っているのかね？」
十津川は、冗談めかしていったが、その顔は、笑っていなかった。
「私には、その気はありませんが、佐々木さんが、動き出し、その娘さんが、狙われたりすると、嫌でも、よみがえってしまうんじゃありませんか？」
と、亀井は、いった。
十津川は、しばらく、黙っていたが、
「その時の覚悟をしておかなければ、ならないかね？」
と、亀井を、見た。
「まだ、マスコミは、取り上げていませんが、佐々木さんのことや、娘さんのことが、ニュースになってくると、嫌でも、われわれは、あの事件と、つき合わなければならなくなるかも知れません」
亀井は、いつになく、かたい口調になって、いった。
「上の方は、もう、終った事件だと、主張するだろうし、それを、押し通そうとするに、決っている」

と、十津川は、いった。
「問題は、それに同調するか、もう一度、あの事件を、見直すかということになりますね」
「カメさんは、どちらを取る気なんだ？」
と、十津川は、きいた。
「私は、警部の考えに、従いますよ。警部なら、間違いのない選択をされると、思うからです」
「私に、ゲタを、預けるのかい？」
と、十津川は、きいた。
亀井は、肯いた。
「一介の刑事の私には、判断がつきかねますので」
「私だって、一介の刑事だよ」
と、十津川は、いった。
「あの事件を担当した小坂井さんに会われたことがありますか？」
「亡くなる少し前に、会ったよ」
「それで、事件のことは、聞かれたんですか？」
「小坂井さんの方が、私を病室に呼んで、話してくれたんだ。恐らく、あの事件のことを、誰かに、知っておいて貰いたかったんだろうね」
「なるほど」
「小坂井さんは、自分の命が長くないことを、知っていたんだと思う」
「小坂井さんは、本当のことを、警部に話されたんですかね？」
「さあ、それは、わからない。小坂井さんは、あの事件を担当して、捜査に当っていたが、途中で、おろされている」
「ええ。覚えています。警視庁としての捜査方針に従わずに、独自の捜査を進めようとしたので、おろされたんでしたね」
「その時が、今の私と同じ四十歳だったそうだよ。その後、五年して、小坂井さんは、警察を、辞めている」
「佐々木さんも、同じケースでしたね」
「彼は、小坂井さんと、同じ考えを、事件に対して、

持っていたからね。佐々木さんは、捜査からおろされると、すぐ、辞めてしまった」

「小坂井さんは、あの事件が、まだ、解決していないと、思っていたんでしょうね？」

「そうだよ。ただ、あの人も、警察のOBだからね。私に、自分の考えを話してくれたあと、こういっていた。今後、何事もなく過ぎたら、私の話は、忘れてくれとね。警察のマイナスになるようなことには、したくなかったんだろうね」

「しかし、今でも、自分の考えが、正しかったとは、思っていらっしゃったんですか？」

「ああ、あの人の自信は、大したものだよ。あの態度が、同僚や、上司に、反感を持たれたんだろうね」

「警部が、会われた時も、そんな態度は、変っていませんでしたか？」

と、亀井が、きくと、十津川は、笑って、

「全く、変っていなかったね。小坂井さんの方から、来てくれといったのに、話し始めると、そんなことは、すっかり、忘れてしまったみたいになってね。私が、少しでも、異論を差し挟むと、顔を、真っ赤にして、怒り出すんだ。あの自信というのは、大したものだが、上司や、同僚が、辟易したろうということも、想像できて、面白かったね」

「佐々木さんも、似ていたみたいですね」

と、亀井は、いった。

「二人とも、どちらかというと、昔気質の刑事の典型みたいな人だからね。自分を頼むところも、大きかったんだと思うし、まだ、融通のなさが、反感を買ったんだとも、思うね」

と、十津川は、いった。

「これから、どうされる積りですか？」

亀井が、一番大事な質問をした。一番大事で、また、一番、答えにくい質問でもある。

「カメさんは、どうしたらいいと思うね？」

十津川は、逆に、きいた。

亀井は、首を横に振って、

「私には、わかりません。今もいったように、私は、警部の考えに、従います」
「それは、有難いんだが――」
「佐々木さんは、今、どうなっているんですか？　娘が、一生懸命に、北海道の小樽まで行って、探しているようですが」
と、亀井が、きいた。
「私には、わからないんだ」
「しかし、上の方は、わかっているんじゃありませんか？　三上刑事部長あたりは」
と、亀井は、なおも、きいた。
十津川は、すぐには、答えずに、煙草をくわえ、火をつけてから、自分の吐き出した煙を眼で追っていた。
「部長が、佐々木さんの行方を、本当は知っているかどうかは、私にも、わからない。だが、だいたいの見当は、ついているんじゃないかとは、思っているよ。だからこそ、娘さんに、安心するように、心配して、動き廻らないように伝えろと、私に、いったんだと思っているんだ」
と、十津川は、いった。
「佐々木さんが、殺されることはないと、警部は、お考えですか？」
「そうだねえ」
と、十津川は、また、考え込んだ。
「わかりませんか？」
「今もいったように、佐々木さんが、どこで、どうしているのか、私には、わからないんだ。何者かが、佐々木さんを、監禁しているのかも知れないし、どこかで、まだ、何かを、調べているのかも知れない。ただ、どちらにしろ、佐々木さんが、殺されたとなれば、二十年前の事件が、また問題化するかも知れない。そうはしたくないだろうから、佐々木さんは、無事だと、思ってるんだがねえ」
と、十津川は、いった。
「うちの上層部は、やはり、そう思っているわけで

すね？」

「下手をすると、警察の恥になるようなことが、出て来るかも知れないからね」

と、十津川は、いった。

そのあと、二人の間に、沈黙が、あった。十津川にしろ、亀井にしろ、警察という組織の一員である。そのことが、二人の口を、重くするのだ。

夜が明けてきた。

「もう一杯、コーヒーが欲しいね」

と、十津川が、亀井に向って、いった時、ふいに、電話が鳴った。

午前六時近い。

（午前五時五十二分）

と、十津川は、習慣で、その時刻を、頭に刻みつけてから、受話器をつかんだ。

「警視庁捜査一課」

と、十津川は、いった。

「こちらは、井ノ頭公園近くの派出所ですが、今、おうちに電話したところ、奥さまが、十津川警部は、そちらだと、伺ったものですから」

中年の男のかたい声が、聞こえた。

「私が、十津川だが、どんな用だね？」

と、きいた。

「早朝のジョギングをしていた、この近くの老人が、公園の中で、男の死体を発見して、こちらの派出所に届けて来ました。その死体が、手でつかんでいた紙に、十津川さんの電話番号が書いてありましたので、おうちに、連絡したんですが――」

と、派出所の警官は、相変らず、かたい声で、いった。

「その死体の身元は？」

「わかりません」

「男の死体だと、いったね？」

「はい」

「年齢は、いくつぐらいだ？」

「六十歳台だと思います。小柄な老人です」

「殺されたのかね？　それとも、病死かね？」
「後頭部を強打されたと思われますが、はっきりとしません。倒れた時、自分で、何かの角に、ぶつけたのかも知れません」
「これから、そちらへ行く」
と、十津川は、いった。
「佐々木さんですか？」
亀井が緊張した顔で、十津川を見た。
「その可能性があるね。違って欲しいんだが」
と、十津川は、いった。
二人は、警視庁の中庭にとめてある覆面パトカーで、井ノ頭公園に向った。
車の中でも、十津川は、黙っていたし、亀井も、口を閉ざして、運転を続けた。
井ノ頭公園の派出所の前で、亀井が、パトカーを、とめた。
三十七、八歳の警官が、飛んで出て来て、十津川たちを迎えた。
彼が、二人を、案内した。
池の近くの草むらの上に、死体は、横たえられていた。
若い警官が、その死体を、ガードしている。
早い時間のせいで、まだ、公園の中は、ひっそりと、静かだった。
十津川は、ひと目見ただけで、暗い眼になって、亀井と、顔を見合せた。
「佐々木さんですね」
と、亀井が、小声で、いった。
「そうだな」
と、十津川も、肯いた。
「これから、どうなるんですか？」
「わからないよ」
と、十津川は、重い口調で、いった。
「しかし、これは、殺人事件ですから、捜査はしなければなりませんよ」
「ああ、その通りだがね。問題は、二十年前の事件

との関連で調べるかどうかだ。それを無視するかどうかで、全く、変ってしまうからね」

「警部は、どうされるおつもりですか？」

と、亀井が、きいた。

「私には、このメモが、重く感じられるんだよ」

十津川は、派出所の警官から渡されたメモを、亀井に、見せた。

手帳のページを、引きちぎったものへ、ボールペンで、十津川の家の電話番号が、書きつけてある。

その紙が、しわになっているのは、死んだ佐々木が、かたく、握りしめていたからだろう。

「佐々木さんは、警部に電話しようとしていたのかも知れませんね」

と、亀井が、いう。

「私の家の電話番号は、電話帳に出ているからね。多分、調べて、かけようとしていたんだろうね。また、私に、連絡しようとしたから、殺されたのかも知れない」

十津川は、じっと、公園内の林を見つめて、いった。

パトカーが、一台、二台と、駆けつけて来た。鑑識もやって来た。

一つの殺人事件として、捜査が、始められたのだ。

死体は、解剖のために、大学病院へ運ばれて、行った。

捜査本部が設けられ、十津川が、この事件を、担当することになった。

三上刑事部長が、すぐ、やって来た。被害者が、佐々木と、わかったからだろう。

三上は、十津川を、捜査本部の外に、連れ出した。

「被害者の佐々木は、手に、君の家の電話番号を書いた紙を、持っていたようだね？」

と、三上が、きいた。

十津川には、三上が、なぜ、そんなことをきくのか、もちろん、よくわかっていた。

「その通りです。派出所の警官が、私に、渡してく

れました」
「なぜ、佐々木は、そんなものを、持っていたと思うね？」
「わかりません」
「君が、わからないんならいい。それから、この事件は、あまり難しく考えない方が、いいと思うね。被害者は、金を持っていたのかね？」
「いえ、財布も、運転免許証もありませんでした。その他、名刺や、キーといったものもです」
「それなら、これは、単なる物盗りの犯行だよ。その線で、捜査した方がいいね」
と、三上は、いった。
もちろん、三上が、本気で、そう思っている筈がなかった。
三上は、佐々木が、突然、二十年前の事件を、調べ始めたこと、そのために、小樽へ行ったことも、知っている。それでも、これが、物盗りの犯行だろうというのは、そうあって欲しいということなのだろう。
三上が、念を押して、帰ったあと、十津川は、溜息まじりに、亀井に、
「参ったね」
と、いった。
「部長は、事実に、眼をつぶれというわけですか？」
「そうは、いってないよ。だが、物盗りの線で、捜査を進めたがっている」
「まさか、警部は、これが、単なる物盗りの犯行とは、思っておられないでしょうね？」
「物盗りの可能性が、皆無じゃない」
と、十津川は、いった。
「そりゃあ、皆無じゃないでしょうが」
「カメさん」
「はい」
「そんな怖い顔はしなさんなよ。私だって、佐々木さんが、単なる物盗りに殺されたとは、思っていないよ」

「そう思っていました」
「だがね、二十年前の事件が、よみがえって来たら、どうしたらいいのか、私にもわからん。とにかく、二十年前の事件は、もう、終ってしまっているんだからね」
と、十津川は、いった。
十津川は、続けて、
「現場周辺の聞き込みをやってみよう。考えるのは、それからだ」
「そうですね。それにしても、佐々木さんの娘さんは、可哀そうですね。行方不明の父親を追って、小樽まで、探しに行ったのに、その父親が、東京で、殺されていたわけですから」
と、亀井が、いった。
午後になって、小樽の日下刑事から、電話が入った。
「今、テレビのニュースで見たんですが、東京で、佐々木さんが、殺されたそうですね？」
「そのことで、君に、連絡しようと思っていたところだ。佐々木季見子は、どうしているね？　彼女も、父親が殺されたニュースを、見ただろうか？」
と、十津川が、きいた。
「わかりません。私から、彼女に、知らせますか？」
「いや、様子を見ていてくれ。われわれは、彼女が、小樽へ行ったことは、知らないことになっているわけだからね。ニュースで知れば、彼女は、すぐ、東京に戻ってくる筈だ。その時は、君も、帰京したまえ」
と、十津川は、いった。
関き込みからは、なかなか、これといった情報は、得られなかった。
夜になって、やっと一人、公園の近くで、佐々木を見たという目撃者が、見つかった。
後藤功という二十五歳のサラリーマンである。
公園の近くの公衆電話ボックスで、電話をかけようとしたが、中に若い女性が二人で入って、長電話

をしていた。
しばらく、待ったが、中の二人は、いっこうに、電話を切ろうとしなかった。
そこへ、初老の男が、やって来た。彼は、急いで、電話をかけたいらしく、ボックスの中の二人の女性に向って、ドアを叩いていたが、彼女たちが、やめないので、舌打ちをして、公園の中へ消えて行った。
その初老の男が、殺された佐々木だったというのである。
「手に、小さい紙切れを持っていましたよ。だから、急いで、どこかへ電話をかけようと思っていたんだと、思いますね」
と、後藤は、いった。
「若い女たちが、長電話をやめようとしないので、その初老の男は、公園の中へ、入って行ったんですね」
十津川は、念を押した。
「ええ。多分、公園を抜けて、吉祥寺の駅の方へ行こうとしたんじゃありませんか。向うへ行けば、公衆電話はいくらでもありますからね」
と、後藤は、いった。
(佐々木は、私に、電話しようとしていたのだ)
と、改めて、十津川は、思う。しかし、電話して、何を、彼は、十津川に、いおうとしたのか？
十津川は、佐々木のことは、知っていたが、彼と、直接、話をしたことはなかった。
十津川が、警視庁に入った時、佐々木は、もう、辞めてしまっていた。
彼の上司の小坂井元警部は、警察を辞めてからも、二十年前の事件のことを、考え続けていた。雑誌に書いたこともある。
しかし、佐々木の方は、全く、事件のことは、忘れて、新しい仕事に、熱中しているように見えた。
小坂井の方は、十津川に、二十年前の事件について、自分の考えを、延々と、語った。今も、調べ続けているといい、十津川は、その執念に、感心した

ものだった。

佐々木は、小坂井から、十津川のことを、聞いていたのだろうか？

目撃者の後藤功に、礼をいって、帰って貰ったあと、十津川は、しばらく、窓の外の闇を見つめていた。

（佐々木さんは、何を話したかったのか？）

そのことが、気になるのだ。

「警部！」

と、ふいに、若い西本刑事が、大声で、呼んだ。

「なんだ？」

「今、佐々木を殺したという犯人が、自首して来ました」

「本当か？」

と、十津川は、西本の顔を、睨むように見すえて、きいた。

「本当です。連れて来ます」

と、西本がいった。

亀井の表情も、変っていた。

「犯人が、自首ですか？」

「そうらしい」

と、十津川は、複雑な表情で、肯いた。

西本が、一人の男を連れて、入って来た。

三十歳くらいの小柄な男である。Gパンにスニーカー、それに、ポロシャツという恰好だった。

襟のあたりが、うす汚れている。

十津川は、とにかく、その男を、椅子に、座らせた。

「君が、犯人なのかね？」

「ああ、おれが、殺したんだ」

と、男は、ぼそぼそした声で、いった。

「名前は？」

「北原行夫」

と、いい、その字を、机の上に、指で、書いて見せた。

「住所は？」

「ぶらぶらしてるよ。部屋代を払わないから、アパートを、追い出されたんだ」
「なぜ、殺した？」
「金が欲しかったからに、決ってるじゃないか。昨日の夜、井ノ頭公園で、通りかかった男を、うしろから殴って、財布を盗ったんだよ。まさか、死ぬとは、思わなかったんだ。あとで、死んだと知って、びっくりしたんだよ」
「証拠はあるのかね？」
「証拠？」
「そうだ。君が、殺したという証拠だよ」
「それなら、あるよ」
男、北原行夫は、ニヤッと笑って、ポケットから、空の皮財布と、運転免許証を取り出して、十津川の前に、置いた。
免許証は、佐々木のものだった。
「奪った金は、使ってしまったのか？」
「三万円と、ちょっとしか入ってなかったよ。もっと、入ってると、思ったんだがね。今日、それで、飯を食って、パチンコをやったら、あっという間に、金が無くなっちまったよ。今のパチンコは、入らないと二、三万くらい、すぐ、パアだからね」
「今になって、急に、自首して来たのは、なぜなんだね？」
と、十津川は、きいた。
男は、肩をすくめて、
「逃げるのが、いやになったからだよ。それに、無一文じゃ、逃げようにも、逃げられないからね」
「何を使って、殴ったんだ？　凶器は、何なんだ？」
と、亀井が、きいた。
「鉄棒だよ。公園のベンチの傍に落ちてたんで、それを、使ったのよ。殴ったあとは、池の中に、放り込んだよ」
翌朝、十津川たちは、北原行夫を、井ノ頭公園へ連れて行き、池のどの辺に、凶器を捨てたかを、証言させた。

彼の証言に従って、池浚いが行われ、五十センチくらいの鉄パイプが、発見された。

北原は、それを、公園で拾い、佐々木を殴ったのだという。

重量もかなりあり、十分に、殺人の道具になり得るだろう。

「カメさんは、どう思うね？」

と、十津川は、きいた。

「何ともいえませんね。三上部長は、物盗りの犯行ということで、満足されているんじゃありませんか」

「とにかく、この北原という男のことを、調べてみよう」

と、十津川は、いった。

指紋を照会したところ、彼には、前科のあることがわかった。

傷害二件、窃盗三件、合計四年間、刑務所に入っている。

一年前に、出所したところで、中野のアパートに入ったが、部屋代を、溜めて、追い出されていることも、事実だった。

もちろん、これといった定職は、持っていない。

「出所してから、何をして、食っていたんだ？」

と、亀井は、きいた。

「いろいろやったよ。新宿の歌舞伎町あたりで、ふらふら遊んでる奴を、脅して、巻きあげてやったこともあるさ」

と、北原は、いう。

「強盗もやったのか？」

「ああ。二回ばかり、やったよ。中野のアパートの近くで、ＯＬを、うしろから、ぶん殴って、ハンドバッグを、かっ払ったけど、財布に、八千円しか入ってなかったな。もう一つは、三鷹だが、年寄りだった。こっちは、二十万近く、財布に入ってたよ」

北原は、得意げに、いった。

十津川たちは、この二つの事件を、調べてみた。

中野の方は、被害者のＯＬが、被害届を出していた

ので、すぐ、確認できたが、三鷹の方は、被害届が、出ていなかった。
三上刑事部長からは、電話で、よかったじゃないかと、いって来た。
「犯人も、自首して来たんだし、すぐ、検察庁送りに持って行きたまえ」
と、三上は、いった。ほっとしている感じが、声の調子に、現われていた。
そんな時、佐々木の娘の季見子が、北海道から、帰京してきた。

世界は二人のために

十津川は、季見子を、父親の遺体のある大学病院へ案内した。
季見子は、しばらく、黙って遺体を見つめていた。
十津川は、次第に、息苦しくなって来た。いつもは、こうではなかった。
十津川は、仕事柄、死体には馴れているし、その家族に、死体を確認させたことも、何度かある。
もちろん、重苦しい、空気にはなるし、残された家族に、何というべきか、言葉に窮することも、しばしばある。
だが、今度の場合は、少し違っていた。
いつもなら、家族に向って「必ず、犯人を捕まえます」と、約束するのだ。その言葉で、少しは、家

族の悲しみが、軽くなると、思うからである。
今度は、それが出来ない。
犯人がもう、捕まっているからではなかった。
自首して来た北原行夫を犯人とは、十津川は、思っていない。
佐々木を殺した犯人は、別にいる。たとえ、北原行夫が、殺したのだとしても、彼に、佐々木を殺させた人間がいる筈だと、十津川は思っていた。
だが、上の方は、三上部長を始めとして、この事件を、深く追及するなというように、決っている。
いやでも、二十年前の事件を、掘り返すことになるからだ。そして、佐々木以外にも、犠牲者が出て来るだろう。
季見子が、眼を上げて、十津川を見た。その眼に、涙はなかった。
「父は、なぜ、殺されたんですか？」
と、季見子は、まっすぐに、十津川を見つめた。
「財布などが、失くなっていましたからね。物盗りの線が考えられるし、犯人も、自首して来ています」
と、十津川が、いった。
「どんな人ですか？」
「前科のある男で、北原という三十歳の男です。金欲しさに、佐々木さんを殺したといっています」
「その男が、犯人だという証拠はあるんですか？」
「彼は、奪った佐々木さんの財布と、運転免許証を、持っていました。それに、凶器の鉄パイプも、彼のいった場所で、見つかりました」
「十津川さんは、その男が犯人だと、思っていらっしゃるんですか？」
と、季見子が、きいた。
「証拠は、十分だと思っていますよ。筋は通っていますからね」
「でも、父が、そんな行きずりの男に殺されたなんて、信じられませんわ」
と、季見子が、いった。
「なぜですか？」

と、十津川は、きいた。
季見子が、亡くなった父親のこと、二十年前の事件のことを、どこまで知っているのかを、十津川は、知りたかったのだ。
「父は、二十年前の事件を、調べていました。小樽へ行ったのも、そのためですわ。十津川さんも、そのことは、よく、ご存知だと、思いますが」
と、季見子はいった。
「いや、知りませんね。二十年前の事件って、何のことですか？　私は、まだ、警察に入っていませんから」
と、十津川は、いった。
季見子は、疑わしげに、首をかしげていたが、
「父は、そのために、殺されたんだと思いますわ。私だって、怖い目にあいましたもの」
「お父さんは、その二十年前の事件について、あなたに、何か話しましたか？」
「いいえ」
「では、あなたは、何も知らないわけですか？」
「ええ、でも、少しは、わかって来たし、これから、自分一人で、調べてみるつもりですわ」
季見子は、きっぱりと、いった。
（困ったな）
と、十津川は、思った。この娘は、やる気なのだ。そうなれば、きっと、彼女も、危険にさらされる。
「犯人は、もう、捕まっているんですよ」
と、十津川は、いった。
「そんな、物盗りの犯人なんて、私は、信じませんわ」
「しかし、北原は、自供しているし、凶器も見つかっているんです。犯人として、起訴されることになりますよ」
「でも、私は、信じませんわ」
「警察が、犯人でもない男を、犯人にしているというわけですか？」
「そうはいっていませんけど、私には、父を殺した

犯人が、別にいるとしか、思えないんです。それだけのことですわ」

「われわれは、協力できませんよ。犯人が逮捕されてしまった事件については――」

と、十津川は、いった。

「結構ですわ。私は、最初から、警察に、何かして頂こうとは、思っていませんわ。父だって、そう思って、二十年前に、警察を辞めたんだと思いますから」

「お父さんが、辞めた時のことを、何か聞いたんですか？」

と、十津川は、季見子の顔を見た。

「いいえ」

と、季見子は、首を横に振ってから、

「でも、今になって、何となく、わかって来ましたわ」

「どんな風にですか？」

「二十年前、きっと、父は、警察の幹部の人と衝突して、辞めたんだと思いますわ」

と、季見子は、いった。

「それで？」

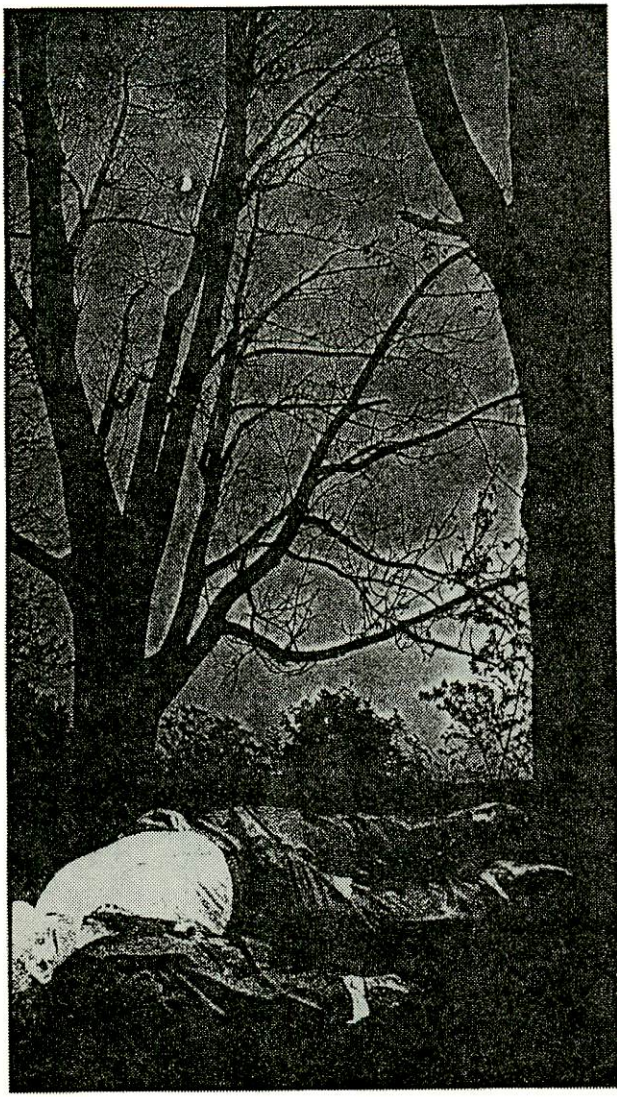
と、十津川は、先を促した。

「その時、何か事件があって、父は、きっと、自分の意見が入れられなかったんだと思うんです。強情な父だから、その時、ケンカして、辞表を出したのかも知れませんわ。きっと、父は、その事件のことは、心残りだったと思いますけど、家のこともあって、新しい仕事について、ずっと、働いて来ました。亡くなった母と、もう、事件のことは、忘れると、約束したんじゃないかと、思うんです。二十年たって、母も亡くなり、私も、もう、ひとりで、生活できるようになって、父は、急に、また、二十年前の事件を、調べ始めました。父は、どうしても、あの事件を忘れられなかったんですわ」

季見子は、静かに、話した。

「だから、あなたも、調べるんですか？」

「ええ。素人の私が、どこまで調べられるかわかりませんけど、父の気持を考えると、やってみたいんです」
「無理ですよ」
「わかっていますわ」
「危険かも知れません」
「それも、わかっていますわ」
「困った人だな」
と、十津川は、呟いた。
季見子は、そんな呟きは、聞こえなかったみたいに、
「父の遺体は、もう、引き取って構いませんわね？」
「ええ」
と、十津川は、肯いた。
十津川が、捜査本部に戻ると、もう、捜査本部を、解散する話になっていた。
三上部長も、本多捜査一課長も、来ていた。
「犯人が、自首して来たことで、あっけなく、解決してしまったが、たまには、こういうこともあっていいだろう」
と、三上が、刑事たちを、見廻して、いった。
「とにかく、ご苦労さん。凶器も、見つかったので、検事さんも、公判が、維持できるといっている。今日で、この捜査本部も、解散だ」
と、これは、本多が、いった。
亀井が、十津川の傍に来て、小声で、
「佐々木さんの娘さんは、どうしました？」
と、きいた。
「父親の遺体を、引き取って、帰って行ったよ。ただ、困ったことに、彼女は、あくまでも、父親の遺志を引き継いで、二十年前の事件を、調べる気でいる」
「犯人が捕まったことに、満足はしないんですか？」
「ああ、絶対に、物盗りなんかに、殺されたんじゃないと、思っている」
「困りましたね」



「困ったが、民間人の彼女に、何もするなと、命令することは、出来ないしね」
十津川は、亀井と、二人で、小樽から戻って来た日下刑事を、部屋の外へ、連れて行った。
「小樽での佐々木季見子のことを聞きたいんだ。彼女は、どこまで、調べたのかね？」
と、十津川は、日下に、きいた。
「小樽で、行商人が、死んだことは、報告しましたね」
「ああ、それは、聞いたよ」
「佐々木季見子は、父親が、なぜ、行商人に会いに来たのか、それを、知ろうと、していました」
「そして、市立図書館で、二十年前の新聞に眼を通したんだな？」
「はい。彼女は、その古新聞から、いくつかの事件を、メモしたようなのです。というのは、次の日から、新聞社へ行って、一つ一つメモした事件について、聞いていますから」
と、日下は、いった。
「サングラスの男は、どうしたんだ？」
「相変らず、彼女を、尾行していました」
「君の存在に、その男は、気付いているようだったかね？」
「わかりませんが、多分、気付いていなかったと思います」
「彼女は、具体的に、二十年前のどんな事件について、新聞社で、聞いていたんだね？」
「いろいろです。全て、小樽で、二十年前に起きた事件です。市役所の課長の理由のわからない投身自殺とか、運河に浮んでいた身元不明の男の溺死体、或いは、東京から来た若いカップルの失跡などです」
「新聞社では、どんな風に、彼女に、答えたんだろう？」
「彼女は、若く美人ですし、失跡した父親の行方を追っているということで、新聞社では、好意的に、当時の話を聞かせたようです。ただ、その中のどれ

が、父親の追っていた二十年前の事件かは、まだ、わかっていないと、思いますが」

「君も、二十年前の事件のことは、知らなかったんだな？」

と、十津川は、日下に、きいた。

日下は、笑って、

「当時、私は、まだ、小学生でしたから」

「君は、知らない方がいい」

と、十津川は、いった。

部屋に戻ると、コップ酒が配られて、事件の解決に対して、乾杯が、始まっていた。

捜査本部は、今日中に、解散である。

十津川は、椅子に腰を下し、じっと、佐々木の書き残した電話番号を、見つめた。

（これを、佐々木が、握りしめていなかったら――）

と、思う。

これほど、辛い気分には、ならずにすんだろう。

佐々木は、死を賭けて、十津川に、何かを連絡しようとしたのだ。それを無視していいのだろうか？

十津川は、二十年前の事件について、自分で、調べてみたこともあるし、この事件を、担当した小坂井警部が、警察を辞めてから、話を聞いたこともある。

この事件の真相は、十津川にも、わからない。

事件は、二十年前に解決したことになっていて、残っている捜査日誌にも、そう書いてあり、新聞、テレビも、警察の発表通りに報道した。

しかし、小坂井は、十津川と話した時、警察を辞めた気安さからだろうが、この事件での警察の捜査を批判し、事件は、まだ、終っていないと、いったのである。

事件の時、まだ、警視庁に入っていなかった十津川には、二十年前に、すでに解決しているという発表が正しいのか、それとも、小坂井元警部の反論が正しいのか、わからなかった。

ただ、今度、佐々木が、殺されたり、奇妙な解決

があったりすると、小坂井の言葉が、正しいのかも知れないと、思えてくる。

その小坂井は、すでに死亡しているし、彼の遺志を継ぐ形で、動き廻ったように見える佐々木も、殺されてしまった。

もし、二十年前の事件に、疑問を持ったら、今度は、十津川自身が、調べて廻らなければならないのである。

十津川は、彼の知っている範囲での、二十年前の事件を、頭の中で、再現してみた。

事件は、二十年前の十月二十六日に、起きた。

もちろん、事件の根は、もっと以前にあったのかも知れないが、事件が、表に現われたのは、十月二十六日の午後である。

朝から、小雨が降っていて、肌寒かった。が、このことと、事件とは、関係がない。

警視庁捜査一課の小坂井警部は、殺人事件発生の知らせを受けて、部下の佐々木刑事たちを連れて、現場に向った。

現場は、日比谷公園。警視庁と、目と鼻のところである。

この日は、日曜日で、周辺の官庁街は、もちろん、休みで、ひっそりと、静まり返っている。

日比谷公園も、同じだった。

昼休みには、周辺の官庁や、会社のサラリーマンやOLで、賑わうのだが、今日は、静かだった。

それに、朝からの雨のせいで、わざわざ、日比谷公園に、遊びに来る人もいなかった。

小坂井たちが、日比谷公園の中に入ったのは、午後七時を過ぎていて、周囲は、暗くなっていた。

池の近くのトイレの中で、若い女が、首を締められて、殺されていたのである。

スカートがめくれあがり、下着は、引きずり下されていた。

死体の横には、トランジスタラジオが転がっていて、「世界は二人のために」を流していた。

この年、佐良直美の唄ったこの歌が、人気を得ていた。

愛　あなたと二人
花　あなたと二人
恋　あなたと二人
夢　あなたと二人
二人のため　世界はあるの
二人のため　世界はあるの

トランジスタラジオから流れてくる歌声は、小雨に打たれている死体が、傍にあるだけに、小坂井の耳には、異様に、聞こえた。

小坂井は、一週間前に、知人の結婚式に出たのだが、その会場でも、この歌が、流れていたのだ。

少し離れた場所から、女物の傘と、ハンドバッグが、見つかった。

小坂井は、一つの光景を、想像した。

被害者は、傘をさし、ラジオを聞きながら、誰かを、待っていたのだろう。

女の若さから考えて、恋人とのデイトと考えられる。

しかし、やって来たのは、恋人ではなく、犯人だった。

犯人は、暴行を目的に、彼女を近くのトイレの中に引きずり込んだ。が、抵抗され、首を締めて、殺したのではないのか。

死体の発見者は、トラックの運転手だった。

近くを走行していて、急に、尿意をもよおし、日比谷公園の中にトイレがあるだろうと思い、車をとめた。

トイレを見つけ、ほっとして、入って行くと、コンクリートの上に倒れている女の死体を、見つけたというのである。

四十二歳の井上功という運送会社の運転手だった。

小坂井は、女の身元を、確認することから始めた。
幸い、ハンドバッグの中に、被害者の運転免許証が入っていたので、名前と、住所は、すぐわかった。
長山しのぶ、二十歳。
これが、被害者の名前で、住所は、世田谷区北沢のアパートになっていた。
死体は、解剖のために、大学病院に、運ばれて行った。
小坂井は、傘や、トランジスタラジオ、それに、ハンドバッグを、警視庁に、持ち帰った。
ハンドバッグの中には、免許証の他に、二万三千円の入った財布、化粧道具などが、入っていた。
「こういう事件は、やり切れませんね」
と、佐々木刑事が、眉をひそめて、いった。
小坂井は、「ああ」と、肯いた。
物盗りの犯行でないことは、はっきりしていた。
純粋に、暴行が目的の犯人なのだ。
(何も、殺さなくてもいいだろうに)
と、小坂井は、思った。
小坂井は、佐々木と、金子の二人の刑事を、世田谷区北沢のアパートに、走らせた。
二階建のプレハブアパートだった。
その二階の端、二〇五号室に、「長山」の名前を書いた紙が、貼りつけてあった。
佐々木刑事は、被害者のハンドバッグにあったキーを使って、部屋に入った。
六畳の和室に、キッチンと、バストイレがついている。
狭いが、新しい建物なのと、女らしく飾ってあるので、豊かな感じに見えた。
「学生のようですね」
と、若い金子刑事は、部屋の中を見廻しながら、佐々木に、いった。
N大が、アーチェリーで優勝した時の写真が、壁

に貼ってあったり、教科書や、参考書が、机の上に、積んであった。

ハンドバッグには、学生証がなかったが、どうやら、N大の学生らしい。

恋人と思われる若い男と一緒に撮った写真も、見つかった。

二十五、六歳の背広姿の男である。こちらは、学生ではなく、多分、サラリーマンだろう。

机の引出しに入っていたノートには、「仏文3年、長山しのぶ」と、書いてあったから、N大の三年生と、考えて、よさそうである。

「長山さん」

と、廊下で、呼ぶ声がした。

佐々木が、顔を出すと、中年の男が、不審げに、彼を見ていた。

「長山さんは、いないんですか？」

と、その男が、きく。

佐々木は、警察手帳を見せて、

「あなたは？」

と、逆に、きいた。

「管理人です。長山さんが、どうかしたんですか？電話が、掛ってるんですが」

「私が出る」

と、佐々木は、いい、階下の管理人室へおりて行った。

置いてあった受話器を取った。

「もし、もし」

「長山さんを呼んでくれませんか」

と、若い男の声が、いった。

「あなたは？」

「広田といってくれれば、わかりますよ」

男の声が、少し、いら立っている。佐々木は、彼女の部屋にあった若い男の写真を思い出しながら、

「長山しのぶさんは、亡くなりました。私は、警視庁捜査一課の佐々木です。彼女のことで、いろいろとお聞きしたいので、すぐ、来てくれませんか」

と、いった。
「死んだ――」
広田という男は、絶句したあと、すぐ、行きますと、いった。
タクシーで駆けつけたのは、やはり、写真の男だった。
名前は、広田淳。二十六歳で、K商事のサラリーマンだという。
「彼女、本当に死んだんですか？」
と、広田は、まだ、信じられないという顔で、佐々木に、きいた。
「遺体は、今、大学病院にありますから、あとで、確認して下さい。今日は、彼女と、デイトの約束をしていたんじゃありませんか？」
「ええ。日比谷公園の中央入口のところで、待ち合せの約束をしていたんです。僕は、五分ほどおくれてしまったんですが、彼女は、もういませんでした。ずいぶん探したんですが、見つからなくて――」
「池の近くのトイレの中で、殺されていました」
「池の？　なぜ、そんなところへ、彼女は、行ったんですか？」
「多分、犯人が、脅して、連れ込んだんだと思いますよ」
と、佐々木は、いった。
とにかく、遺体確認のため、佐々木と金子の二人の刑事は、広田を、大学病院へ、連れて行った。
その途中、パトカーの中で、広田は、自分が、同じN大の先輩で、アーチェリーの指導に、母校へ行って、知り合ったこと、彼女が、卒業したら、結婚するつもりでいたことなどを、話してくれた。
大学病院に着き、広田は、遺体を見たが、佐々木に、肯いて見せてから、急に、低く、嗚咽し始めた。
若い金子刑事が、なぐさめるように、
「犯人は、絶対に、捕まえますよ」
と、広田に、いった。
佐々木は、黙っていた。今は、どんな言葉も、こ

の青年には、慰めにならないと、思ったからである。
その日の中に、丸の内署に、捜査本部が設けられた。
〈日比谷公園殺人事件捜査本部〉
である。
暴行の文字を入れるべきだという声もあったが、解剖がすまなければ、暴行があったかどうか、不確かだということで、殺人だけになった。
解剖の結果が出たのは、翌朝になってからだった。
暴行は、されてないことが、わかった。
その代り、胸に、打撲の痕があり、肋骨に、ひびが入っていることが、わかった。
犯人は、暴行しようとしたが、抵抗されたため、長山しのぶを、殴りつけ、首を締めて、殺したのだろう。
「変質者の犯行とみていいだろう」
と、小坂井警部は、捜査会議の席で、いった。
だが、犯人を見つけるのは、難しいだろうと、小坂井は、思った。
変質者の犯行とすると、被害者や、彼女の恋人の周辺をいくら調べても、犯人は、浮んで、来ないからである。
それに、いつも、日比谷公園で、獲物を探している犯人なら、網を張ることもできるが、たまたま、日比谷に来ていて、被害者を襲ったのだとすると、どこを探せばいいかも、わからないからだった。
念のために、過去一年間に、日比谷公園で起きた事件を、調べてみた。
日比谷公園は、有名なアベックのメッカでもある。
ウイークデイの夕方は、どのベンチも、アベックで一杯になる。
それを目当ての、のぞきもあるが、それが、暴行などの事件に発展したことは、なかった。
酔ったサラリーマン同士の傷害事件や、かっぱらいなどの事件が起きてはいたが、今度のような事件は、過去一年間に、起きてはいなかった。

「日比谷公園を根城にした変質者じゃないな」
と、小坂井は、佐々木刑事に、いった。
犯人は、たまたま、日比谷公園に来ていたのだろう。
小坂井は、現場周辺を、徹底的に、調べさせた。
犯人が、何か落としていったかも知れないからである。
その結果、トイレの外で、背広のボタンを一つ、見つけ出した。
それが、果して、犯人のものかどうかわからないが、小坂井は、調べてみる価値があると、判断した。
毎朝、トイレは、清掃されていたからである。その時に、落ちていれば、清掃する人間が、見つけているに、違いない。
もう一つ、小坂井が注目したのは、そのボタンの裏側に、「Mila schön」の文字が、あったことだった。
小坂井は、知らなかったが、ミラ・ショーンという外国の高級背広についているボタンと、わかった。
もし、このボタンが、被害者が、抵抗した時、取れたものだとすれば、犯人は、ミラ・ショーンの背広を着ていたことになる。
しかし、捜査は、そこで、ストップしてしまった。
東京中の変質者に、枠を広げて、調べてみたのだが、なかなか、容疑者は、浮んで来なかった。
現場周辺の聞き込みも、うまくいかなかった。
日曜日、それに、雨が降っていたということで、犯行の時間帯に、現地近くを歩いていた人間が、少なかったからである。
三日、四日とたっても、手掛りは、つかめなかった。
小坂井は、犯人が、何を使って、現場から逃げたかを、考えてみた。
日比谷公園の周辺には、個人の住宅というものは、ほとんどないから、あの辺りに住んでいる人間とは、考えにくい。
犯人は、車を使って逃げたか、歩いて、近くの駅

まで行き、電車で逃げたかのどちらかだろう。
山手線、京浜線の有楽町駅は、現場から歩いて、十二、三分かかる。
地下鉄の日比谷駅なら、四、五分だろう。
車は、自家用車、タクシー、それに、バスが、利用できる。
そのどれを、使っただろうか？
一番考えられるのは、自家用車である。
電車に乗ったとすると、犯人は、雨の中を、駅まで歩いたことになるし、トイレまで、引きずって行って、殺す時、傘はさしていなかったろうから、その時も、雨に濡れた筈である。
雨に濡れて、歩いていたり、ホームで、電車を待っていたら、目立ったに違いない。従って、車を使ったことが、考えられるのだ。
小坂井は、日比谷公園の周辺の道路に、事件のあった時刻に、不審な車が、停っていなかったかどうかを、部下の刑事たちに、調べさせた。
もちろん、電車の利用を、完全に無視したわけではなく、念のために、各駅の聞き込みも行った。
六日目になって、やっと、聞き込みの成果らしきものが、出てきた。
犯行のあった時刻に、日比谷公園側に、赤いスポーツ・カーが、停っているのを見たという目撃者が、現われたのである。
目撃者は、路線のバス運転手と、タクシーの運転手である。
公会堂の近くで、皇居の方向に向けて、その車は、道路の端に、停めてあったという。
「真っ赤なスポーツ・カーだったので、よく覚えていますよ」
と、バスの運転手は、いった。
その時刻は、午後五時半頃だという。もう周囲は、暗くなっていたが、車のライトの中に、スポーツ・カーの赤い車体が、はっきり見えたということだった。

解剖の結果、長山しのぶの死亡推定時刻は、十月二十六日の午後五時から六時の間だから、時間は、一致している。

タクシーの運転手が、同じ車と思われる赤いスポーツ・カーを見たのは、午後五時頃である。

場所が、同じなので、恐らく、同一のスポーツ・カーだろう。

ただ、小雨が降っていたし、一瞬のことなので、バスの運転手も、タクシーの運転手も、そのスポーツ・カーの中に、人が乗っていたかどうか、わからないということだった。

小坂井は、二人に、いろいろなスポーツ・カーの写真を見せた結果、どうやら、ポルシェ911と、わかった。

ラブユー東京

二十五歳の木崎雅之は、ご機嫌で、夜の甲州街道を、飛ばしていた。

乗っているのは、買ったばかりのポルシェ911である。

彼のサラリーマンとしての月給は、十万円足らずだから、一千万円もするポルシェが、買える筈がない。子供に甘い、宝石店経営の父が、買ってくれたのである。

おかげで、女の子に、不自由しなくなった。

今日も、新人モデルの二十歳の女を、深大寺の彼女のマンションへ送っての帰りだった。

まだ、彼女のしなやかな身体の感触が、残っている。

走りながら、木崎は、ラジオのスイッチを入れた。
歌のベスト・テンの番組だった。
一位の「ラブユー東京」の歌が、流れてくる。

七色の虹が
消えてしまったの
シャボン玉のような
あたしの涙
あなただけが
生き甲斐なの
忘れられない
ラブユー　ラブユー　涙の東京

いつの間にか、木崎は、その歌を、ラジオに合せて口ずさんでいた。この歌と、「世界は二人のために」が、いつも、トップを、争っている。
木崎のマンションは、鍋屋横丁の近くだった。
新宿を抜けて、青梅街道に入った時、前方に、検問所が、設けられているのに、気がついた。
パトカーが二台とまっていて、警官が、五、六人いる。
（まずいな）
と木崎は、思った。
女のマンションで、水割りを、三杯ほど、飲んでいたからである。
このポルシェを買ってくれた時、父が、交通違反で、警官に捕まるようなことはするなよと、いったのを、思い出した。
あわててブレーキを踏み、Uターンして、逃げ出した。
検問中の警官も、すぐ、気付いたらしい。
甲州街道に、逃げ込んだ時、後方で、パトカーのサイレンが聞こえた。
こうなると、捕まるわけには、いかなくなった。
木崎は、アクセルを、大きく踏み込んだ。
さすがに、ポルシェである。木崎の背中が、シー

トに押しつけられる感じで、急加速していく。
夜の十一時を回っていて、幸い車は少い。
すぐ、スピードは、一〇〇キロを越えた。
小坂井は、赤いポルシェ911が、甲州街道を、西へ向って、逃走中という報告を受けた。
彼は、その時、西新宿の中央公園にいた。
今日、この公園の茂みの中で、若い女が、絞殺されていたのである。
発見されたのは、午後十時二十分近かった。
丁度、一週間前の日曜日に、日比谷公園で、長山しのぶというN大の学生が、殺されたが、状況は、これに、よく似ていた。
小坂井警部が、わざわざ、呼ばれたのは、そのせいだった。
年齢は、二十七、八歳である。
スカートは、めくれあがり、黒いレースのパンティが、引きずり下されていた。
前の事件と違う点といえば、今夜は、雨が降っていなかったし、今度の被害者は、濃く、化粧していた。
近くで、シャネルの黒いハンドバッグが、見つかった。
三十万円近く入った財布や、外国製の高価な化粧品、それに、「クラブ・シャノアール・ゆき子」と印刷された名刺が二十枚、そのハンドバッグの中にあった。
佐々木刑事が、すぐ、歌舞伎町にあるクラブ「シャノアール」に行き、被害者が、その店のホステスであることを、確かめた。
本名は、矢代ゆき江、二十八歳である。
中央公園近くのマンションに住んでいて、公園の中を通り、陸橋の下をくぐって、歌舞伎町の店へ出勤していたという。
どうやら、今夜も、店に出るために、中央公園を抜けようとして、犯人に、襲われたのだろう。
刑事たちが、公園の周辺で、聞き込みを実施した

ところ、公園の近くに、午後七時半頃、赤いポルシェが、とまっているのを見たという目撃者が、出て来た。

「また、赤いポルシェか」

と、小坂井は、思い、都内のパトカーに、赤いポルシェを見たら、止めて、調べるように、指示を、頼んだ。検問も実施した。

その直後の報告である。

「見つかったんですか？」

と、佐々木が、緊張した眼で、小坂井を見た。

「検問を見て、逃げ出し、今、甲州街道を、西に向って、逃走中だ」

「われわれも、行ってみますか？」

「そうだな」

と、小坂井は、肯き、他の刑事たちに、引き続き、現場周辺の聞き込みをやるようにいってから、覆面パトカーに、乗り込んだ。

佐々木の運転で、小坂井も、甲州街道に、向った。

助手席の無線電話に、刻々と、様子が、伝えられてくる。

赤いポルシェは、現在、下高井戸近くを、時速約一〇〇キロで、逃げていて、二台のパトカーが、それを、追っていた。

木崎は、アクセルを、踏み続けた。

ポルシェのスピードメーターは、敏感に反応して、一〇〇、一二〇、一三〇と、針が振れていく。

それでも、さすがにドイツが誇るスポーツ・カーだった。路面に、吸いつくような走り方だった。

すぐ傍まで追っていたパトカーのサイレンが、どんどん、遠くなっていく。

「ざまあみろ！」

と、木崎は、叫んだ。パトカーなんかに、追いつかれるものか。

午前零時に近く、甲州街道は、すいていた。烏山バイパスに、突入した。スピードは、一五〇キロまで、あがっている。

前方の信号が、赤になっているのも構わず、木崎は、車を、走らせた。

木崎は、自分が、F1ドライバーになっているような気分になっていた。

前を走っている車を、一台、二台と追い抜いて行く。

素晴らしい快感だった。

ラジオは、深夜のDJになっていて、また、音楽を、流している。

突然、前方に、パトカーが二台、道路をふさぐ恰好で、停っているのが、視界に、飛び込んで来た。

「くそ！」

と、叫び、木崎は、ブレーキを踏みながら、ハンドルを切った。

タイヤが、悲鳴をあげた。車は、右折できず、反対車線に飛び出した。

そこへ、大型トラックが、疾走して来た。

血走った木崎の眼の前に、大型トラックの黒い車体が、のしかかって来た。

鈍いひびきを残して、赤いポルシェは、トラックのフロントに、突き刺さり、続いて、押し潰されていった。

トラックを運転していた男は、あわてて、ブレーキを踏んだが、惰性で、ずるずると、前部の潰れたポルシェを、押して行った。

検問に当っていた警官たちが、ばらばらと、駆け寄って来た。

追跡していたパトカーも、次々に、到着した。

小坂井と佐々木の車も、現場に、着いた。

小坂井は、車からおりると、押し潰されたポルシェのところへ、歩いて行った。

警官たちが、運転席から、血まみれの若い男を、引きずり出しているところだった。

「救急車は？」

と、小坂井が、声をかけた。

「頼んでありますから、すぐ、来る筈です」

警官の一人が、いった。
こわれたポルシェからは、ラジオが、まだ、音楽を流している。

明日からは　あなたなしで
生きてゆくのね
ラブユー　ラブユー　涙の東京

救急車が来て、意識不明の男を、運んで行った。
小坂井は、佐々木と、押し潰されたポルシェの911の車体を見つめた。
「これが、問題の車ですかね？」
佐々木が、ポルシェの車体を、こぶしで、叩いた。
「わからんが、やましいところがあったから、逃げたんだろう」
と、小坂井はいい、血の飛び散っている運転席に、首を突っ込んだ。
フロントガラスは、粉々に砕け、ハンドルはねじ曲ってしまっている。
それでも、カー・ラジオは、まだ、しつこく、DJを、流していた。

これから、今週第三位、森進一の「命かれても」を、かけましょう。

惚れて振られた
女の心
あんたなんかにゃ
わかるまい
押え切れない淋しさは
死ぬことよりも
つらいけど
なぐさめなんかは欲しくない

「何が、死ぬことよりもだ――」
と、小坂井は、口の中で文句をいいながら、車内

から、車検証を取り出した。
小坂井は、パトカーのところに戻り、車の明りで、その車検証を、見た。
「車の持主は、木崎雅之。鍋屋横丁のマンションが、住所になっている」
と、小坂井は、佐々木に、いった。
「若い男でしたね」
「二十五、六歳だろう」
「犯人ですかね？」
「どうかな。さっき、背広を見たが、ミラ・ショーンのマークは、入っていなかった。もちろん、だからといって、シロとは、いえないがね」
「とにかく、この木崎雅之という男を、調べてみようじゃありませんか」
と、佐々木が、いった。
小坂井と、佐々木は、覆面パトカーに戻ると、新宿に向って、引き返した。
「こわれたポルシェで、カー・ラジオが、嫌な歌を流していたよ。『命かれても』って歌だ」
と、小坂井は、ぶぜんとした顔で、いった。
「森進一の歌でしょう。私は、あの歌が好きですよ」
「そうかねえ。命を落としたら、詰らないがねえ」
二人を乗せたパトカーは、新宿から、鍋屋横丁に廻り、木崎雅之の住んでいたマンションに着いた。
管理人に立ち合って貰い、木崎の服のポケットにあったキーを使って、ドアを開けた。
「ぜいたくな部屋ですね」
と、まず、佐々木が、いった。
「あの年齢で、こんなぜいたくが出来るわけがないさ。第一、ポルシェになんか、乗れる筈がない。どうせ、甘い親が、金を出してやっていたんだろう」
小坂井は、腹立たしげに、いった。
小坂井は、最低の生活をしてきたという気持が、いつも、心にあった。
戦前は、東北の貧農の子供として、飢えを味い、戦争に行っては、死線を、さ迷った。

だから、小坂井の胸には、いつも、不平等に対する怒りがあった。それが、彼の性格を狷介にしているのかも知れなかった。

（あいつは、優秀な刑事だが、融通がきかない）

と、いう陰口が囁かれるのも、そのせいだったろう。

小坂井は、部屋を見廻した。

真新しいテレビ、ステレオ、棚に並んだ高級カメラ、ギターも、高そうだった。

アルバムが見つかったので、ページを繰ってみると、若い女の写真が、多かった。

ヌードの写真もある。そのバックが、明らかに、この部屋だったりする。

つき合っている女を、裸にして、カメラを向けたのだろう。

（撮る方も、撮る奴なら、撮らせる女も女だ）

と、小坂井は、腹立たしかった。

「今の若い女は、平気で、自分の裸を、撮らせるのかね」

「そうらしいですね」

「こういう男は、若い女を、襲うかな？　それとも、金にあかせて、女が、自由になるから、襲ったりはしないかな？」

小坂井は、自問する感じで、いった。

「どうですかね。世の中には、ただ、女性を愛していたのでは、満足できなくて、強い強姦願望を持っている男がいますからね。表面的なものでは、判断できないと、思います」

と、佐々木が、いった。

「すると、この男も、容疑者の一人だな」

「そう思います。とにかく、検問を見て、逃げたわけですから」

「この男の周辺を、洗ってみよう」

と、小坂井は、いった。

部屋にあった手紙類と、アルバムを、押収して、小坂井は、捜査本部に、持ち帰ることにした。

昼近くなって、父親の木崎治郎が、捜査本部にやって来た。
「すぐ、息子の遺体を引き取らせて頂きたい」
と、木崎治郎は、かたい表情で、小坂井にいった。
「解剖の結果が出るまで、待って下さい」
と、小坂井は、相手の名刺を見ながら、いった。
銀座で、宝石店をやっているらしい。
(この父親が、甘やかしたのか)
「なぜ、待たねばならんのですか？　息子が、何かしたんですか？」
「息子さんは、検問を見て、急に逃げ出したんですよ。そして、パトカーに追われ、反対車線に飛び出して、トラックと、衝突したんです」
小坂井は、わざと、ゆっくりと、いった。
「だから、死んだのは、息子のせいだといいたいんですか？」
と、木崎治郎が、突っかかってきた。
「われわれとしては、息子さんが、なぜ、逃げたかを、知りたいわけですよ」
「それと、解剖と、どんな関係があるんですか？　何の関係もないじゃありませんか？」
「いや、そうもいえませんよ。息子さんは、酔っていた可能性もあります。解剖すれば、そうしたことも、わかりますのでね」
小坂井は、負けずに、いった。
「私はね、車を運転する時は、絶対に、酒は飲むなと、いい聞かせてあります。だから、酔っ払い運転なんかする筈はありませんよ」
「そうかも知れませんが、それなら、なぜ、検問を見て、逃げたんですかね？」
「知りませんよ、そんなことは。とにかく、息子は、死んでしまったんです。警察は、死者に対する礼というのを、知らんのですか？」
「知っていますが、それ以上に、われわれとしては、真実を知りたいのですよ」
「何の真実です？」

「現在、都内で、同じような殺人事件が、続けて、二件発生しています。その現場で、赤いポルシェが、二度とも、目撃されているのですよ。それで――」

と、小坂井が、いいかけるのを、木崎は、怒りの表情で、さえ切ると、

「なんですか、私の息子が、その殺人事件の犯人だとでもいうんですか？」

「とんでもない。われわれは、そんな断定の仕方はしませんよ。ただ、ひょっとしてと思うから、調べているだけです。私だって、息子さんが、何の関係もないことを、祈っています」

「しかし、疑っているからこそ、解剖するんでしょう？　違うんですか？」

「今もいったように、われわれは、息子さんが、なぜ、逃げたか、その理由を知りたいのですよ」

「解剖すれば、それが、わかるとでもいうんですか？」

「解剖も、真実を知る一つの手段です。その他にも、あなたに、息子さんのことを、いろいろと、教えて頂きたいのです。協力して頂きたいと、思いますが」

と、小坂井は、いった。

「――」

木崎は、押し黙っている。

突然、息子を失った父親としては、簡単に、協力しますとは、いえないのだろう。

小坂井にも、それは、わかるのだが、連続殺人事件を解決するためには、どうしても、協力して貰わなければ、ならなかった。

小坂井は、じっと、相手を見た。

「息子さんとは、別々に、生活していらっしゃったようですね？」

と、小坂井は、きいた。

それでも、木崎は、すぐには、返事をしなかった。

が、小坂井が、見つめていると、

「そうです」

と、やっと、答えてくれた。

「あのポルシェは、あなたが、買って、息子さんに、贈られたものでしょう？」
「そうです。どうしても、あの車が欲しいというのですからね。今になってみると、車なんか、買い与えなかった方が、よかったかも知れない」
木崎は、少しずつ、高ぶった気持が、落ち着いてくるようだった。
口調も、冷静になってきた。
「息子さんは、喜んでいたようですか？」
「ええ。もう、あの車に、夢中でしたね。サラリーマンなので、通勤に使えない。それで、休みの日には、一日中、乗り廻していたみたいです」
「息子さんは、どこにお勤めだったんですか？」
と、小坂井は、きいた。
「K工業という中堅の機械メーカーで、事務をやっていました。新橋に本社があります」
「K工業なら、名前は、聞いていますよ。日曜日が、休みですね？」
「そうです。来年から、週休二日になると、息子は、喜んでいましたよ」
「二日間、ポルシェを、乗り廻せるからですかね？」
「かも知れません」
「女性には、よくもてたようですね？」
小坂井は、アルバムにあった女性の写真を思い出しながらきいた。
「ええ。そのようです。私の店にも、二、三度、女の子を連れて、やって来たことがありましたよ。そんな時は、得意そうに、ニコニコ笑っていたんですが」
「結婚のことは、どう考えていたんでしょうか？」
「まだ、早いと、いっていました」
「ポルシェを乗り廻したり、若い女の子と遊ぶ方が、楽しかったんですかね？」
「かも知れません。私は、結婚すれば、落ち着いてくれるだろうと、思っていたんですがね」
「落ち着きがなかったんですか？」

「ええ。多少、おっちょこちょいなところがありました」
と、木崎は、いった。
「息子さんは、大きな病気をされたことは、ありませんか？」
「なぜ、そんなことを、聞くんですか？」
「息子さんのことを、いろいろと、知りたいからですよ」
「大きな病気は、したことはありませんよ。それから、念のために、いっておきますが、精神病の治療を受けたこともありませんよ」
「女性のことで、問題を起こしたことは、どうですか？」
と、小坂井が、きいた。
木崎は、むっとした顔で、
「失礼なことは、いわないで頂きたい。私の息子は、そんな男じゃありませんでしたよ」
「しかし、女性は、好きで、何人もと、つき合っていたようですね？」
「そんなことはありません。まじめなサラリーマンでした」
と、木崎は、いう。
小坂井は、押収してあった女の写真を取り出して、木崎の前に、一枚ずつ、並べていった。
ヌード写真を見た時、さすがに、木崎の顔に、狼狽の色が走った。
「これは、全部、息子さんが、撮ったものですよ。かなりきわどい写真もありますね」
と、小坂井は、意地悪くいった。
「――――」
木崎が、黙ってしまったのは、うすうす、息子の女性関係が、乱れていることを、知っていたのだろう。
「問題が起きたことは、なかったんですか？」
と、小坂井は、追い打ちをかけるように、きいた。
「一、二度は、ありました」

と、木崎は、重い口調で、いった。
「どんな問題ですか？」
「そんなことをいわなければいかんのですか？」
「いって頂きたいですね」
と、小坂井は、強い調子で、いった。
木崎は、肩をすくめてから、
「相手の女性から、慰謝料を請求されたことがありました」
「なぜですか？」
「息子は、人がいいのか、気が弱いのか、すぐ、女性のいうことを、受け入れてしまいましてね。結婚してくれというと、うんといってしまって、後になって、いろいろと、もめました。婚約不履行で、訴えられたこともあったりしましてね」
「その慰謝料は、あなたが、払ったわけですか？」
「息子には、五百万とか、六百万という金は、ありませんでしたからね」
木崎は、ぶぜんとした顔で、いった。
木崎が、帰ったあと、小坂井は、佐々木に向って、腹立たしげに、
「あんな甘い親がいるから、子供が、事件を引き起こすんだよ」
と、いった。
夜半になって、木崎雅之の死体解剖の結果が、出た。
胃の中から、かなりの量のアルコール分が、検出されたという報告だった。
「警部。木崎雅之が、検問を見て逃げたのは、酔っ払い運転のせいかも知れませんね」
と、佐々木が、いった。
木崎が、新人モデルの女の子を、深大寺まで、送って行った帰りだったことも、わかった。
彼女の証言で、木崎に、アリバイが、あることも、わかってきた。
「中央公園の事件の時には、木崎雅之は、この女と一緒にいたことは、間違いありませんから、犯人じ

ゃありませんね」
と、佐々木は、机の上に並べた写真を見ながら、残念そうに、いった。
「すると、また、はじめから、やり直しか」
小坂井は、顔をしかめた。気短かな小坂井は、すぐ、腹立たしくなる。佐々木が、眼の前にいなければ、机を、蹴飛ばしているところである。
（この男が、妙なそぶりを見せなければ、道草を食わなくてすんだのに）
と、考えると、どうしても、死んだ木崎雅之という青年に、腹が立ってくるのだ。
「結局、こんな写真は、何の役にも立たなかったわけだよ。くそ！」
と、小坂井が、両手で、机の上の写真を、払い捨てようとした時、佐々木刑事が、
「ちょっと待って下さい」
と、突然、いった。
「何だ？」
「この写真は、案外、役に立つかも知れませんよ」
「何を寝言をいってるんだ。木崎雅之は、犯人じゃないんだ。それに、ここに写っている女たちの中に、被害者がいるわけじゃない。何の役に立つんだ？」
小坂井は、不機嫌に、いった。
そんな小坂井を、佐々木は、あやすように、
「確かに、その通りですが、この写真を見て下さい」
と、一枚の写真をつまみあげて、小坂井に見せた。
「何回も見たよ。木崎が、女と二人で、得意そうに立ってるだけのことだろう。それが、どうかしたのか？」
相変らず、小坂井は、眉をひそめて、いった。
「いや、その二人じゃありません。バックになっているものです」
と、佐々木は、いう。
「バック？　どこかの湖畔だろう。どこだろうと、今度の事件とは、無関係だよ。どう見たって、日比分公園や、新宿の中央公園じゃないからな」

「景色は、どうでもいいんです。車が、写っているでしょう？」
「ああ、赤いポルシェだ。当り前だろう。二人が乗って行った車だよ」
「それが、違うんです」
「違う？　何が」
「このポルシェのプレートナンバーをよく見て下さい。ナンバーは、小さくてはっきりしませんが、字は、『埼』ですよ」
「本当か？」
小坂井は、あわてて、その写真を、眼を近づけて、じっと、見つめた。
最近、どうも、老眼になったのか、細かい字が、よく見えない。
「眼鏡をお貸ししますよ」
と、佐々木がいい、自分のかけていた眼鏡を、小坂井に、渡した。
小坂井は、黙って、それを受けとると、眼に当てて、もう一度、写真を見た。
「なるほどね。埼玉ナンバーの車だな。しかし、これが、何を意味するのかね？　木崎が遊びに行ったところに、たまたま、別の人間が、赤いポルシェに乗って、遊びに来ていたということじゃないのかね？　まさか、この埼玉ナンバーのポルシェが、犯人の車というわけじゃないだろう？」
「それは、わかりません。もう一つ、その赤いポルシェのうしろに、小さく、白い車が、写っているでしょう？」
「ああ、頭だけ見えてる車だな。これが、どうしたんだ？」
「これも、ポルシェです」
「しかし、ちょっと、恰好が違うんじゃないか？」
「ええ。ポルシェ３５６で、オープンカーが人気があります」
「よく知ってるね」
「今度の事件が起きてから、ポルシェの写真を、よ

く見ていますから」
「しかし、この車が、君のいうポルシェだとして、それが、何か意味が、あるのかね？」
と、小坂井が、きいた。
「木崎雅之も、自分のポルシェ９１１に、女を乗せて、行ったんだと思います。とすると、少くとも、三台のポルシェが、この湖に、集まっていたことになります」
「まあ、そうだな」
「偶然とは、思えません。今の日本で、ポルシェを持っている人間は、そう沢山は、いない筈ですから」
と、佐々木がいった。
小坂井は、まだ、佐々木が、何をいわんとしているのかわからなくて、
「早く、結論を、いいたまえ」
「何かで、ポルシェのオーナーが、グループを作って、時々、集まって、ドライブを楽しんでいるというのを、読んだことがあるんです。恐らく、エリート意識が、楽しいんでしょう。この写真は、その時のものかも知れません」
と佐々木は、いった。
「なるほどな。ひょっとすると、犯人も、そのグループに入っているかも知れないというわけだな？」
「そうです。犯人は、犯行に、ポルシェを使っています。つまり、ポルシェを持っていることが、自慢なんでしょう。とすると、オーナーだけのグループに入っている可能性は、十分にあると思います」
と、佐々木は、いった。

第三の事件

小坂井と佐々木は、もう一度、木崎雅之のマンションに、足を運んだ。

探すのは、木崎が入っていたと思われるポルシェのオーナーのクラブの名簿だった。

意外に簡単に見つかったのは、木崎が、別に、それを隠す気がなかったからだろう。いや、むしろ、自慢にしていた気配があった。

木崎が入っていたグループの名前は、「JPC」で、これは、日本ポルシェクラブのイニシアルらしい。

日本という名称がついていたが、二十八人の会員は、東京と、その近県の人間だけだった。

まだ、ポルシェを持つ人は少いせいか、名簿にあった名前の中には、有名タレントや、政治家の名前もあって、小坂井を、驚ろかせた。

「この中に、犯人がいるのかねえ」

小坂井は、名簿の名前を、見ていきながら、呟いた。

「今度の犯人は、赤いポルシェに乗っています。幸い、この名簿には、住所と、電話番号が出ていますから、赤いポルシェだけを、チェックしてみましょう」

と、佐々木が、いった。

「それは、やって貰いたいが、電話はやめるんだ。相手を警戒させてしまうからな」

「わかっています」

佐々木は、胸を叩いた。

佐々木は、若手の七人の刑事たちに、カメラを持たせ、二十八人のメンバーのポルシェを、カラーで、撮ってくることを、指示した。メンバーの中、木崎は、すでに死んでいるから、二十七人のメンバーのである。

若い刑事たちは、それぞれに、望遠レンズつきのカメラや、或いは、超小型カメラを持って、出かけて行った。

一人が、四人のメンバーを受け持って、走り回った。

二日間で、二十七人全員のポルシェを、撮り終った。

黒板に、二十七人の名前が書かれ、その下に、現像、焼付けた写真を、ピンで、とめていった。

赤いポルシェは、あまり多くなかった。

二十七台の中、六台だけだった。あとは、白が十三台、黒二台、シルバー二台、イエロー一台、茶一台、グリーン一台、ゴールド一台である。

「赤いポルシェは、六台だけか」

小坂井は、ちょっと、拍子抜けした顔で、佐々木を見た。

この中に、犯人がいるのなら、簡単に、洗い出せるのではないか。

あとは、証拠をつかむだけでいいのだ。

小坂井は、六人の名前を、見ていった。

年齢と、職業も、書いてある。

一番若いのは、学生の十九歳。恐らく、木崎と同じで、甘い両親が、買い与えたものだろう。

そんなことを想像すると、小坂井は、また、腹が立ってくる。

プロ野球選手の名前も見える。

若手のタレント。一番の年長者は、四十八歳で、宝石商と、書いてある。

東京ナンバーが五台。残りの一台が、埼玉ナンバーで、これは、木崎の写真に写っていたポルシェである。

「これから、どうしますか？　まさか、一人ずつ、引っ張って来て、訊問するわけにもいかんと、思いますが」

と、佐々木が、きいた。

「証拠もなしに、そんなことは、出来ないよ」

と、小坂井は、いってから、
「第一と、第二の事件は、いずれも、日曜日の夜に起きている。次に起こるとすれば、また、日曜日だろう」
「そうですね。次の日曜日は、三日後です」
「その日、この六人を、徹底的に、監視するんだ。捜査員を増やして、二人で、組んで、一台ずつ、監視する。絶対に、まかれちゃいかん」
と、小坂井は、いった。
三日間、捜査は、進展を見ないままに、過ぎて、日曜日になった。
小坂井は、佐々木たち十二人の刑事を前に、朝から、檄を飛ばした。
「少し早いが、今から、問題の六人のポルシェを、監視に当って貰う。徹底的に、つけて、まかれるな。一台は、所沢の車だが、埼玉県警には、話を通してあるから、安心して、動いてくれ」
「それから、少しでも、異常が起きたら、すぐ、連絡すること」
と、佐々木が、つけ加えた。
刑事たちが、覆面パトカーで、出かけてしまうと、小坂井は、がらんとした部屋に、一人、残って、もう一度、黒板を見つめた。
(今日が、勝負だな)
と、小坂井は、自分に、いい聞かせた。
こういう変質的犯人は、一回、二回と、女性を襲ったら、急には、やめられないものだ。
病気だからである。
必ず、今夜も、犯人は、女を襲うに違いない。その瞬間を、逮捕すれば、この連続殺人事件は、解決する。
目的の赤いポルシェに、食っついた刑事から、次々に、連絡が入ってきた。
六台の中、一台のポルシェは、刑事が、その家に行った時は、もう、車庫になかった。
「行先が、わかりません」

と、おろおろした声で報告して来た刑事を、小坂井は、叱り飛ばした。

「そんな泣きごとをいっている間に、探すんだ。暗くなるまでに見つけられなかったら、お前たちは、警察を、辞めろ！」

その一台も、午後になって、見つけ出した。

六台の赤いポルシェには、確実に、刑事たちが、張りついた。

その動きは、逐一、捜査本部にいる小坂井のところに、報告されてきた。

それでも、小坂井は、いらだっていた。

理由は、いくつかあった。

第一は、全てのポルシェを、把握していないことからくる不安だった。

木崎の加入していたＪＰＣのポルシェは、つかまえてあるが、このグループ以外の車だったら、手の打ちようがないのである。

第二は、過去の二つの事件では、赤いポルシェが目撃されていて、小坂井たちは、それが、犯人のものと考えているが、それが、間違っている場合も、考えられるのだ。

第三は、小坂井の性格だった。

小坂井は、優秀な刑事だが、自分以外の人間を、信用していないというところがある。佐々木刑事を、一応、信頼はしているが、それでも、最終的には、不安を持って、見ていたし、他の刑事たちに対しては、なおさらだった。

だから、六台の赤いポルシェを、監視しているといっても、ひょっとして、まかれてしまうのではないかという不安がある。

出来れば、自分で、六台の赤いポルシェを監視していたいのだが、そういうわけにもいかなかった。

少しずつ、陽が落ちて、周囲が暗くなってくる。

夕食が運ばれて来たが、小坂井は、箸をつけず、ポルシェの監視に当っている刑事たちを、無線電話で呼び出しては、しっかり見張れと、怒鳴りつけた。

丁度、部屋に入って来た捜査本部長の浜田が、見かねたように、
「もう少し、部下を信頼したらどうかね？」
と、声をかけてきた。
「信頼はしています。一応ですが」
「それなら、彼等に、委せておいたら、どうかね？」
と、本部長は、いった。
だが、小坂井は、首を横に振って、
「彼等は、まだ、一人前じゃありませんよ。それに、すぐ、楽をしたがる。だから、絶えず、怒鳴りつけていなきゃ、駄目なんです」
「君が、怒鳴るんで、かえって、彼等が、委縮してしまうことだって、あるだろう？　そうじゃないかね？」
「そんな弱い奴は、やめればいいんです」
と、小坂井は、吐き捨てるようないい方をした。
本部長は、何かいいかけたが、いっても無駄だというように、大きく、肩をすくめて、部屋を出て行った。
小坂井は、それだけ、優秀だと認められていたが、一方で、上司に、煙たがられてもいたのである。
しかし、そんなことには、お構いなしに、時刻は、たっていき、夜が、深くなって、いった。
午後十一時。
だが、車の中の二人は、時間を忘れていた。
京王多摩川近くの土手の上に車をとめ、長田と、恋人の北条みち子は、抱き合っていた。
あたりに、他の車はなかったし、この時間では、散策の人影もなかった。
最初は、遠慮がちだった長田も、次第に、大胆になって、みち子のパンティを引き下げ、指先を、滑り込ませていった。
すでに、十分に、濡れている。
みち子の喘ぐ息が、長田に、伝わってくる。
長田のもう片方の手が、彼女の乳房をつかんだ時だった。

突然、大きな音と共に、車の窓ガラスが、叩き割られた。
「あっ」
と、長田が、声をあげて、みち子を抱いたまま、振り向いた時、その顔めがけて、硬い金属の棒が、打ち下された。
強烈な痛みが走り、眼の前が、真っ暗になった。
長田は、そのまま、気を失った。
彼が、意識を取り戻した時、助手席に、みち子の姿は、なかった。
長田は、まだ残っている頭の痛みを、こらえながら、車内灯のスイッチを入れた。
「おい！　みち子！」
と、呼んだ。
その自分の声が、傷にひびいて、長田は、顔をしかめたが、そんな痛みは、問題でなくなっていた。
長田は、ドアを開け、ふらつきながら、車の外に出た。
「みち子！」
と、大声で、呼んだ。
車の周囲を、夢中で、探した。
土手の上を探し、月明りの中で、河原にもおりてみた。
だが、恋人の姿は、どこにもない。
長田の顔色は、蒼白だった。自分を殴った奴が、みち子を、連れ去ったのだ。
長田は、一瞬、どうしていいかわからなかった。
（すぐ、警察に）
と、思ったのだが、みち子は、人妻である。
今夜も、午前二時頃まで、夫が、残業で帰らないと聞いて、車で、誘い出したのだ。
（弱ったな）
長田は、頭を抱えた。
みち子のことも心配だが、彼女とのことが、新聞ダネになった時のことも、長田は、心配だった。
今の勤め先は、プライベートな問題には、干渉し

ないといっているが、それでも、不倫が公になれば、辞めなければならなくなるかも知れない。

長田の顔から、血の気が引いてしまっていた。

（とにかく、彼女を、探さなければ――）

と、思い、車に戻ると、長田は、必死になって、車のライトを使って、周囲を探した。

相手も、車を持っていて、みち子を、遠くへ連れ去ったかも知れないのだ。

長田は、土手の上を、車を徐行させながら、眼を、皿のようにして、探した。

時間は、容赦なく、たっていく。午前一時を過ぎ、午前二時が、近くなった。

みち子のことより、彼女の夫が、残業から帰ってくる時間だということの方が、気になった。

（きっと、騒ぎ立てて、警察にいうかも知れない）

どうしたらいいんだろう？

（おれのマンションで、会えばよかった――）

そう思っても、もう、どうにもならない。

それに、もう、他のどこを探したらいいのかも、わからなかった。

長田は、車の運転席にへたり込んで、しばらく、考え込んでいた。

このまま、自宅マンションに帰って、知らん顔をしていようかとも、思った。

しかし、みち子のことも、心配なのだ。相手は、乱暴な人間である。どうなっているかわからない。

長田は、車を走らせ、公衆電話ボックスを見つけると、そこから、一一〇番することにした。

「京王多摩川の土手の上から、女の人が連れ去られるのを見たんです。心配ですから、すぐ、調べて下さい」

と、長田は、いった。

「あなたの名前を、教えて下さい。今、どこにいるんですか？」

「僕は、ただ、目撃しただけです。早く、探して下さい！」

長田は、叫んだ。
「くわしい話を聞きたいのですよ。その女性の顔立ちや、服装を、教えて下さい。連れ去った人間の特徴も教えて下さい」
「女の人は、身長一六〇センチくらいで、ピンク色の服を着ていましたよ」
「連れ去った人間は？」
「わかりませんよ。とにかく、早く探して下さい！」
大声で、いって、長田は、電話を切って、自分の車に戻った。
これで、警察は、みち子を、探してくれるだろうか？
長田が、車で立ち寄って、五分後に、パトカーが、公衆電話ボックスに、横付けになった。
一一〇番は、かけた人間が、電話を切ってしまっても、つながったままになっているからである。
パトカーに乗っていた二人の警官は、空の電話ボックスに眼をやった。
「いないな」
「とすると、いたずら電話か」
「とにかく、多摩川沿いに、走ってみよう」
と、一人がいい、パトカーは、ゆっくりしたスピードで、土手に向って、動き出した。
青白い月明かりに、多摩川の川面が、光って見える。
その狭い川筋を横目に、パトカーは、十五キロぐらいのスピードで、土手の上を、走った。
時々、とめては、河原を、懐中電灯で、照らしてみる。
「何もないな」
「ああ、何もないね」
そんな会話が、しばらく、続いた。
土手の上を、三十分ほど走ったところで、急に、二人の警官の会話が、変った。
一人が、河原の草むらに、何か、白いものを、見つけたからである。

二人は、パトカーを出て、土手を、駆けおりて行った。

二人の持った懐中電灯の光が、交錯した。

河原の草は、思ったより、高く、密生している。

彼等は、足で、踏みしめるようにしながら、白いものが見えた地点へ向って、突進した。

「人間だ！」

と、一人が叫んだ。

白く見えたのは、下着だったのだ。顔は、草にかくれて、沈んでいた。

二十五、六歳に見える女だった。下着はめくれあがり、パンティが、ずり下げられている。

「ひどいな」

と、警官の一人が、呟いたのは、むき出しになった女の下腹部に、雑草が、押し込まれていたからだった。

若い方の警官は、黙って、見下していたが、年かさの方が、めくれあがった下着を、おろしてやった。

「首を絞められている」

と、年かさが、いった。

「一一〇番してきた女かな？」

「恐らくね」

と、年かさの警官は、いい、同僚に、見ているように注意してから、パトカーのところに戻った。

無線電話で、報告した。

「女が一人、殺されていました。多摩川の河原です。年齢二十五、六歳。身長は一六〇センチくらいと思います。ピンクのワンピースを着ています」

小坂井が、多摩川での事件を知ったのは、死体が発見されてから、一時間後だった。

小坂井は、すぐ、六台の赤いポルシェを監視している部下の刑事たちに、連絡をとった。

だが、どのポルシェも、きちんと、監視されているという。

「間違いないのか！」

と、小坂井は、その一人一人に向って、怒鳴った。

「間違いありません。眼の前に、ポルシェは、とまっています」

と、佐々木は、いい、他の刑事も、

「私の担当したポルシェは、まだ、車庫の中です」

と、いった。

「だが、第三の事件が起きたんだ！」

小坂井は、怒鳴り続けた。彼の不安が、適中してしまったのか、それとも、これは、全く別の犯人なのだろうか？

小坂井は、佐々木刑事に、京王多摩川の河原に来るように、指示しておいて、パトカーで、現場に急行した。

小雨が降り出し、それが、小坂井の気持を、一層、重いものにしていた。

現場には、佐々木の方が、先に着いていた。彼の監視していたポルシェが、調布市内に住む若いタレントのものだったからである。

投光機の強烈な明りの下に、被害者が、横たわっていた。

「殺害の方法は、前の二件と同じで、絞殺です」

と、佐々木が、小坂井に、報告した。

「違うのは、あの雑草か」

「そうです。ひどいことをするものです」

「なぜ、犯人は、あんなことをしたのかな？」

「わかりません。犯人の変質的な性癖のせいなのか、それとも、被害者を、よほど、憎んでいたのか」

「被害者の身元は、わかったのか？」

「まだですが、一時間半ほど前に、男の声で、女が連れ去られたから探してくれという一一〇番があったそうです。服装などは、一致しています」

「その男の名前は、わかっているのか？」

「いえ、男は、姿を消してしまったそうです。どうやら、不倫の関係じゃないかと思います」

と、佐々木は、自分の感想を、いった。

被害者の身元は、夜が明けてから、わかった。

世田谷区烏山に住む北条淳という三十歳のサラリ

ーマンから、妻のみち子が、外出したまま、朝になっても戻らないという捜索願が、警察に出され、その人相や、服装が、被害者のものと一致したからである。

北条みち子、二十六歳。人妻であることも、前の二件と違っていた。

(犯人も違うのだろうか?)

捜査会議が、開かれた。

そこで、問題になったのは、第三の事件が、前の二件と同一犯人によるものかどうかということだった。

「形は、よく似ているね」

と、捜査本部長の浜田が、いつもの冷静な口調で、いい、似ている点を、黒板に列挙していった。

○日曜日の夜に、犯行が起きている。

○狙われているのは、いずれも若い女である。

○いずれも、絞殺である。

○暴行寸前までいっているが、果たされていない。

違う点も、あった。

○前の二件は、独身の女性が襲われたが、今度は、人妻である。

○今回は、女性のものに、雑草が、押し込まれている。

○今のところ、付近で、赤いポルシェを見たという目撃者は、まだ、現われていない。

「君の考えを聞きたいね」

と、浜田本部長は、小坂井を見た。

「私は、同一犯人だと、確信しています」

小坂井は、いつものように、断固とした口調で、いった。

「その根拠は、何だね?」

「この犯人は、病気です。一週間は、自分をおさえ

られるが、日曜日には、爆発する。それで、日曜日ごとに、事件が、起きているんです。その病気が急におさまって、別の人間が、同じことをやったとは、とうてい思えませんな」
「今度、人妻だったのは、偶然だというわけかね？」
「そうです。この犯人は、若い女なら、誰でもいいのかも知れません」
「局部に、雑草が押し込まれていることはどうだね？」
「わかりませんが、犯人は、前の二件で、明らかに、暴行の意志を持っていながら、果たせずにいるのは、恐らく、生れつきの不能なのか、いざとなった時に、役に立たなくなるかでしょう。今度の事件では、そのいらだちが、あんな行為になったんだと、私は、思っています」
「君は、いつも、断定的にいうが、自信があるのかね？」
「もちろん、あります」
と、小坂井は、いった。
「赤いポルシェの件は、どうだね？」
浜田は、多少、意地になって、小坂井に、きいた。
「二つ考えられますね。まだ、目撃者が、見つからないだけかも知れないし、犯人が、危険だと思って、別の車を、使うことにしたのかも知れません。いずれにしろ、同じ犯人であることは間違いありませんよ」
「他に、意見はないかね？」
と、本部長は、刑事たちの顔を、見廻した。
小坂井は、そんなものは、ある筈がないという顔で、じろりと、刑事たちを、ねめ廻した。
案の定、反対の意見を口にする者は、なかった。
「では、同一犯人の線で、追ってくれ」
と、小坂井が、大きな声で、いった。
第三の事件でも、まず、聞き込みが、徹底して行われた。
その結果、二つのことが、わかった。

一つは、現場近くで、白い車を見たという目撃者が、出て来たことだった。
どうやら、白いスポーツ・カーらしい。
もう一つは、被害者が、車で、デイトしていた男の名前が、わかったことである。
いわば、不倫の相手の名前である。小坂井は、長田実という二十五歳のサラリーマンを、引っ張って来させた。
小坂井は、こういう男が、大嫌いだった。そして、当然のこととして、扱いが、荒っぽくなる。
「お前さんが、殺したようなもんだ。それはわかっているんだろうな？」
と、小坂井は、長田に向って、いきなり、浴びせかけた。
長田は、青い顔で、
「そんな。僕も、被害者ですよ」
と甲高い声で、主張した。
小坂井は、顔をしかめて、
「お前さんが、あんな場所へ誘い出さなければ、殺されずに、すんだからだよ」
「でも、僕は、犯人に、いきなり、鉄棒みたいなもので、殴られたんですよ。不可抗力ですよ」
「そんなもの、誰も見てないんだ。ひょっとすると、お前さんが、犯人かも知れんじゃないか」
「とんでもない。僕が、なぜ、彼女を殺さなきゃならないんですか？」
「女に、振られた腹いせかな」
「やめて下さいよ。僕じゃありません」
「それなら、何もかも、正直に、話すんだ。彼女を、よく、あんな場所へ、連れ出していたのか？」
「いつもじゃありませんよ。車の中は、二度目です」
「日曜日だろう。彼女の旦那は、会社が休みじゃなかったのか？」
「働くのが好きな人なんですよ。それで、日曜日でも、仕事があると、いそいそと、出勤して行くんだそうです。それも、彼女には、不満だったんじゃな

いですか」
長田は、他人事みたいないい方をした。
小坂井は、そんな男の態度に、舌打ちしながら、
「それで、最初から、話してみろ。襲われた時の様子だ」
と、いった。
「二人で、車の中にいたら、いきなり、窓ガラスを割られたんですよ」
と、長田は、いった。
「抱き合っていたらだろう？」
「ええ。まあ」
「嘘をつくんじゃない！」
小坂井は、大きな拳で、机を叩いた。
長田は、怯えた顔になりながら、
「僕は、亡くなった彼女のことも考えて――」
「きれいごとをいうんじゃないよ。どっちにしろ、やりたくて、彼女を誘い出したんだろう。それで、窓を割られて、どうしたんだ？」
「あっと思って、振り返った時、頭を殴られたんです。まだ、その傷が残っています」
と、長田は、その辺りを、指さした。なるほど、傷が残っている。
「名誉の向う傷か」
と、小坂井は、皮肉な眼つきをしてから、
「真正面から殴られたんなら、犯人の顔は、ちゃんと、見ているんだろうな？」
「見えるわけないでしょう。振り向いた瞬間、殴られたんだから」
「見てないって！」
「ええ。見てませんよ」
「この野郎。眼は、何のためについてるんだ！」
と、小坂井は、怒鳴った。
「何といわれても、見てないものは、見てないんですよ。車の窓ガラスを割られて、その上、殴られたんです。だから、いってるじゃありませんか。僕も、被害者だって」

と、長田は、口をとがらせた。
「何が、被害者だ。ただ殴られて、気を失って、その間に、彼女を、奪われて、殺されただけだろうが」
小坂井は、腹立たしげに、長田を、睨んだ。
「僕は、警察に協力しようと思って、やって来たんですよ。こんなにバカにされるんなら、帰りますよ」
「帰って、どうするんだ？　被害者の旦那に、謝りに行くのか？」
と、小坂井が、からかい気味に、きいた。
長田は、青い顔で、黙ってしまった。
「いいか。生意気なことはいわずに、必死になって、思い出すんだ。殴られる瞬間のことだ。お前さんは、何も見てないといってるが、何か見てる筈だよ。何でもいいから、思い出せ。それが、仏さんに対する、せめてもの供養だろうが」
と、小坂井は、いった。
「そんなことをいっても――」
「何か思い出すまで、ここから、帰さんぞ。早く帰りたかったら、何か、思い出すんだ！」
「――」
長田は、黙り込んでしまった。
（これは、我慢比べだな）
と、小坂井は、思った。この男は、きっと、何かを見ているに違いないのだ。それを思い出せば、解決の手掛りになるのではないか。

容疑者一号

一時間近くたってから、長田は、疲れたような声で、

「そういえば――」

「そういえば、なんだ？　何か、思い出したのか？」

小坂井は、長田の肩に手を置いて、先を、促した。

「夢かも知れないんです」

「夢でもいいから、何かを見たんなら、いうんだ」

「男の顔を見たような気がします。でも、あれは、夢だったのかも知れません。何だか、ぼんやりとしか、覚えていませんから」

と、長田は、いう。

「とにかく、その時、男の顔を、見たんだろう？　違うのか？　はっきりするんだ」

「見たのは、見たんです」

「よし。どんな男だったんだ？　覚えていることだけでいいから、いってみろ」

「でも、車内の明りは、消えていたから――」

「男だったのは、確かなんだろう？」

「ええ。男です。男の顔が、僕をのぞくように見たんです」

「それは、殴られたあとかね？　殴られる瞬間かね？」

「わかりません。その点が、ぼんやりしているんです」

「まあ、いいだろう。男の顔が、のぞき込んだんだな。若かったか、それとも、年寄りだったかね？」

「わかりません」

「またか」

と、小坂井は、舌打ちしてから、

「大きい男か、小さい男かぐらいは、わかるだろう。どっちだったね？」

「大きかったと思います。怖かったから――」
「オーケイ。大男だな。そいつは、何かいったのか？」
「何もいわずに、僕を見ていたんです」
「多分、君を殴りつけてから、どうなったか、見ていたんだろう。眼鏡は、かけていたかね？　それとも、眼鏡なしか？」
と、小坂井は、きいた。
「多分――」
「多分、なんだ？」
「顔のところが、光ったんです。あれは、眼鏡のガラスだと思います」
「じゃあ、相手は、眼鏡をかけた大きな男ということになる。それでいいんだな？」
小坂井は、性急に、長田に、いった。
「そうですけど、あれは、夢だったのかも知れません」
と、長田は、自信のない顔で、いった。
「それは、われわれが判断するよ。他に、その男のことで、覚えていることはないのかね？」
と、小坂井が、迫った。
長田は、また、考え込んでしまった。
「金色みたいな――」
と、長田が、呟いた。
「何が、金色なんだ？」
「相手の手首で、何か、金色に光ったんです」
と、長田が、いう。
「ちょっと待て。相手の手首というと、その男は、手を伸したのか？」
と、小坂井が、きいた。
「そうなりますか？」
「そうだろうが。いいかね、君は、運転席だ。男は、車の外にいた。その男の手首が見えたということは、男が、車の中に、手を突っ込んで来たことになるんだよ」
「ええ」
「それで、君は男の手首を見たんだ。金色というの

は、恐らく、金のブレスレットだろう」
と、小坂井は、断定した。
「でも、なぜ、犯人が――」
長田は、自分でいっておいて、自分で、戸惑っているようだった。
「それは、こういうことだよ。犯人は、いきなり、君をスパナか何かで、殴りつけた。そのあと、君が死んだかどうか、調べたんだよ。顔をのぞき込み、そのあと、手で、君の脈を診たんだろう。君は、殴られて、気を失ったといっているが、その時は、かすかに、意識が残っていたんだな。だから、ぼんやり、男のことを、覚えているんだ」
「犯人以外の人かも知れませんが――」
と、長田が、いった。
「バカなことをいうな。犯人じゃなければ、すぐ、警察に知らせてるだろうが」
小坂井は、叱りつけるようにいった。
「そうでしたね」
「君は、危うく、助かったんだよ。その時、君の意識が、はっきりしていて、悲鳴でもあげていたら、君は、殴り殺されていたかも知れないからね」
「脅かさないで下さい」
「脅かしじゃないさ。犯人は、もう、三人も殺しているんだからな」
と、小坂井は、いってから、
「そのあと、男は、どうしたんだ？」
「そこで終りです。きっと、本当に、気を失ったんでしょう」
「車の走り去る音は、聞かなかったかね？　ポルシェの音だ」
「覚えていません」
「他には、何か、覚えてないのか？」
「ええ。あとは、気がついてから、隣りに、彼女がいなかった――」
「探したが、見つからなかったんだな？」
「そうなんです。必死で、探したんですが――」

長田は、肩をすくめるようにして、いった。
「また、何か思い出したら、すぐ、連絡してくれ」
と、小坂井は、いい、長田を帰すことにした。
（これで、犯人の輪郭が出来たが）
長田の証言には、あいまいなところはあるが、一瞬に、男の顔を見たのは、本当だろうと、小坂井は、確信した。
凶器は、何かわからない。が、車が使われていることから考えて、スパナだろう。或いは、ハンマーか。
被害者の車の窓ガラスを叩き割ったことから考えて、かなり、力のある男だということが想像される。
手首に、金のブレスレットをはめている。
かなり大きな男である。恐怖感から、実像以上に、相手が、大きく見えたことが考えられるが、小さい男でないことは、確かだろう。
眼鏡をかけている。
これも、間違いないと思うが、今のところ度のついた眼鏡なのか。サングラスなのか判断がつかない。夜だが、サングラスをかけている人間は、いくらでもいるからである。それに、犯罪者なら、顔をかくそうとしてサングラスをかけることが多い筈だ。
小坂井は、部下の刑事たちを前に、黒板に、その三つを書きつけた。
大男
眼鏡
金のブレスレット
「犯人は、この三つの条件を備えた男だ。それに、前の二件では、赤いポルシェに、乗っていたと思われる。ただし、われわれがマークした六台の赤いポルシェは、違っていた。それを除外する」
「ポルシェの件は、どうしますか？」
と、佐々木刑事が、質問した。
「二つ考えられる。ＪＰＣの会員に入っていないポルシェの持主ではないかということもあり得るだろうし、最近他の車に買いかえたＪＰＣの人間かも知

れないということだ」
と、小坂井は、いった。
若い安原という刑事が、手をあげて、
「最近、車の塗装の色を、変えたかもしれません。赤いポルシェのことは、新聞にも出ましたから、犯人は、あわてて、自分の車の色を、塗りかえた可能性があります。JPCの会員の中で、われわれが調べた時は、赤いポルシェではなかったとしても、それ以前に、赤い車だったものも、調べ直してみる必要があるんじゃないかと思います」
といった。
小坂井は、「うん」と、肯いて、
「いいところに気がついた。もう一度、JPCの人間を、調べ直してくれ。赤以外のポルシェの持主をだ」
と、いった。
京王多摩川の周辺での聞き込みから、一つの収穫があったのは、翌日である。
問題の土手ではないが、十メートルほど離れた道路に、犯行時刻近く、一台の車が停っているのを見たという証言である。
その目撃者の証言によれば、その車の色は、黒だった。
小坂井は、迷った。
前に、白いスポーツ・カーを見たという目撃者が、見つかっていたからである。
どちらが、今度の犯罪に関係があるのか、すぐには、判断がつかなかった。
小坂井は、二つの証言を比べてみた。
白いスポーツ・カーの目撃者は、十九歳の浪人生だった。
名前は、三浦健である。
現場近くのアパートの二階に住んでいて、午前三時頃まで、受験勉強をしていたが、時々、息抜きに、窓を開けて、外を見た。その時、通りの向う側に、白いスポーツ・カーが停っていたというのである。

その場所は、土手の上ではないが、現場からは、五十メートルくらいしか、離れていない。
「乗っている人間は、見えたかね？」
と、小坂井は、三浦に、きいた。
「いえ。見えませんでした。乗っていなかったんじゃないかな」
と、三浦は、いう。
「君が、見たのは、何時頃だったんだ？」
「二回見たんです。日曜日の夜の十時頃と、十一時頃です」
「二回とも、同じ場所に、停っていたんだね？」
「そうです」
「その場所は、暗かったかね？」
「ええ。暗い場所に停めてありました」
「それで、なぜ、白いスポーツ・カーと、わかったんだ？」
「十一時頃の時、見ていたら、他の車が、通ったんです。そのライトで、白いスポーツ・カーだと、わかったんですよ」
「日本の車かね？　それとも、外国の車かね？」
と、小坂井は、大事なことを、きいた。
三浦は、少し考えていたが、
「あれは、多分、ポルシェだったと思いますね。いつだったか、写真で見て、乗ってみたいと思っていたのと、同じだったから」
と、いった。
もう一人の、新しい目撃者は、夜釣りの老人だった。
七十歳で、小柄だが、元気な男だった。
彼も近くの道路に、車が停っているのを見たという。
「日曜日の夜だったよ。十一時頃じゃなかったかな」
と老人は、いった。
「車の色が、黒だというのは、間違いないのかね？」
と、小坂井は、きいた。
「ああ、黒だった」

「誰か、乗っていたかね？」
「暗くて、見えなかったよ」
と、老人は、いった。
「どんな車だったのかね？」
「大きな車だったよ」
小坂井は、二つの車を比べてみた。
犯人は一人なのだから、どちらかが、犯人で、もう、一台の車は、事件に無関係なのだ。
小坂井は、黒板に、二台の車が停っていたという地点を、地図に描いた。
横に、多摩川の土手が続き、それに、斜めにぶつかる道路がある。
道路の周辺は、以前は、一面の田や畠だったところで、住宅が建てられている現在も、その名残りのように、ところどころに、空地が見える。
黒い自動車は、土手に近い方に、停っていたことになり、白いスポーツ・カーは、その車から、四十メートルほど後方に、停っていたことになる。
「私としては、この白いスポーツ・カーの方を、問題にしたいと思う。目撃者によれば、このスポーツ・カーは、国産ではなく、外国製らしかったというのだ。つまり、ポルシェの可能性がある。ＪＰＣのポルシェの中で、最近、色を塗りかえたか、買い替えた人間がいないかどうか、調べるんだ」
と、小坂井は、部下の刑事たちに、いった。
彼の予感は、適中した。
ＪＰＣの会員の中に、最近、車を買い替えた男がいたのである。
前に乗っていたのは、赤いポルシェ９１１だったが、今度、新しく買ったのは、同じポルシェ９１１でも、白塗装の新車だった。
買い替えたのは、先週の月曜日。第二の殺人のあった翌日である。
小坂井は、佐々木刑事を連れて、この男に会いに出かけた。
男の名前は、石崎駿。二十八歳である。

四谷三丁目の男のマンションに、パトカーで向いながら、佐々木が、
「この男でしょうか？」
と興奮した調子で、きいた。
「恐らくな。会ってみれば、わかる筈だ」
小坂井は、怖い顔で、いった。
事件が、核心に近づくと、気難しくなるのは、小坂井の癖だった。
四谷三丁目から、二十メートルほど、信濃町方向に入ったところにあるマンションだった。
都心のマンションには珍しく、駐車場があって、いろいろな車が、並んでいる。
「あの車のようですね」
と、佐々木が、パトカーをとめてから、駐車場に置かれた白いポルシェを、指さした。
五〇六号室、石崎と、コンクリートの地面に、ペンキで、書かれてある。
「五〇六号室か」
と、小坂井は、呟きながら、佐々木と、エレベーターで五階へ上って行った。
職業は、「団体役員」と、あったが、どういうものか、よくわからない。
小坂井は、どんな男だろうと思いながら、インターホンを、押した。
ドアが開いて、男が、顔を出した。
薄いサングラスをかけた、大きな男である。
一八〇センチは、楽にあるだろう。
小坂井は、警察手帳を示し、
「石崎さんだね？」
「そうですが？」
と、石崎は、肯いたが、突っ立ったまま、小坂井を見、佐々木を見た。
「ちょっと、話を聞きたいんだがね」
と、小坂井が、いうと、石崎は、
「どうぞ」
と、身体を開いて、二人を、中に招じ入れた。

十八畳ぐらいある広い居間である。床は、大理石の薄板を貼ってあって、冷く、光っている。

団体役員というのは、どういう仕事なのか、よくわからなかったが、金にはなるのか、居間には、古い鎧や、日本刀などが、飾られている。

棚に置かれた壺も、高価な感じだった。

「人手がないので、おもてなしは出来ないが、どんなご用件ですか？」

と、石崎は、ソファに腰を下してから、小坂井に、きいた。

「十月十八日の日曜日の夜ですが、どこにおられました？」

小坂井は、いきなり、きいた。

石崎は、「この間の日曜日ですか」と、小声でいいながら、ポケットから、パイプを取り出した。

それを、もてあそびながら、どう答えたものか、思案している感じだった。

「家で、ライフルの手入れをしていたと思いますよ」

と、石崎は、いった。

「ライフルを、お持ちなんですか？」

「ええ。趣味でね。もちろん、ライセンスは、持っています」

石崎は、立ち上ると、奥から、イギリス製のライフルを持って来て、それを、小坂井と、佐々木に見せた。

小坂井は、拳銃の射撃訓練を、定期的にやっているが、ライフルを射ったことはない。

石崎から受け取って、構えてみた。さすがに、拳銃と違って、ずっしりした重量感がある。

「いつも、手入れをなさるんですか？」

ライフルを返しながら、小坂井は、きいた。

「一週間に、一度くらいですよ。ウイスキーを傍においておいて、ゆっくりと、手入れをする。酒が美味しくなりますね」

石崎は、ニッコリした。

「日曜日の夜は、ずっと、ライフルを、いじってお

られたんですか？」
「そうですよ」
「外出はなさらなかった？」
「ええ。していませんね」
石崎は、表情を変えずに、いった。
「実は、日曜日の夜、あなたを、多摩川で見たという人間がいるんですがねえ」
と、小坂井は、いい、相手の反応を見つめた。
石崎は、すぐには返事をせず、パイプをくわえたまま、ライフルの銃口を、小坂井に向けた。照尺の向うから、じっと狙い、かちっと、曳金を引いてから、
「それは、何かの間違いでしょう。僕は、日曜日の夜は、ずっと、家にいましたからね」
と、落ち着いた声で、いった。
「石崎さんは、ポルシェをお持ちですね？」
小坂井は、質問を変えた。
「ああ、持っていますよ」
「前は、赤いポルシェをお持ちだったんじゃありませんか？」
「よく知っていますね。買い替えたばかりです」
「なぜ、買い替えたんですか？」
と、小坂井がきくと、石崎は、笑って、
「なぜといわれてもねえ。古くなったからというより仕方がありませんね。ただ、僕は、ポルシェが好きなんで、今度の車もポルシェにしましたが」
「色が、白になりましたが、赤をやめたのは、何かわけがあるんですか？」
「あきたんですよ。赤い色にね」
「あなたの、あの白い車が、日曜日の夜、京王多摩川に、停っているのを見た人がいるんです。京王多摩川の河原で、女性が殺されたのを、ご存知でしょう？」
「ああ、新聞で見ましたよ。ひどいことするものだと、腹が立ちましたがね」
と、石崎は、いってから、今、気がついたという

ように、
「まさか、僕が、その容疑者になっているんじゃないんでしょうね？」
「正直にいうと、あなたが、容疑者第一号というわけです」
小坂井は、ニコリともしないで、いった。
「バカバカしい。なぜ、僕が、疑われなくちゃならんのです？」
「このところ、日曜日ごとに、若い女性が殺されています。新聞によっては、日曜日の殺人者と、呼んでいます。十月四日に、日比谷公園で、恋人と、待ち合せ中の女性が殺され、十月十一日には、新宿の中央公園で、近くに住む若い女性が殺され、先日の十八日は、京王多摩川で、人妻が殺されました。前の二回の時、現場近くで、赤いポルシェが、目撃されている。今度は、白いポルシェです。あなたは、十月十二日の月曜日に、急いで、それまで持っていた赤いポルシェを売り払い、新しく白いポルシェを買った」
「なるほど、それで、疑われているわけですか？」
石崎は、ニヤリと笑った。
（白ばくれやがって！）
と、小坂井は、思いながら、
「何とも、あなたの行動が、不可解なのですよ」
「偶然ですよ。偶然。たまたま、前のポルシェが故障がちで、買いかえようと、思っていただけのことです。第一、自分が疑われているとわかったら、全く別の車を買う筈じゃありませんか？」
「団体役員というのは、どんなことをされているんですか？」
と、小坂井は、また、話を変えた。
「僕は、正志会に入っています」
石崎は、誇らしげに、いった。
「正志会？」
「堀江正志先生の後援会です」
「元国務大臣の堀江さんですか？」

「そうです。先生は、将来、首相になる方です」
「なるほど。その正志会で、石崎さんは、どんなことをやっておられるんですか？」
「いろいろです。先生の講演会の準備をすることもあるし、会員の獲得にも動き廻りますしね」
「あなたの収入は、どうなっているんですか？　その正志会から、月給を貰っているんですか？」
と、小坂井は、部屋の中を見廻しながら、きいた。
「まあ、そういうことは、どうでもいいでしょう」
と、石崎は、笑った。
「そのライフルも、高価でしょうし、ポルシェは、確か、一千万以上する車でしょう。かなりの収入がなければ、こんな豊かな生活は、出来ないと思いますがねえ」
小坂井は、意地悪く、いった。
だが、石崎は、むしろ、自慢げに、
「まあ、他人に恥かしくない生活はさせて貰っていますよ」
「金が、お好きなんですか？」
「金？」
「太い金のブレスレットをしていらっしゃるんですね」
と、小坂井は、いった。
石崎は、自分の右手に眼をやった。かなり太い、五十グラム以上ありそうな金のブレスレットが、右手首に、光っている。
石崎は、ニヤッとして、
「これは、プレゼントされたもので、大事にしているんですよ。細工は、イタリアです」
と、嬉しそうに、いった。
「ご家族は、いないんですか？」
今まで、黙っていた佐々木刑事が、ぼそっとしたいい方で、きいた。
一瞬、石崎は、びっくりした顔で、佐々木を見てから、
「まだ、若いですからね。独りでいる方が、気楽で

すよ」
「でも、恋人は、いらっしゃるんでしょう?」
「いや、いません。今は、仕事が生甲斐でしてね。まあ、その中に、いい女を見つけますよ」
と、石崎は、いった。
「もう一度、聞きますが、十八日の日曜日の夜は、家におられたんですね?」
小坂井は、念を押した。
石崎は、急に、表情をかたくして、
「少し、くどすぎるんじゃないですか? 僕は、嘘はついていないんだ。確たる証拠もなくて、犯人扱いするのは、無礼じゃないかね」
と、小坂井を、睨んだ。
(こいつは、嘘をついている)
と、小坂井は、思った。
だが、それを、嘘だと証明するのは、難しそうである。
十月四日、十一日の夜、事件の時、赤いポルシェを、目撃した人間がいた。
十月十八日の場合は、白いポルシェである。
そのナンバーも、覚えていてくれれば、石崎の車だと、断定できるのだが、覚えている目撃者は、いなかった。
その夜は、自宅にいたというアリバイも、崩しにくい。
精密に組み立てられたアリバイの方が、かえって、崩すのが楽だし、一度、崩してしまえば、相手は、潔ぎよく、犯行を認めることが多い。
だが、家にいたというアリバイは、あいまいなだけに、崩すのが、骨である。独身の石崎の場合は、なおさらである。間違いなく、いたという証明も難しいだろうが、その逆も、難しいからである。
小坂井が、黙って、攻め手を考えていると、石崎は、それに、勢いを得たのか、
「女を襲うなんていうのは、女にもてなくて、困っている男のすることじゃないですか? こういって

は、何だが、僕は、女に不自由はしていませんよ。金もあるし、ポルシェもある。黙っていても、女の方で、寄って来ますからねえ」

と、いった。

小坂井も、その点は、認めないわけにはいかなかった。

冷静に見て、この石崎という男は、女にもてる要素を多分に、持っている。

長身で、まあ、ハンサムな方だろう。金もあるようだ。

それに、最近の週刊誌で、「外車を持っていれば、女の方から寄ってくる」と、得意気に話す若者たちの談話を、読んだことがあった。

ポルシェなら、普通の外車より、なお、威力があるに違いないのである。

若者たちは、食をつめても、車を持つ時代になった。だが、外車、それも、ポルシェを乗り廻している若者は、少いだろう。

小坂井と、佐々木は、いったん、撤退することにした。

「あいつは、嘘をついていますよ」

と、外へ出たところで、佐々木が、小坂井に、いった。

「君も、そう思うかね」

「四日も、十一日も、十八日も、夜は、ひとりで、自宅マンションにいたというんでしょう。そんなこと、信じられますか？　日曜日の夜ですよ。車を持っている。金もある。それに若いのにです。それに、あの男は、ひとりで、静かに、本に眼を通すようなタイプでもありませんよ」

「いいことをいうね。同感だな。あの男の周辺を、徹底的に、調べよう。特に女性関係だよ」

刑事たちは、石崎の私生活の調査に、走り廻ることになった。

本当に、女にもてているのか？

なぜ、まだ、結婚しないのか？

この二つを、主として、重点的に、調査対象とした。

刑事たちの調べたことは、次々に、小坂井の手元に、報告されて来た。

石崎は、代議士堀江正志の個人秘書めいたこともやっていて、時々、銀座のクラブへ、連れられて、飲みに行くことがある。

銀座でも、一流といわれる店で、そこのママと、ホステスの証言が、三つほど、集められた。

「石崎さんは、よほど堀江先生を尊敬しているとみえて、お店に来た時は、とても、静かで、飲む方も、ほどほどにしていますわ」

これが、ママの証言である。

ホステス二人の証言は、少し違っている。

「確かに、堀江先生と一緒の時は、大人しいけど、お友だちと飲みに来た時は、なかなか、騒がしいわよ。高いお酒を、がぶがぶ飲むし、ホステスをからかったりするわ。もちろん、ツケは、堀江先生の方ね」

「あの人は、裏表があるのよ。堀江先生の前じゃ、猫かぶってるけど、仲間と来た時なんか、大変。女の子の取り合いで、他のお客と、ケンカしたこともあるしね」

と、二人のホステスは、いった。

石崎は、K大の経済を卒業している。当時のクラスメイトは、大蔵省や、通産省などで、課長補佐ぐらいにはなっていたし、民間でも、管理職にはなっている。

刑事たちは、彼等にも、会って、話を聞いた。

石崎について、いろいろな意見を聞くことが、出来た。

大学時代の親友という男は、石崎と、今でも時々会っていると、いった。

「彼は、見栄っぱりなところがあるけど、殺人なんか出来るとは、思えませんね。堀江正志の後援会に入ったのだって、何とかして、政界に入りたいから

ですよ。今は、堀江の個人秘書みたいなことをしたりして、得意なんじゃないかな。彼は、意外に古いところがあるんで、政界の義理人情には、すぐ、入っていけたんだと思いますよ。女のことですか？大学時代は、まあ、もてていたと思いますよ。よく、女の子と一緒にいたから。ただ、なぜか、長続きはしませんでしたねえ。彼自身は、おれは、気分屋で、浮気性なんだって、笑ってたのを、覚えていますが」

もう一人のクラスメイトは、次のように、証言した。

「二、三年前に、見合いしたって、聞きましたよ。相手は、何でも、会社の社長の次女とかいう話でしたね。なかなかの美人でした。写真を見ましたから。しかし、結局、駄目だったみたいですね。石崎の方から、断ったみたいでしたよ」

男の像

小坂井は、部下の刑事たちから、そうした話を聞くと、まず、石崎と見合いをした女と、会ってみることにした。

女に絡んだ事件だし、女の方が、石崎という男を、正確に見ている可能性があるからである。

小坂井は、自分を古い男だと自認しているが、それでも、男の理屈より、女の直感の方を、信用しているところもある。

女の名前は、原田昌子。旧姓林と、わかった。

ある中堅電機メーカーの社長の次女で石崎と見合いをした時は、二十四歳だった。

小坂井は、一人で、成城学園にあるマンションに出かけて行った。

九階建の真新しいマンションの最上階に、原田の表札がかかっていた。

昌子が、結婚した相手は、父親と同業の電機メーカーの社長の三男だと、聞いていた。

小坂井は、前もって、電話をかけておいたのですぐ、中へ通された。

小坂井から見れば、ずいぶんぜいたくな造りの部屋であり、飾りつけだった。

原田昌子は、小坂井の想像とは、少し違った感じだった。

社長の娘で、甘やかされて育ったろうから、かなり、難しい性格ではないか、石崎が断ったのも、そのせいではないかと思ったのだが、実際に、会った感じは、むしろ、物静かな感じだった。

お手伝いもいないようだし、自分で、小坂井に、お茶をいれ、和菓子をすすめてくれた。

ただ、小坂井が、石崎の名前を出すと、昌子はさすがに、用心深い表情になって、

「あの人のどんなことでしょうか？」

ときいた。

「石崎さんと、お見合いをされたのは、間違いありませんか？」

「ええ。確か、父のお友だちの紹介でしたわ」

「うまくいかなかったんですね？」

「ええ」

「なぜですかね？」

小坂井は、直截に、きいた。

「さあ」

と、昌子は、笑って、

「結局、ご縁がなかったということになると思いますけど」

「見合いのあと、つき合いはなさったんですか？」

「ええ。一ケ月ほどですけど」

「それは、石崎さんが、希望してですか？」

「ええ。お仲人さんも、しばらく、つき合ってみないかと、いわれましたし――」

「あなたから見て、石崎さんというのは、どんな男でした？　正直な感想を聞きたいんですよ」

と、小坂井は、じっと、相手を見つめて、いった。

石崎が、犯人なら、この女性も、ひょっとして、殺されるところだったかも知れないのだ。

或いは、彼女も、石崎と交際していた一ケ月間に、危険を感じた瞬間があったのではないか。

それを聞きたかった。

だが、昌子は、ニッコリして、

「いい方でしたわ」

「私が、聞きたいのは、もっと、具体的なことです」

小坂井は、怒ったような声を出した。

昌子は、困惑した表情になって、

「他に、申しあげようもありませんし――」

「結局、結婚なさらなかったんでしょう？　ということは、彼に、不満を持たれたからじゃないんですか？」

「いい方というのは、本当ですわ。優しいし、よく、気がつく方ですし――」

「それなら、なぜ、結婚なさらなかったんですか？　石崎さんが、金持ちの息子でなかったからですか？」

小坂井が、そんなきき方をすると、昌子は眉をひそめて、

「そんなことは、ありませんわ」

「じゃあ、何が、気に入らなかったんですか？　彼に、信用できない部分があったんじゃありませんか？」

「――」

「正直に話して頂きたいんですよ。彼の友人は、身びいきで、彼の方から断ったみたいなことをいっているようだが、あなたを見て、それは違うと思いましたよ。断ったのは、あなたの方だ。きっと、石崎さんに、信じられないものを感じたからだと思う。それは、何だったんですか？」

小坂井は、問いつめるような、きき方をした。

「何もありませんわ」

「そんな筈はないんだ。私は、殺人事件を、追っかけているんです。このままだと、また一人、新しい犠牲者がでるかも知れんのです。だから、正直に、話してくれませんか」
「石崎さんが、疑われているんですか？」
と、昌子が、きいた。
「そんなことはありませんが、事実の積み重ねが、欲しいんですよ。もし、石崎さんが、女性に嫌われる性格であれば、それが、内向していってということがありますからね」
小坂井が、いうと、急に、昌子は、ほっとした顔になって、
「それなら、あの方は、よく、もてていらっしゃいましたわ」
「それは、どういうことですか？」
「もう、昔のことですから、お話しますけど、石崎さんは、私と、お見合いをした時、他の女の方とも、つき合って、いらっしゃったんです」
「それで、お断りになったんですか？」
「ええ。まあ」
「しかし、なぜ、他の女とつき合っていたことが、わかったんですか？」
と、小坂井は、きいた。
「日曜日に、ご一緒にと思っても、時々、断わられましたもの」
小坂井は、思わず、「日曜日？」と、叫んでいた。
昌子は、びっくりした顔で、小坂井を、見ている。
「本当に、日曜日に、彼は、デイトを断ったんですか？」
と、小坂井は、きいた。
「ええ。いつもじゃありませんけど、二回ほどありましたわ」
「一ケ月の中の二回といえば、日曜日の半分ですよ。何といって、デイトを断ったんですか？」
「仕事が忙しいとか、急用が出来たとか、おっしゃいましたけど、勘で、嘘だとわかりましたわ」



と、昌子は、笑った。
「あなた以外の女と会っていた現場を、見たわけじゃないんですか？」
「そんなことはしませんでしたけど」
「その正確な日付は、わかりませんか？　二年前ですか？　それとも三年前？」
「二年前ですわ。おつき合いしたのは、二年前の十月頃でしたけど」
「すると、十月の日曜日ですね？」
「ああ、そうですわ」
「石崎さんと、つき合っていて、何かおかしいと思ったことは、ありませんかね？　彼の言葉遣いとか、考え方とか、趣味とか、何でもいいんですが」
と、小坂井は、食いさがった。
昌子は、また、当惑した顔になって、
「そんなことをいわれても、たった一ケ月のおつき合いでしたから、よくわかりませんわ」
「何か、思い出してくれませんかねえ、何かある筈なんですよ。突然、妙なことをいったり、優しいのに、意味もなく、犬や、猫をいじめたりといったことがね」
と、小坂井は、いった。
「さあ、そんなことは、ありませんでしたわ」
「しかし、結局、あなたが、石崎さんを断ったのは、何かあったからでしょう？」
「ですから、それは、石崎さんに、他に、好きな女の方がいるとわかったからですわ」
「しかし、その女は、見ていない？」
「ええ」
「すると、彼は、あなたとのデイトを断った日曜日に、他の女性とつき合っていたのではなく、他のことをしていたことも、考えられるわけですね？」
「それは、あり得たと思いますけど」
「女性に対する考え方を、彼が、話したことは、ありませんか？　例えば、女性を信じられないとか、どんな女性が好きとか、嫌いとかですがね」

「さあ、そんなことも、聞いたことはありませんでしたわ。日曜日のことをのぞけば、普通の方でしたわ。頭がよくて、優しくて」
「女性を憎んでいるようには、見えませんでしたか？」
「見えませんでしたわ」
と、昌子は、いった。
小坂井は、捜査本部に戻ると、すぐ、二年前の十月に、今度と同じような事件が起きていないかどうか、調べてみた。
石崎は、日曜日のデイトを、二回、断ったという。彼女は、石崎に他に女がいたからだと考えたらしいが、小坂井は、その時、今回と同じ事件を、起こしていたのではないかと、考えたのである。
若い女が、殺され、しかも、未解決の事件の筈である。
佐々木たちに、調べさせたが、都内で、二年前の十月の日曜日に、それらしい事件は、起きていなかった。
買い物から、自宅に帰る途中、ＯＬが襲われたという事件が、第一日曜日の午後九時過ぎに調布市内で起きていたが、これは、引ったくりで、ＯＬは、怪我をしただけで、犯人も逮捕されている。
「必ず、起きていると思ったんだがねえ」
小坂井は、首を振った。
彼は、自分の推理に、絶対の自信を持っている男だった。
石崎が、犯人に違いないのだ。だとすれば、二年前の十月の日曜日、デイトを放り出したのは、彼が、犯罪を起こしたからに、違いないと思う。
「警部の勘違いということは、ありませんか？」
佐々木が、いうと、小坂井は、声を荒げて、
「おれが、そんなミスをするものか。二年前にも、石崎は、やっているんだよ」
「しかし、現実に、事件は、起きていません」
「だから、おかしいんだ！」

小坂井は、怒鳴るようにいった。
彼は、唸り声をあげて、熊のように、歩き廻っていたが、突然、立ち止ると、
「新聞を持って来てくれ！」
と、佐々木に、いった。
「いつの新聞ですか？」
「決ってるじゃないか。二年前の十月の新聞だ！」
と、また、怒鳴った。
佐々木は、縮刷版を、持って来た。二紙の二年前十月の縮刷版である。
小坂井は、佐々木と、一冊ずつ、持つと、
「東京以外で、奴は、事件を起こしていたかも知れないんだ。日曜日に起こした事件なら、月曜日の朝刊に出ているだろう。念のために、月曜日の夕刊も、見てくれ。必ず、出ている筈だ」
と、いった。
（起きていなければ、おかしいんだ）
小坂井は、眼を光らせて、毎週月曜日のページを、見ていった。
「くそ。あったぞ！」
と、小坂井は、叫んだ。
「ここだよ。隣りの神奈川で、殺ってやがったんだ。横浜市内で、十月六日の日曜日に、殺されてるぞ！」
小坂井が、指で叩いたページには、大きく、次の記事が、のっていた。

〈無残、美人女子大生惨殺さる！〉

十月六日の午後十一時頃、横浜市緑区――のアパート「旭荘」に住むK短期大学二年生の水木千枝子さん(ｎ)が、近くの公園内で殺されているのが見つかった。千枝子さんは、下着を引きずりおろされた恰好で、絞殺されており、犯人は、乱暴しようとしたが、抵抗されたので、殺したものと思われている。
警察は、周辺の変質者を調べている。

殺された水木千枝子の顔写真も、のっている。確かに、美人だった。

小坂井は、すぐ、神奈川県警に電話を入れて、この事件のことを、聞いてみた。

浅井という警部が、電話口に出た。

「その事件なら、残念ながら、迷宮入りになってしまっています」

と、浅井は、いった。

「そうでしょう」

と、小坂井は、いってしまってから、

「いや、失礼。十月に、もう一件、同じような事件が起きていませんか？　次の日曜日か、その次の日曜日に」

「二十日の日曜日に、未遂事件が起きていますが、同一犯人かどうかわかりません」

「やっぱりね。その時、犯人は、目撃されていないんですか？」

「ＯＬですが、背後から羽がいじめにされたんですが、悲鳴をあげたために、犯人は逃げています。従って、顔は、見ていません」

「容疑者は、あがりましたか？」

「何人か、変質者を調べましたがね。どの男も、確証がつかめませんでしたよ」

「事件の夜ですが、近くに、車が、停っていたということは、ありませんか？」

「車ですか？」

「そうです。恐らく、赤いポルシェだと思うんですが」

「いや、その記録はありませんね。何か、そちらの事件と、関係があるんですか？」

と、浅井は、いってから、「ああ」と、ひとりで、肯き、

「今、東京で起きている連続殺人と同一犯人と、思われるんですか？」

「いや、今は、ただ、推測しているだけでしてね。どうも、ありがとう。また、何か、聞くかも知れま

せん」
小坂井は、そういって、電話を切った。
彼は、ニヤッと、笑って、佐々木を見て、
「愉快じゃないか。向うが、迷宮入りにしてしまった事件の犯人を、われわれが、捕まえてやるんだ」
「果して、同一犯人でしょうか？」
「決ってるじゃないか。犯人は、石崎なんだよ」
「しかし、警部。石崎が犯人だとすると、なぜ、二年間、何もやらなかったんでしょうか？」
佐々木が、きいた。
「そんなことは、いくらでも、理由は、考えられるだろうが。東京と、横浜以外で、やっていたのかも知れないし、身体を悪くして、入院していたのかも知れない。或いは、仕事が忙しくて、欲望が、抑さえられていたのかも知れん」
と、小坂井は、いった。
「では、石崎のここ二年間の行動を調べますか？」
「そうしてくれ。身体を悪くして、入院していなかったか？　東京以外に、引っ越したことはないか、そんなことだ」
と、小坂井は、いった。
佐々木たち刑事が、石崎の過去二年間を調べ始めた。
その三日目のことである。
小坂井は、突然、井上捜査一課長に、呼ばれた。
捜査本部長の浜田刑事部長も一緒だった。
「君は、堀江さんの秘書を、犯人扱いしているようだね？」
と、部長が、いきなり、咎めるように、いった。
「容疑者の一人として、調べているだけです」
と、小坂井は、いった。
「他にも、容疑者が、いるというのかね？」
「そうです」
小坂井は、嘘をついた。今は、石崎一本に絞って、捜査している。
「嘘をつきたまえ。石崎さんのまわりに、刑事がう

ろうろしていて、仕事が出来ないと、堀江さんも、怒っておられるんだ。今、石崎さんは、堀江さんの秘書の仕事をしているんだよ」

「彼は、犯人です」

と、小坂井は、いった。

「証拠はあるのかね？」

「状況証拠は十分です」

小坂井は、ポルシェのこと、二年前の見合いのことや、横浜で起きた事件のことを、説明した。

「しかし、犯人だという確証はないんだろう？　どうなんだね？」

と、井上一課長が、横から、きいた。

「もちろん、石崎が殺すところを見た人間は、いません。しかし、彼は、犯人です。また、新しいポルシェを、買い替えたり、アリバイが、あいまいだったり、容疑は、十分です」

「どれも、単に、君が、怪しいと思っているだけのことじゃないのかね。たとえ、そのポルシェが、石崎さんの車であっても、ただ、そこに、車を停めていただけかも知れない。そのくらいの容疑で、一人の人間を、尾行し、監視してはいかんよ」

「堀江代議士が、そう、いってきたんですか？」

と、小坂井は、きいた。

「いや、直接じゃない。警察のOBで、現在、政界にいる人を通してだよ」

と、部長は、いった。

小坂井は、その人間に心当りがあった。前回の選挙で当選した白山代議士に違いない。確か、堀江と同じ派閥に属していた筈である。

「しかし、部長、石崎は、間違いなく、犯人ですよ。もし、彼を野放しにしておいたら、これからも、犠牲者が出ます。私は、それを防ぎたいんです」

と、小坂井は、部長に向って、いった。

「君は、証拠もなしに、決めつけるのかね？」

「これは、確信です」

「君個人のだろう。石崎という男が、前に、同じよ

うな犯罪を、犯しているのかね？」
「いや、それは見つかっていませんが、今もいいましたように、二年前に、横浜で、同じような事件があり、これも、石崎の犯行と、思われるのです」
「それも、君個人の確信なんだろう？」
部長は、意地悪く、きく。
小坂井の顔が、赤くなった。
「そうです。今は、私個人の確信でしかありません。しかし、間違いなく、この男は、犯人です」
「それだけでは、駄目だよ。小坂井君。相手は、立派な一市民で、堀江さんの秘書でもある。そんな人を、ただの見込みだけで、追い廻すことは、許されんよ。マスコミに、取りあげられたら、君は、どう説明するのかね？　証拠はないが、犯人だと、信じていますといって、それで、マスコミを、納得させられるのかね？」
「しかし、だからといって、石崎を、容疑者の枠から外すわけにはいきません」
と、小坂井がいうと、部長は、手を振って、
「何も、容疑者から外せといってるわけじゃない。証拠もなしに、監視や、尾行は、穏やかじゃないと、いっているんだ。どうも、君は、前から、思い込みが激し過ぎるところがあるよ。もっと、余裕のある捜査方針が、とれんのかね？」
「余裕のあるといいますと？」
「今度の事件にしても、君は、石崎一本に絞ってしまって、捜査しているようだが、他にも、容疑者は、いくらでも、考えられるんじゃないかね？　変質者の線は、全く、捜査していないんだろう？」
「していません」
「なぜだね？」
「やりましたが、可能性が、なくなったからです」
「私には、そうは、思えんがね。石崎という男が出てから、君は、変質者の線を、完全に放棄してしまっている。明日からは、この線も、捜査することにしたい。そのつもりで、いたまえ」

捜査本部長である刑事部長に、いわれてしまっては、小坂井には、どうすることも出来なかった。

捜査本部の方針が、大きく、変ってしまったのである。

石崎本命説が崩れ、都内の変質者の線が、主流になった。

辛うじて、石崎も、引き続いて、調べることは、小坂井の抵抗で、認められたが、それに割く人数は、たった二人に、制限された。

小坂井自身と、佐々木刑事の二人である。

「おれは、絶対に、石崎が犯人だと、確信しているんだ」

と、小坂井は、佐々木に、大きな声で、いった。

「私も、同感です」

佐々木が肯いた。

「たった二人で、寂しくなったが、われわれで、石崎を挙げて、上の方の鼻をあかしてやろうじゃないか。それに、圧力をかけて来た連中にもだ」

「わかります」

「どうやったら、石崎が犯人だという確証がつかめるかだがね」

「問題は、二つありますね」

と、佐々木が、いった。

「何だね？　それは」

「一つは、次の日曜日に、また、事件が起きるかどうかということです」

「次の日曜日の石崎の動きだな」

「そうです。もう一つは、二年前の横浜の事件の犯人が、石崎だとして、そのあと、二年間、彼が、なぜ、一回も、犯罪を犯さなかったのか、その理由を、私は、知りたいですね」

「二人で、もう一度、石崎の過去を、洗ってみようじゃないか。それと、本当に、二年間、事件が、起きてなかったかどうかだ。東京、神奈川以外で、起きていたかも知れん」

と、小坂井は、いった。

二人はまず、全国紙の縮刷版を、過去二年間、眼を通すことから、始めた。

場所は、関東に限定しなかった。

今は、北海道でも、飛行機を利用すれば、日帰りできるのだ。北海道や、九州も、除外は、できなかった。

〈若い女性が、殺される〉

といった見出しにぶつかると、小坂井と、佐々木は、すぐ、その事件を扱った県警に電話して、結果を聞いた。

日曜日以外にも、範囲を広げた。

犯人は、日曜日に、若い女を襲っていたが、何かあって、二年間だけ、別の曜日に、変えたかも知れなかったからである。

いくつか、似た事件が、見つかった。

しかし、一つずつ、当ってみると、全て、犯人が見つかり、解決していた。二年間、犯人は、沈黙していたのだろうか？

小坂井は、石崎の二年間を、調べてみた。

彼は、今度の連続殺人事件を、犯人の病気と見ていた。

と、すれば、二年間、全く犯行に走らなかったとは、考えにくい。

何か、強い要因があって、二年間、犯意が抑えられたに違いないのである。

例えば、自動車事故にでもあって、二年間、歩行不能だったといった事情である。

しかし、石崎が、交通事故にあったといった事実は、見つからなかった。

身体は、頑健で、医者にかかったことがないのが、自慢な男だった。

堀江の後援会で、走り廻ったり、彼の個人秘書として、この二年間、休まずに、働いていたことが、わかった。

小坂井は、失望した。

ただ、この二年間に、石崎が、三度、アメリカへ行っていることが、わかった。

一度は、堀江と一緒で、この時は、他に、秘書二人が行き、渡米の目的は、アメリカの経済事情の研究だった。

あとの二回は、石崎一人で、渡米している。

どちらも、滞在は、一週間だった。

小坂井は、直接、石崎に会って、この渡米の目的を、聞いてみた。

「勉強ですよ」

と、石崎は、ニッコリ笑って、いった。

「何の勉強ですか？」

「堀江先生に、よくいわれるんです。日本は、これからも、アメリカとの友好を第一に考えていかなければならない。そのためには、アメリカを、よく知ることが、必要だ。君が政治家を志すなら、折りに触れて、アメリカへ行き、実際に、眼で見て来なさいと。とにかく、アメリカの空気を吸うだけでもいいと、いわれましてね。本当は、一年も、二年も、行ってくればいいんでしょうが、仕事がありますからね。それで、一度に、一週間しか、行って来られなかったんですよ」

石崎は、いっきに喋った。

「アメリカでは、どんな場所を、見て来られたんですか？」

「できるだけ、いろいろな場所をと、歩き廻りましたよ。ニューヨークのハーレムにも、行って来たし、少数民族といわれるプエルトリコ人や、中国人、それに、もちろん、向うにいる日本人とも、会って話して来ました」

「病院へ行ったことは、ありませんか？」

と、小坂井が、きくと、石崎は、顔色を変えて、

「何ですか？　それは」

「ただ、聞いただけですよ。どうなんですか？」

「病院なら、日本の病院へ行きますよ。妙な勘繰り

はしないで欲しいですね」
石崎は、むっとした顔で、いった。
「アメリカでは、どこへ、泊られたんですか？」
小坂井は、平気な顔で、質問を続けた。
「いろいろなところに、泊りましたよ。これも、堀江先生にいわれたんです。だから、高いホテルにも、泊ったし、モーテルにも、浮浪者が、もぐり込むような場所でも寝ましたよ」
と、石崎は、いった。
「これからも、アメリカへ行く積りですか？」
「ああ、行きたいですねえ。アメリカという国は、大きいですよ。魅力があります」
石崎は、また、笑顔になった。
小坂井は、考え込んだ。
この二年間、石崎の身の上に、特別に起きたことといえば、三回のアメリカ行だけである。
しかし、一度は、堀江や、他の秘書と一緒だし、他の二回も、一週間という短かいものだった。
これは、外務省で調べたから、間違いない。
ひょっとして、アメリカに渡って、治療に専念していたのではないかと思ったのだが、たった一週間では、無理である。
「まずいなあ」
と、小坂井は、舌打ちした。
石崎が、犯人だという確信は、変らないが、二年間の空白の説明がつかないのだ。
小坂井は、精神科の医者に、会って、話を聞いてみた。
二度、女を襲い、その中、一人を殺してしまった人間が、二年間、全く事件を起こさず、そのあとで、たて続けに、三件の同じ事件を起こすということが、あり得るかどうかである。
「前の二度のあと、精神科医にかかって、治療を受けたとすれば、あり得ないことじゃありませんね」
と、医者は、いった。
「治療を受けずに、突然、一時的に、治癒してしま

うことが、ありますか？」
「ないことは、ないですよ。特に、その患者を、魅了するものが出来た場合にはね。若い女を襲うという衝動以上のものがです」
「もっと、その人間にとって、刺戟の強いものが、出来た場合ということですか？」
「そうです」
（そんなものが、この二年間の間に、石崎にあったのだろうか？）
小坂井は、また、考え込んだが、佐々木が、
「あれじゃありませんか？」
「あれって？」
「堀江は、二年前に、国務大臣になっています」

逮捕

小坂井の顔が、輝いた。
佐々木のいう通りなのだ。二年前に、堀江正志が、総選挙のあと、国務大臣として、入閣した筈だった。
小坂井は、新聞の縮刷版で、正確な月日を、調べてみた。
総選挙は、二年前の十一月の第一日曜日に行われている。
その後の組閣で、堀江正志は、国務大臣に就任した。
そして、二年間、大臣をつとめ、今年の四月、内閣の改造で、大臣の椅子を退いている。
「関係がありそうだよ。こりゃあ」
と、小坂井は、満足そうに、佐々木に、いった。

「二年間の空白が、ぴったりと、一致しています」
と、佐々木が、いった。
「石崎は、大臣秘書になって、多分、緊張の毎日だったろうと思うね。それで病気が、おさまっていたのかも知れないな。これで、二年間、石崎が、新しい事件を起こさなかった理由が、わかったじゃないか」
と、小坂井は、いった。
「実際に、石崎が、堀江大臣の秘書だったかどうか、調べてみます」
佐々木は、そういって、出かけて行くと、しばらくして、一人の男を連れて、捜査本部に、戻って来た。
「前に、堀江代議士の秘書をやっていて、現在、弁護士として、働いておられる青木さんです」
と、佐々木が、紹介した。
年齢は、四十二歳だという。
「石崎さんのことは、ご存知ですか？」
と、小坂井は、きいた。
「もちろん、よく知っていますよ。堀江さんが、国務大臣になられた時、一緒に、秘書として、働きましたから」
青木は、微笑した。
「秘書は、その時、何人いたんですか？」
「全部で、七人です。まあ、少い方じゃありませんかね」
「石崎さんは、堀江さんの後援会で働いていたんでしょう？　それが、秘書になったというのは、どういう経過でですかね？」
「それは、私にも、わかりませんが、よく、気がきいて、骨身を惜しまず動き廻っていたのを、よく覚えていますよ。堀江さんが、個人的に、給料を払って傭われていた秘書です」
「彼は、堀江さんを、尊敬していたようですか？」
「そうですね。本気で、堀江さんのためなら、死んでもいいと思っていたんじゃありませんかね」

と、青木はいい、暴漢が、堀江に襲いかかった時、石崎が、身を挺して、防いだ話をしてくれた。その時、石崎は、殴られて、左手を骨折して入院したと、いう。

「それだけ、献身的に尽くしていたとすると、休日に、遊び廻るようなことは、出来なかったでしょうね？」

と、小坂井は、きいた。

「そうですね。政治家というのは、忙しいし、大臣となると猶更です。その秘書は、もっと忙しい。私は、二年間、ほとんど、休みを、とりませんでしたよ。石崎さんも、同じだったと、思いますよ」

「彼が、赤いポルシェに乗っていたことは、知っていましたか？」

「ええ。一度、見せて貰いました。車が好きだったようですが、あの二年間は、暇がなくて、乗れないと、こぼしていましたね」

と、青木は、いった。

「ところで、彼は、この二年間に、三回、アメリカに行っています。それは、ご存知ですか？」

「ああ、知っていますよ。確か、堀江さんの指示で、アメリカの経済事情を調べに行ったことがありましたよ。あとは、個人的に行ったんでしょうが、それも、勉強だと、いっていましたね」

「石崎さんは、政界に入るのが、希望なんですか？」

「そのようですね。親分肌のところもあるし、なかなか、頭も切れるから、彼は、政治家に、向いているんじゃありませんかね」

「しかし、それだけじゃあ、政界には出られんでしょう？」

「だから、ゆくゆくは、堀江さんの地盤を譲り受けて、立候補することになるんじゃないかと思いますがね」

「堀江さんは、その気なんですかね？」

「と、思いますよ。石崎さんのことは、とても可愛がっていますからね」

と、青木は、いった。
最後に、小坂井は、彼に、
「石崎さんのことを、どう思います？　一緒に、仕事をして来て、妙だなと、思ったことは、ありませんか？」
「妙な――ですか？」
「ええ。妙な言動は、ありませんでしたか？　突然、怒り出すとか、関係のない言葉を口走るとかですが」
「そんな――」
と、青木は、笑って、
「全く、ありませんでしたよ」
と、いった。
小坂井は、その言葉には、別に、がっかりはしなかった。日常生活で、全く、普通の人間が、突然、殺人を犯すことが、あり得るのだ。
どうやら、石崎は、二年間、仕事に熱中していて、恐ろしい性癖が、抑えられていたと見るべきだろうと、小坂井は、思った。
だが、それを証明することは、難しい。
一方、他の刑事たちは、変質者たちを、洗い出していた。その顔写真と、略歴が、どんどん、集まって来ていた。
記者会見では、捜査本部長が、警察としては、変質者を追っており、何人か、怪しい人物が、浮んでいると、発表した。
小坂井と佐々木が、石崎を追っている方向は、完全に、傍系にされてしまったのである。
小坂井は、腹が立ち、同時に、焦りを感じた。
何とかして、証拠を、つかみたかった。
（次の日曜日が、チャンスになるのではないか）
と、小坂井は、思った。
犯人は、三度、続けて、日曜日に、若い女を襲っている。とすれば、今度の日曜日にも、同じ犯行に走る可能性はあるのだ。
十月二十五日になり、小坂井は、佐々木と、今日こそと、思った。

二人は、夕方から、石崎の家を、監視することにした。

と、いっても、マンションなので、彼の部屋の前に、立っているわけにはいかず、駐車場の彼の白いポルシェと、マンションの入口を、監視することになった。

しかし、午後六時、七時になっても、石崎が外出する気配はないし、白いポルシェも、駐めてあるままである。

「おかしいぞ」

と、小坂井は、急に、狼狽した口調で、佐々木を見た。

「しかし、まだ、外出した気配はありませんが」

「最初から、いなかったんじゃないのか」

「部屋の明りは、ついていますが」

「昼間から、つけたままかも知れん。われわれが、ここへ来たのは、午後五時だ。その時には、もう、部屋を出ていたんだ」

「しかし、白いポルシェは――」

「われわれのマークしている車は、使わんことにしたんだろう」

「見て来ます」

佐々木は、マンションの階段を、駆け上って行ったが、息をはずませて、戻って来ると、

「部屋には、いないようです」

「やはり、昼の中に、出てしまっていたんだ」

「どこへ行ったんでしょうか？」

「東京の何処かの猟場だよ。若い女を襲う場所さ」

「東京は、広いですよ」

「わかってる！」

思わず、小坂井は、大声を出していた。

今日は、ぜがひでも、その広い東京で、石崎の犯行を食い止め、逮捕しなければならないのだ。

「犯人は、公園に引きずり込んで、殺している」

と、小坂井は、眼を光らせながら、いった。

「しかし、警部。公園は、沢山ありますよ」

「日比谷公園と、新宿中央公園は、もう、使ってしまっている。他の公園だ。君の知っている公園を、あげてみろ。この二つの他だぞ」
と、小坂井は、パトカーに戻って、佐々木にいった。
「上野公園、北の丸公園、皇居も入りますか？」
「ああ、皇居外苑も入る」
「芝公園、新宿御苑」
「新宿は、もう入れないだろう」
「神宮外苑、隅田公園、千鳥ケ淵公園、ずいぶん、ありますよ。他にも、浜離宮があるし。いや、これも、時間で入れなくなりますね」
「畜生！　沢山ありやがる」
と、小坂井は、舌打ちした。
「二人で、全部を、警戒するなんて、とうてい出来ませんよ」
「当り前だ。だから、賭けだ。若い女が、来そうな場所は、どこだ？　恋人と待ち合せに使いそうな公園だ」
「神宮外苑かも知れません。原宿、青山、赤坂といったところに、近いですから」
「よし、神宮外苑に、行ってみよう」
と、小坂井は、いった。
「犯人が、そこに現われるとは、限りませんよ」
「だから、賭けだと、いってるんだ」
と、小坂井は、いった。
捜査本部には、全部で、十四人の刑事がいる。
その刑事たちを使えるのなら、全部の公園に張り込ませたいのだ。しかし、他の刑事たちは、都内の変質者の洗い出しに追われ、石崎を追えるのは、小坂井と、佐々木の二人だけである。
一ケ所を見張るより仕方がないのだ。
「神宮外苑へ行ってみよう」
と、小坂井がいい、佐々木が、運転する覆面パトカーは、明治神宮外苑に向った。
着いてみて、改めて、小坂井は、神宮外苑の広さ

に、狼狽した。

この広い中を、二人で、見張るなど、とうてい出来るものではなかった。

幸い、外苑の中を、道路が走っている。小坂井は、佐々木に、その道路をゆっくり、往復させた。

道路の片側に、車が、点々と駐められ、中で、若いカップルが、抱き合っていたりする。

その向うの暗闇は、見えない。今、その暗闇で、石崎が、若い女を殺そうとしているのかも知れないが、一つ、一つ、調べていくには、その暗闇は、広すぎた。

何往復かした時である。

突然、パトカーのライトの中に、若い男と女が、飛び出して来た。

そして、女の悲鳴。

佐々木が、急ブレーキをかけた。

小坂井が、窓から顔を突き出して、

「どうしたんだ！」

「人が、向うで、死んでるんです！」

「若い女だよ！」

と、若い二人が、叫んだ。

小坂井と、佐々木は、車から飛び出すと、若いカップルが、指さす方向に向って、走った。

道路から、林の中に入ると、急に、暗くなる。

佐々木が、懐中電灯で、前方を照らした。

そのライトの中に、大きな人影が、あわてて逃げ出すのが、見えた。

「待て！」

と、小坂井が、怒鳴った。

それでも、相手は、背中を丸めて、より暗い方へと、逃げようとする。

「くそ！」

と、小坂井は、舌打ちし、拳銃を取り出すと、夜空に向って、一発、射った。

「とまらないと、射つぞ！」

小坂井は、叫んだ。

本当に、次は、相手に向って射つ気だった。
その気迫が、通じたのか、相手は、背を向けたまま、立ち止った。
「ここに、若い女が、死んでいます！」
と、佐々木が、甲高い声で、叫んだ。
小坂井は、その声を聞きながら、拳銃を構えて、背を向けている人間に、近づいた。
大きな男だった。
「こっちを向け！」
と、小坂井は、命令した。
相手が、ゆっくり、振り向いた。
ぼんやりと、その顔の輪郭が、見えた。
「やっぱり、君か」
と、小坂井は、満足そうに、呟いた。
石崎だったからである。
佐々木が、近づいて来て、相手に、懐中電灯を、向けた。
石崎が、手で、その光をさえ切った。
「石崎だよ」
と、小坂井は、佐々木に、いってから、
「君を逮捕する」
「私は、何もしていないよ」
「何もしていないだって」
小坂井は、口をゆがめて笑い、石崎の手をねじあげるようにして、後手錠をかけた。
「不当逮捕だぞ。これは」
と、石崎が、大声で、いった。
「文句は、あとで、ゆっくり聞いてやるよ」
小坂井は、突き放すようにいってから、佐々木に、
「すぐ、応援を、呼んでくれ」
といった。
パトカーが、けたたましいサイレンの音をひびかせて、駆けつけてきた。
投光機が、用意され、林の中の草むらに、仰向けに横たわっている女を、照らし出した。
年齢二十二、三歳の女である。

首を締められ、スカートがめくれあがり、下着がずり下された恰好で死んでいるのは、これまでの事件と同じだった。

違っているのは、今度は、犯人の石崎を、逮捕したことだった。

被害者の名前は、平木やよい。二十三歳。大学を出て、OLになったばかりの女だった。

この日、彼女は、ボーイフレンド、原口徹、二十七歳の車で、デイトを楽しみ、夕食をすませたあと、神宮外苑の中に、車を停めていた。

原口が、尿意を覚え、車からおりて、トイレに行っている間に、平木やよいが、何者かに、車から引きずり出され、暗やみで、殺されてしまったのである。

小坂井は、投光機の明りの中に浮び上った被害者の顔を見つめた。

絞殺のせいで、鼻血が出ている。顔には、殴られた痕がある。犯人は、抵抗されたので、殴りつけたのだろう。

むき出しになった下腹部が、いやに、白い。

「よく見ろよ！」

と、小坂井は、石崎の髪の毛をつかんで、顔を、死体の方に、向けさせた。

「おれは、関係ない」

と、石崎は、いった。

「じゃあ、なぜ、死体の傍から、逃げ出したんだ？」

「急に、悲鳴が聞こえたんで、何だろうと思って、見に行っただけだよ」

「都合よく、この外苑にいたもんだな？」

「車で、通りかかったんだ」

「車？　どこにあるんだ？」

「向うだ。白いセリカだ」

「君の車は、自慢のポルシェじゃなかったのかね？」

小坂井は、意地悪くきいた。

「故障したんで、レンタ・カーを、借りたんだよ」

「レンタ・カーをねえ」

と、小坂井は、苦笑してから、佐々木に、
「すぐ、その車を見つけて来てくれ。車からここまでの距離を、ちゃんと、測ってくれ。あとで、大事な証拠になるかも知れないからな」
といった。
白いセリカは、すぐ見つかったが、殺人現場からは、百メートル近く、離れた場所だった。
その距離に、小坂井は、満足した。
明らかに、石崎は、嘘をついていると、感じたからである。
石崎は、車で通りかかって、悲鳴を聞いて、駆けつけたと、いった。だが、実際には、百メートルも、離れたところに、車を、とめていたのである。その距離で、悲鳴が、聞こえる筈がないのだ。
小坂井は、手錠をかけたまま、石崎を、捜査本部に、連行した。
「弁護士を呼んでくれ」
と、石崎は、いった。
「白状すれば、いくらでも、弁護士に、会わせてやるさ」
捜査本部は、混乱した。
変質者の犯行説をとっているところへ、石崎を、犯人として、小坂井が、逮捕して来たからである。
本部長は、蒼い顔で、小坂井に、
「逮捕状もなしに、あの石崎さんを、逮捕したのかね？」
と、いった。
「殺人現場から逃げ出したので、緊急逮捕したわけです」
「石崎さんは、自分が殺ったといったのかね？」
「否認していますが、犯人であることは、間違いありません」
小坂井は、自信満々で、いった。
「本当に大丈夫なのかね？　早くも、堀江さんの顧問弁護士から、不当逮捕だという抗議が、電話で、来ている」

「大丈夫です」
「しかし、彼が、女を殺すところを見たわけじゃないんだろう？」
「見てはいませんが、殺人現場にいて、あわてて、逃げ出したんですよ。午後十一時、たった一人で、神宮外苑で、いったい、何をしていたというんですか」
小坂井は、吐き捨てるように、いった。
「それは、わからんが、公判になっても、大丈夫なんだろうね？」
本部長は、不安気に、きいた。
「それは、われわれのつかんだ証拠より、検事の覚悟によりますね」
と、小坂井は、いった。
小坂井と、佐々木は、必死になって、石崎の有罪の証拠を集めた。
状況証拠は、続々と、集ってきた。
石崎は、昨日から、白いセリカを、レンタ・カーで、借りていたが、彼のポルシェが、具合が、悪いからというのは、嘘だとわかった。
石崎の白いポルシェを、調べたところ、どこにも、故障個所はなく、快適に走ることが、わかったのである。
悲鳴が聞こえたから、何事かと思って、車から降りて、見に行ったという証言も、嘘だということが、はっきりした。
石崎が、車をとめていた場所からは、若いカップルの悲鳴は、聞こえない筈だったし、小坂井たちより先に、死体の傍に近づくことは、百メートルを、一〇秒フラットで走っても、不可能だった。
従って、彼は、若いカップルの悲鳴が起きる前に、死体の傍にいたことになるのだ。
問題の若いカップルの証言によれば、死体を見た時、近くに、黒い人影がいたという。
それが、恐らく、石崎だったのだろうと、小坂井は、考えていた。

彼が、そのあと、死体の傍に、何秒かいたと思われるが、これは、自分が犯人だという証拠を落としてないか、調べていたのではないのか。

小坂井から見れば、証拠は、もう十分と思えた。

彼と、佐々木刑事が集めた証拠に対して、石崎は、碌に、反論できなかったからである。

しかし、地検の検事は、なかなか、起訴に踏み切らなかった。

やはり、堀江に対する遠慮があるのだろう。

今は、平の代議士だが、大臣にもなり、現在も、派閥の重鎮だからに違いなかった。

「もっと、証拠が、欲しいね。決定的な証拠がね」

と本部長も、検事も、いう。

「これ以上、どんな証拠があるというんだ！」

と、小坂井は、腹を立てたが、仕方なく、佐々木と二人、石崎の周囲の人間への聞き込みに、また、出かけて行った。

「連中は、なにを怖がっているんだ」

小坂井は、パトカーで走りながら、何度も、文句を、いった。

「上になるほど、政治家との接触が出来てくるからじゃありませんか」

と、佐々木が、いう。

「だからといって、石崎が犯人だという事実は、変らんよ」

「その通りです。彼以外に、犯人は、考えられません」

「しかし、このままじゃあ、四十八時間の勾留時間が切れて、釈放しなければならなくなっちまうぞ。検事が、起訴してくれないんだから」

小坂井は、「畜生！」と、いった。

もっと証拠が欲しいといわれても、そんなものが、見つかるとは、思えなかった。石崎が、被害者に襲いかかっている写真など、ある筈がないからである。

現場に、犯人の、遺留品でもあればいいのだがと、思って、

「あのボタンだ」
と、小坂井は、気がついた。
日比谷公園の時、現場に、ミラ・ショーンのボタンが、落ちていたのである。
もし、石崎が、ミラ・ショーンの背広を持っていて、そのボタンが一つとれていれば、決定的な証拠になるかも知れない。
逮捕された時、石崎が着ていたのは、国産の背広だった。
二人は、石崎のマンションに着くと、管理人に、立ち合って貰って、部屋の中を調べた。
洋服ダンスは、二つあり、どちらにも、高そうな服が、ぎっしり、詰っていた。
ミラ・ショーンの背広は、八着あった。
「石崎は、ミラ・ショーンが、好きなんでしょうね」
と、佐々木がいう。
「それなのに、わざと、国産の背広を着ていたんだ。多分、ボタンを落としたのに気がついたんだろう」
「しかし、ボタンは、なくなっていませんね」
二人は、八着の背広を、取り出して、もう一度、一着ずつ、丁寧に見ていった。
「これを見ろよ」
と、小坂井は、その中のベージュの背広を手にとって、袖口を、佐々木に見せた。
「ボタンは、三つついているが、一番下のボタンは、つけかえたものだよ。糸が他の二つと、違っている」
「つけ方も、下手ですね。恐らく、石崎が、自分で、つけたんだと思いますよ。糸が、裏側まで通ってしまっています」
「帰宅してから、ボタンが一つとれているのに気付いて、あわてて、予備のボタンを、つけたんだろう」
「持って帰って、証拠のボタンと比べてみましょう。同じものだったら、証拠になりますよ」
と、佐々木は、勢い込んで、いった。
小坂井と、佐々木は、その背広を持って、捜査本部に帰ると、すぐ、証拠のボタンと、比べてみた。

色も、大きさも同じボタンだった。
小坂井は、それを持って、本部長に、会った。
「これは、明らかに、石崎が、犯人である証拠だと思います。この背広は、真新しいもので、簡単に、ボタンがとれるとは思えません。日比谷で、第一の被害者を襲った時、彼女が、引きちぎったんだと思いますね。帰宅して、袖口のボタンが一つとれていることを知った石崎は、あわてて、自分で、予備のボタンを、つけたんです。これは明らかに、彼が――」
「いいんだよ。もう」
と、本部長が、小坂井の話を、さえ切った。
「何のことですか？」
「もういいんだ。石崎は、釈放する」
「そんなバカな。このボタンは、証拠ですよ。彼が、犯人だという――」
小坂井は、顔色を変えて、抗議した。
「小坂井君。ミラ・ショーンの背広を着ている人間が、石崎一人だと思っているのかね？　石崎が、そのボタンをつけかえたとしても、日比谷で落としたとは、限らんじゃないか。とにかく、検事も、今までの状況証拠では、起訴しても、公判が、維持できないと、いってるんだよ」
「誰が、来たんですか？」
「何のことだね？」
「堀江代議士が、直接、やって来たんですか？　それとも、警察のOBが、電話して来たんですか？」
「そんなことじゃない。あくまでも、起訴するだけの証拠が、揃っていないから、釈放するんだよ」
と、本部長は、いった。
小坂井は、歯がみをしたが、上からの指示には、逆えなかった。
堀江の顧問弁護士が、やって来て、石崎を連れて行った。小坂井は、それを、唇を噛んで、見送った。
「おれは、負けないぞ」
小坂井は、佐々木に向って、眉を吊りあげ、宣言

するように、いった。

状況証拠で、犯人としか思えない石崎を、釈放したことは、警察としての、はっきりとした意思表示である。

それは、小坂井たち、事件を担当している刑事たちに対する意思表示であると同時に、外に向っての、意思表示でもある。

捜査本部は、容疑者を、東京都内及び、その周辺に住む変質者と、改めて、断定したのだ。

小坂井にしてみれば、それは、理不尽で、間違った決定だった。

犯人は、石崎に間違いないのである。

さすがに、本部長も、小坂井に対して、君も、変質者を追えとは、強制しなかった。小坂井の頑固さを知っているからだろう。

だが、小坂井と佐々木は、捜査本部の中で孤立し、捜査会議の時も、発言は、抑えられることになった。

「君は、どうするね？」

と、小坂井は、佐々木に、きいた。

「私は、前から、石崎犯人説を信じています。彼が、釈放されても、この考えは、変りませんよ」

佐々木は、しっかりした口調で、いった。

「ありがとう」

と、小坂井は、いった。

「しかし、警部。これまでより、石崎の逮捕は、難しくなりましたよ。状況証拠は、いくら集めても、逮捕の許可は、貰えなくなりましたからね」

佐々木は、冷静に、いった。

「わかっている」

「どうしますか？　これから」

佐々木が、きく。

「方法は、二つあると思っている」

「どんな方法ですか？」

「正攻法で、石崎が犯人だという確証を手に入れ、有無をいわせず、逮捕状を貰う。これが、理想だが、君のいうように、難しいと思うね」

「もう一つは、どんな方法ですか？」
「目には目をというやつだ。石崎は、手を廻して、圧力をかけて来た。汚い手だよ。だから、こちらも、汚い手を使ってやる」
「罠にかけるわけですか？」
と、佐々木は、きいた。
小坂井は、笑って、
「そうしたいが、おれたち二人では、無理だよ。美人の婦警を借りて、次の日曜日に、罠を仕掛けたくても、本部長は、ウンとはいわんさ。そうだろう？」
「では、どうするんですか？」
「君と二人で、徹底的に、石崎を、尾行する。彼が、どこへ行く場合も、つけて行く。奴が、悲鳴をあげるまでだ。たった二人で、やるんだから、辛いぞ」
と、小坂井は、いった。
「それで、目には目をですか？」

追いつめて

翌日の早朝から、小坂井と佐々木で、尾行を、開始した。
小坂井は、徹底する性格だし、石崎や、石崎を、助けようとする人間に対する恨みもあったから、佐々木と組んで、二十四時間の監視だった。
どうしても、二人だけでは、無理な時は、小坂井は、貯金をはたいて、アルバイトを傭い、石崎の監視を、頼んだ。
自分が、尾行する時は、わざと、顔を見せつけた。
車による尾行、徒歩による尾行、そして、石崎が、家に入って、出て来ない時には、こちらも、車を、前にとめて、その中で、身体を休めた。
一日、二日と、続ける中に、石崎の様子が、おか

しくなった。
石崎が、いらだち始めたのだ。
車で尾行している時、石崎が、ふいに、ポルシェをとめ、こちらに、近寄って来た。
怒りを表面に出した顔で、小坂井を、睨みつけた。
「嫌がらせは、やめろ！」
と、石崎は、こちらの車をのぞき込んで、怒鳴った。
小坂井は、黙って、ニヤッと笑っただけである。
相手が、怒って、いら立ってくれれば、くれるほどいいのだ。
石崎の方も、それに気付いたとみえて、パトカーの車体を、蹴飛ばしただけで、自分のポルシェに、戻ってしまった。
ポルシェが走り出すと、佐々木の運転するパトカーも、スタートした。
石崎の焦燥を示すように、ポルシェが、スピードをあげて、疾走する。
「いい具合だ」
と、小坂井は、笑い、他のパトカーに連絡し、石崎を、スピード違反で、逮捕させた。
石崎が、釈放されて、出てくると、小坂井は、また、彼を、尾行した。
石崎が、直接、小坂井に、電話をかけてきたこともある。
「これ以上、おれに、つきまとうと、あんたを馘にするぞ。そのくらいの力はあるんだ」
と、石崎は、脅した。
「結構だ。あんたと心中できるんなら、本望だよ」
と、小坂井は、いってやった。
（とんでもない男を敵に廻したことを、わからせてやる）
と、小坂井は、決意していた。
石崎が、外出する時間が、少くなった。マンションに閉じ籠って、出て来ないのだ。
小坂井は、車を、マンションの前にとめて、監視

する一方、彼は、石崎に、電話をかけた。
石崎が、電話口に出ると、
「自首したまえ。楽になるぞ」
と、いった。
石崎が、音を立てて、電話を切った。
少しずつ、石崎を追いつめているという手応えを、小坂井は、感じていた。
その日も、小坂井は、佐々木の運転するパトカーを、石崎のマンションの前にとめて、監視していた。
無線電話で、小坂井に、連絡があった。
白井という刑事からで、
「今、捜査本部に、小坂井さんに会いたいという女性が、見えています」
と、いう。
「今、忙しいんだよ」
「そういったんですが、石崎のことで、小坂井さんに、どうしても、お話したいといって、動かないんです」
「石崎とは、どんな関係の女なんだ？」
「それも、小坂井さんに話すと、いっています」
「わかった。すぐ、戻る」
と、小坂井は、いった。
「君は、ここで、引き続き見張っていてくれ。おれは、この女に、会ってくる」
そう佐々木にいい残し、小坂井は、タクシーを拾って、捜査本部に、戻った。
小坂井と、佐々木は、捜査本部の中で、孤立していた。さっき電話してくれた白井刑事も、変質者の捜査に出かけてしまっていて、ぽつんと、若い女が一人、小坂井を、待っていた。
「用があるのは、あなたですか？」
と、小坂井が、声をかけた。
女は、はじかれたように、立ち上って、小坂井に近づくと、頭を下げた。
二十一、二歳に見える小柄な女である。一見したところ、平凡なＯＬの感じだった。

「石崎さんのことで、聞いて頂きたいことがあるんです」

と、彼女は、かたい表情で、いった。

「まあ、座って下さい」

と、小坂井は、相手に、椅子をすすめ、自分も、近くの椅子を引出して、腰を下した。

「それで、彼のことで、何を、私に話したいんですか？」

「あの人を、もう、追いかけ廻さないで下さい。お願いします」

彼女は、立ち上って、深々と、頭を下げた。

「彼とは、どんな関係ですか？　ガールフレンドですか？」

と、小坂井は、きいた。

「そんなんじゃありません。私の父が、石崎さんのご恩を受けているんです。あの人は、人を殺すような恐ろしい方じゃありません。立派な方です。なぜ、あんな方を、疑って、追いかけ廻すんですか？」

「それは、疑われるだけのことがあるからですよ」

と、小坂井は、いった。

「それなら、あの人が、立派だという証拠も沢山ありますわ」

「どんなことですか？」

と、小坂井は、きいた。

「父が、事業に失敗して困っている時、石崎さんが、助けて下さったんです」

「金を貸してくれたんですか？　それほど、金持ちとは、思えませんがねえ」

「お金じゃありません。精神的に、励まして下さったし、信頼のおける銀行や、信用金庫を世話して下さったりしたんです。お得意も、紹介して頂きましたわ」

「まさか、石崎に頼まれて、そんな美談を話しに来たんじゃないでしょうね？」

小坂井が、意地悪く、質問すると、彼女は、きっとした顔になって、

「あなたは、どんなに優秀な刑事さんか知りませんが、人間を見る眼が、全くないんですね。石崎さんのことが、全く、わかっていないじゃありませんか」

と、激しい口調で、いった。

小坂井は、そんな女の顔を、負けずに、見返して、

「石崎のことは、よく知っていますよ。権力を嵩に着て、何でも、自分の思うままになると思っている男だよ。しかも、日曜日の夜、車で、どこかへ出かけて行く。その説明も出来ない。限りなく、怪しい男だ。それ以外に、何があるのかね」

「もっと、冷静に、物事を見て下さい」

「それなら、まず、あなたの名前をいいなさい。名前と、住所、それに、何をしているのかだ。そうでなければ、あなたの話を、信じるわけには、いかないね」

「名前は、松本はるかです。今は、それ以外は、いいたくありませんわ」

「なぜです？　お伽話を信じさせたいのなら、全てを話すべきじゃありませんか？　違いますか？」

「警部さんは、頭から、私の話を信じようとなさらないじゃありませんか。だから、今は、これ以上、お話する気になれません。ただ、私の名前だけ、覚えておいて下さい。また、お電話するなり、会いに参ります」

それだけいうと、彼女は、立ち上って、部屋を出て行った。

（何だい？　ありゃあ）

と、小坂井は、首をひねって、見送った。

上からの圧力だけでは、どうにもならなくなったので、今度は、泣き落しに来たのか。

小坂井は、石崎に対する見方を、変える気はなかった。

いや、妙な女が来たことで、ますます、石崎に対する疑いを深めたといってよかった。

小坂井は、すぐ、佐々木のところへ戻った。

パトカーに乗り込み、佐々木の横に腰を下すと、

女の話をした。
「今度は、女を使っての泣き落しですか」
と、佐々木が、いった。
「君も、そう思うかね？」
「石崎も、相当、参っているんじゃありませんか。だから、あの手、この手を使って、逃げようとしているんですよ」
「とすると、石崎が、追いつめられた気持になって、何もかも喋る可能性が、高くなって来たわけだな」
小坂井は、眼を輝かせて、いった。
佐々木も、肯いて、
「同感です。最初、平気で外出していたのに、今は、自分のマンションに、閉じ籠ることが、多くなっています。参っている証拠ですよ」
「じゃあ、もう一度、圧力をかけてくるか」
と、小坂井は、いい、車をおりると、電話ボックスまで、歩いて行った。
石崎のマンションを見ながら、ダイヤルを回していく。
だが、向うの電話は、話し中だった。
五分、六分と、待った。が、いつまでも、話し中が、続いた。
小坂井は、舌打ちして、車に戻った。
「石崎は、どこかと、長話の最中だよ」
「堀江代議士か、警察のOBに、何とかしてくれと、頼んでいるんじゃありませんか？　泣き落しも、失敗したんで」
と、佐々木が、いう。
「そうかも知れんな。また、明日あたり、顧問弁護士が、押しかけてくるかも知れんな」
「覚悟しておいた方が、いいですよ。最後のあがきでしょうが」
と、佐々木が、笑った。
しかし、その日も、次の日も、何の圧力もかかって来なかった。
堀江代護士から、刑事部長の方に、電話もかから

なかったし、顧問弁護士も、やって来ない。
「どうなってるんだ？」
と、小坂井は、佐々木に、きいた。
「もう、石崎を庇いきれないと、判断したんじゃありませんかねえ」
「そうだろうか？」
小坂井は、首をひねった。
石崎について、まだ、決定的な証拠を、摑んだわけではない。逮捕令状が出ない状況は、いぜんとして、続いているのだ。
それなのに、堀江代議士や、弁護士は、石崎を、庇い切れないと、考えるだろうか？
「ひょっとして――」
「何ですか？」
「石崎を、海外へ逃がす気じゃないかな？　奴は、何回も、アメリカへ行っていて、向うの生活に馴れている。それに、彼が出国するのを、止めることは、出来ないんだ」
小坂井が、顔をしかめて、いった。
「その可能性は、大きいですよ」
と、佐々木も、顔を変えていた。
石崎が、海外へ逃げてしまったら、間違いなく、小坂井たちの負けなのだ。
しかし、石崎は、海外へ出る気配を見せなかった。
その代り、小坂井は、捜査本部で、仮眠をとっているところを、佐々木の電話で叩き起こされた。
「石崎が、死にました。自殺です」
小坂井は、はね起きた。
「石崎が、死んだって？」
「そうです。車の中で、あのマンションを監視していたんですが、急に騒がしくなったんで、あわてて、中に入ってみたんです。そうしたら、石崎は、自分の部屋で、首を吊って、死んでいました」
「すぐ、行く」
小坂井は、電話を切ると、パトカーで、石崎のマンションに、駆けつけた。

佐々木が、青い顔で、小坂井を迎えた。
石崎は、奥の寝室の梁に、ロープを結び、それで、首を吊っていた。
石崎の身体が、大きく、重いせいで、ロープは、今にも、切れそうに見えた。
石崎は、鼻から、血を噴き出し、口を大きく開いた形相で、魂切れている。
小坂井は、佐々木と二人で、石崎の死体を床に、おろした。
「鑑識を呼んでくれ」
と、小坂井は、佐々木に、いった。
こんな結末を迎える筈ではなかったという思いが、小坂井の顔を、青ざめたものにさせていた。
追いつめて、犯行の全てを、自白させてやるつもりだったのだ。
鑑識が来るまでの間、小坂井は、居間や、寝室を、調べてみた。
せめて、罪を告白した遺書でも見つかればと思ったのだが、それらしいものは、一つもなかった。
鑑識と一緒に、捜査本部長が、これも、青い顔で、駆けつけてきた。
本部長は、小坂井の顔を見るなり、
「何ということをしてくれたんだ！」
と、怒鳴った。
一瞬、その言葉の意味がわからなくて、小坂井が、ぽかんとしていると、
「これは、君の強引な捜査に対する抗議の自殺なんだよ」
「そんなことは、ありません。抗議の自殺なら、遺書がある筈ですが、それがありません」
「ついさっき、私のところに、届いたんだよ。堀江代議士や、弁護士のところにも、届いている筈だ。いいか、君。これが、マスコミに取りあげられたら、大変な騒ぎになるぞ」
「しかし――」
「これを、読んでみたまえ」

と、本部長は、部厚い封筒を、小坂井に投げて、寄越した。

宛名は、「捜査本部長殿」になっていて、差出人の名前は、石崎だった。

小坂井は、居間のソファに腰を下し、封筒の中身を取り出した。

便箋数枚に、達筆で、書かれていた。

〈捜査本部長殿

小生は、目下、連続殺人事件の容疑者として、あなたのところの小坂井警部と佐々木刑事に、追いかけられています――

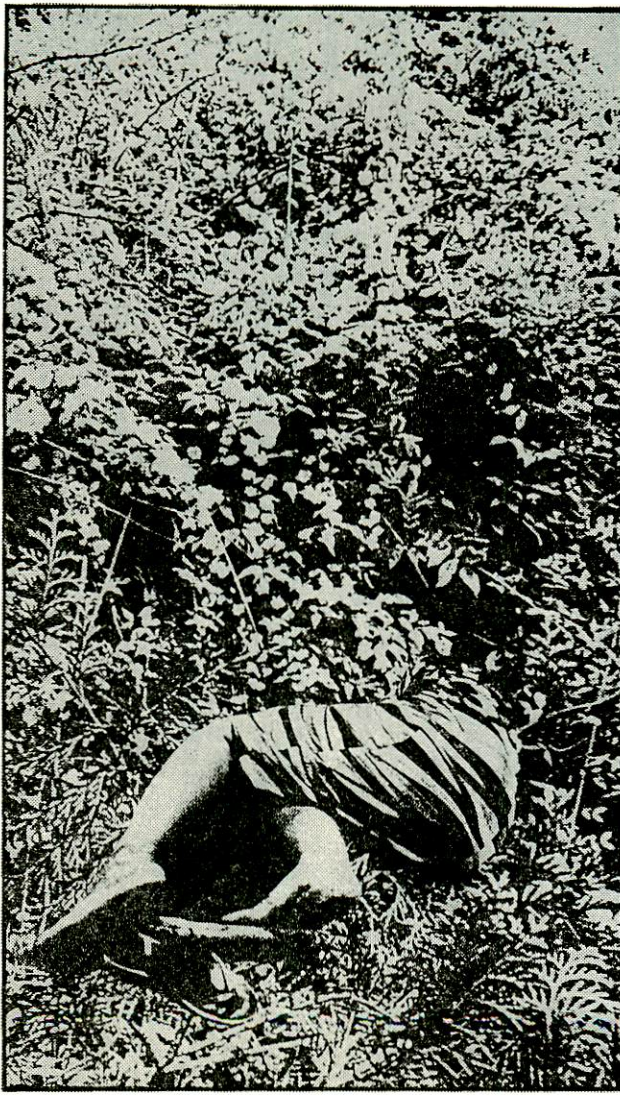
彼等は、何が何でも、小生を、犯人に仕立てようと必死です。先に、私を逮捕し、証拠不十分で釈放しなければならなかったにも拘らず、絶えず、私を尾行し、監視しています。

それが、小生にとって、いかに苦痛であるか、同じ目にあった者でなければ、わからないと思いま す。ひそかに、尾行されるのなら、まだ、いいでしょう。しかし、この二人は、小生に圧力をかけるべく、わざと、見せびらかすように、尾行し、監視するのです。それだけではありません。小生が、誰かと話をすれば、その人間を訊問します。小生が、警察に疑われている凶悪犯だという印象を与えるためです。

一般の人たちは、それだけで、あたかも、小生が、犯人であるかのような眼で見ることになります。この状態では、堀江先生の秘書も務まらず、正志会の会員であることも、出来ません。先生や、同志の方々に、ご迷惑をおかけすることになるからです。

小生は、誓って、誰一人、殺しておりません。小生を知っている人たちに聞いて頂ければ、そんな人間でないことを、証言してくれる筈なのです。

しかし、小坂井警部と、佐々木刑事の二人は、小生の言葉を、全く信用しようとはしないのです。



ただ単に、事件の日に、車に乗って、外出していたので、たまたま、事件の現場に居合わせたから、連続殺人の犯人に違いないと、決めつけるのです。事件を解決しようという熱意はわかりますが、これは、明らかに行き過ぎです。

朝となく、夜となく、絶えず尾行し、監視されるのは、これは、拷問です。小生の抗議も、聞き入れて貰えません。小生は、疲れ切ってしまいました。これが、日本の警察のやり方なのですか？　民主警察を標榜する警察の態度ですか？

このままでは、死を以て、抗議せざるを得なくなりそうです。

石崎生〉

小坂井は、黙って、その手紙を、佐々木に渡した。

「君の感想を聞きたいものだね」

と、本部長が、小坂井に、いった。

「石崎は、間違いなく、連続殺人事件の犯人です」

小坂井は、ぶぜんとした顔で、いった。

本部長は、そんな小坂井を、睨みつけるように見て、

「そんなことは、もう、どうでもいいんだ」

「それは、どういうことですか？」

「同じような抗議文は、堀江代議士のところにも、弁護士のところにも、ひょっとすると、マスコミ関係にも、送られていると、思っている。これから、警察は、袋叩きになるのを、覚悟しなきゃならんのだ」

「誰が何といおうと、石崎は、犯人です」

と、小坂井は、同じ言葉を、繰り返した。

本部長は、ますます、不機嫌になって、

「それを、新聞記者たちの前で、いってみたまえ。もうすぐ、記者たちが、押しかけてくるからね。君たち二人が、行き過ぎた捜査で、非難されるだけじゃないんだぞ。警察全体が、非難されるんだ」

「石崎の容疑は、十分でした。確かに、状況証拠だ

けでしたが、私にいわせれば、それでも、彼を犯人と断定するのに、十分です」

「それは、君が、勝手に、思っているだけだろうが」

本部長は、吐き捨てるように、いった。

彼の予想は、当っていた。

石崎の死が公になると、マスコミは、こぞって、警察のやり方を非難した。

〈抗議の死〉

と、いう文字が連日のように、新聞紙上に、現われた。

堀江代議士が、顧問弁護士を通じて、正式に抗議して来た。

小坂井と佐々木の捜査が、いかに、石崎の人権を無視した強引なものだったかを、告発する趣旨のものだった。証人も、見つけてきた。石崎と話をしていたら、あとで、小坂井に、訊問されたという証人である。

それは、事実だったから、小坂井も、佐々木も、弁明しなかった。

マスコミを含めての抗議の前に、石崎は、犯人に違いないという小坂井の言葉など、消し飛んでしまった。

石崎の葬儀の時は、抗議の声も、最高潮に達した。

こんな時には、すぐ、抗議のためのグループが出来て、それが、圧力団体になっていくものだが、石崎の場合にも、同じだった。

警察の強引な捜査に対する抗議グループが生れ、桜田門の周辺を、デモ行進した。

小坂井と、佐々木の自宅には、抗議の手紙や、電話が殺到した。

特に、電話は、ひどかった。こちらが出れば、「バカ、死ねー」と、叫んで切ってしまう。ただ、無言でいるという電話もあった。朝から、夜中まで、ひっきりなしに、かかってくるのだ。

小坂井や、佐々木自身は、我慢が出来たが、家族が、大変だった。殊に、佐々木の場合は、まだ幼ない娘がいて、夜中に、怖がって、泣き出した。仕方なく、妻と娘を、一時、親戚に、避難させたほどだった。

刑事部長は、警察の捜査に、行き過ぎがあったことを認めて、謝罪し、小坂井と、佐々木を、事件の捜査から外すと共に、一ケ月間の停職処分にした。

そうでもしなければ、この騒ぎは、収拾がつかなかったのだ。

抗議の声は、やっと、静かになった。

捜査方針も、当然、東京周辺の変質者一本に、絞られることになった。

改めて、何十人かの変質者のアリバイが、洗い直され、過去の三件について、アリバイのない二十九歳の男が、逮捕された。

名前は、中西勇である。

婦女暴行で、二回、逮捕されている男で、現在は、アル中だった。

それを、刑事たちは、犯人の証拠の一つと考えた。

若い女に対して、乱暴を働こうとするが、アル中のために、セックスが出来ない。そのために、腹を立てて、相手を、殺害するのだろうとである。

中西は、訊問中にも、アル中特有の症状を見せた。酒を飲ませると、急に、雄弁になり、とくとくと、女を殺した方法を、喋った。

酒が欲しいために、訊問する刑事に、おもねるような自供をするのだと、考える刑事もいたが、本部長は、それを、犯人の証拠と、考えた。

警察全体が、この事件を、一刻も早く、解決したがって、いたのである。

起訴しても、恐らく、心神喪失で、無罪になり、強制入院ということになるだろうといわれたが、中西を、起訴することになった。

今度は、抗議運動は、起きなかった。

捜査本部は、解散された。

停職になった小坂井は、無念やるかたない気持で、家に閉じ籠っていたが、そんな彼のところへ、手紙が、届いた。

宛名は、小坂井様になっているのだが、差出人の名前は、ない。

（また、抗議の手紙か）

と、思った。抗議の手紙のほとんどが、匿名だったからである。

（それにしても、今更、何を抗議する気なんだ？）

と、腹を立てながら、小坂井は、封を切った。

〈小坂井様

なぜ、私のいうことに、耳を貸して下さらなかったのですか？　あの時も、申し上げたのですが、犯人は、石崎さんではありません。他にいます。もちろん、中西勇というアル中の人ではありません。日本の警察は、優秀だと信じていたのに、皆さん、真実が、見えないのですね〉

小坂井は、捜査本部に、抗議に来ていた若い女のことを、思い出した。

署名はないが、あの女の手紙に、違いなかった。

封筒の消印を見ると、札幌になっていた。

北海道を旅行している時に、この手紙を書いたらしい。

（石崎は、犯人だよ）

と、思いながら、この手紙が気になったのは、中西勇のことも、犯人ではないと、いい切っていることだった。

手紙の主は、「もちろん――」という強い言葉で、中西勇が、犯人ではないと、断言している。

マスコミは、中西勇が犯人という警察の発表に、同意している。

中西は、アル中で、婦女暴行の前科があるだけではなかった。定職を持たず、すでに六十歳を過ぎた両親から、金をせびり、断られると、殴りつけてい

た。思い余った母親が、何度か、パトカーを、呼んでいた。

中西は、アパート暮らしだったが、近所の評判は、すこぶる悪かった。若い女を追いかけ廻し、悲鳴をあげるのを喜んだり、入浴中をのぞいたり、気に入らないといって、突然、相手を殴りつけたりするからである。

連続殺人の犯人でも、不思議はないと思われたのである。こうしたことは、全て、新聞に、出ている。

手紙の主も、読んだ筈なのに、中西勇は、犯人ではないと、書いている。

(真犯人を、知っているということなのだろうか?)

だが、小坂井にいわせれば、真犯人は、石崎なのだ。

(手紙の主に、もう一度、会ってみたい)

と、思った。

確か、松本はるかと、名乗ったと、覚えている。小柄で、OLの感じの女だった。

そして数日後。

小坂井は、朝刊に、次のような記事を見た。

〈小樽の運河で、東京のOLが水死〉

という記事である。

小さな顔写真が、のっていた。

(よく似ている)

と、思った。が、名前は、松本はるかではなかった。

身元不明の女性とだけ出ていた。

普段の小坂井なら、別人かどうか、調べるところだが、今は、その気力がなかった。

(どうせ、死んでしまっているのだ。あの時の女としても、もう、何も聞けないことに、変りはない)

と、考えてしまった。

佐々木が、訪ねて来たのは、そんな時だった。話があるというので、小坂井は、家を出て、近くの公

園に、佐々木を連れて行った。
そこへ行く途中で、小坂井は、手紙のことを、話した。
「なんなら、私が、その女のことを、調べて来ましょうか？」
と、佐々木が、いった。
「いや、調べても仕方がないだろう」
「しかし、気になるんでしょう？」
「なるが、調べても仕方がない。それより、君の話というのは、何なんだ？」
と、小坂井が、きいた。
「実は、警察を辞めようと、思っています」
と、佐々木が、いった。
「辞める？」
びっくりして、小坂井は、佐々木を見た。
「家内とも、相談しまして、辞める決心をしたんです。ずっと、迷惑のかけっ放しでしたから」
「今度の事件についての不満からかね？」
「不満というより、辞めるべきだと、考えたのです。私としては、今度の事件は、忘れたいのです。しかし、警察にいる限り、忘れられない気がします。ですから――」
「しかし、君は、今、手紙の主の女のことを、調べてみましょうかと、私に、いったじゃないか？」
と、小坂井は、きいた。
「辞めるからには、心残りが、ないようにと思ったのです。警部が、どうしても、手紙の件を調べたいといわれれば、私は、調べたあとで、退職するつもりです」
と、佐々木は、いう。
「どうしても、辞めるのかね？」
「はい。家内にも、辞めると、いってあります」
「君がいてくれないと、私は、困るんだがねえ」
「優秀な刑事は、いくらでもいますよ」
「本当に、頼りになるのは、いないものだよ」
と、小坂井は、いった。

「そういって、頂いて、有難いと思うのですが」
佐々木は、言葉を、濁した。
佐々木は、口数が少ない男である。必要なことしかいわなかった。
それだけに、辞めるというのを、翻意させるのは、まず、無理だろうと、思った。小坂井自身も、頑固だが、佐々木も、負けずに、頑固である。
「辞めて、何をするんだ？」
「平凡な、普通のサラリーマンを、やろうと思っています。その方が、家内は、安心だというものですから」
と、佐々木は、いった。
「私も、君と一緒に、辞めたいんだが、そうもいかん」
小坂井がいうと、佐々木は、
「そんなことは、気にしないで下さい。私は、勝手に、辞めるんです。警部は、今後も、警察に、必要な方です」
「君は、まだ、石崎が犯人だと、思っているかね？」
「思っています」
「そうか」
と、小坂井は、肯いてから、
「辞める君に、余計なことを、聞いてしまったな。事件のことは、忘れたまえ」
と、つけ加えた。
翌日、佐々木は、停職中だが、警視庁に行き、捜査一課長に、退職願を出した。
「そうか。辞めるのか」
と、課長は、いった。

二十年の空白

刑事課長も、別に、佐々木を慰留しなかった。むしろ、石崎を犯人と断定し、自殺に追いやった小坂井と佐々木の中、片方が、自ら辞職してくれたことを、歓迎しているような空気があった。

新聞の中には、佐々木が、今度の事件の責任をとって辞めたのだろうと書いたものもある。

小坂井は、警視庁に、残った。

一時、デスクワークに廻されたが、一年後、現場に、復帰している。

しかし、大事件で、チームを組んでの捜査の時には、ほとんど、参加できなかったし、彼の方でも、一匹狼の捜査を好んだ。佐々木刑事が辞めてしまったので、本当の孤独な捜査に、終始したといってもいい。

この年、亀井が、捜査一課に、入って来た。

亀井が、二十七歳だった。

十津川が、捜査一課に来たのは、更に、四年後である。

好奇心の強い十津川は、捜査一課に入ってすぐ、小坂井に、興味を持った。

狷介な感じの刑事というのは、意外に多い。職業柄、自然に、そんな性格になってしまうのかも知れない。自信がなければ、凶悪な犯人を追っかけ、逮捕することは出来ないし、その自信過剰のせいで、どうしても、他人からは、狷介に、思われてしまうのである。

だが、十津川から見て、小坂井の感じは、ただの狷介さとは、どこか、違って見えた。

何か、秘密を持って、それを、持て余して、毎日、うつうつとして、楽しまないように、見えたのだ。

十津川が、そのことを、先輩の刑事に、質問する

と、
「それは、日曜日ごとに起きた連続殺人事件のためさ」
と、五年前に起きた事件のことを、話してくれたのである。
小坂井警部は、誤認逮捕した揚句、佐々木と二人で、相手を追いつめ、自殺させてしまった。そのことが、重いしこりになって、残っているのだろうと、いうのである。
だが、十津川が、見たところ、それだけではないような気がした。
(いろいろと、聞いてみたいな)
と、十津川は、思ったが、仕事に追われたのと、小坂井の表情に、近寄りがたいところもあって、聞きそびれて、過ごした。
十津川が、小坂井と二人だけで、ゆっくり話し合うチャンスを持ったのは、彼が、刑事になって、三年目である。
ある事件が解決したあと、十津川が、小坂井を、夕食に誘った。
「いろいろと、先輩の小坂井さんに、お話を伺いたいのです」
と、十津川は、本心でいった。その気持も、あったからである。
新宿西口のビルの五階にあるレストランだった。
「おれの話なんか聞いても、仕方がないぞ」
と、小坂井は、いったが、つき合ってくれた。
小坂井も、誰かに、話をしたい気分になっていたのだろう。
小坂井は、ほとんど、箸をつけず、その分、酒をよく飲んだ。
「本当は、医者に、酒をつつしむように、いわれているんだがね」
と、いいながらも、小坂井は、盃を重ねていった。
「小坂井さんは、何か、心に、わだかまるものがあるんじゃないかと思っていたんですが、違います

か？」

十津川が、きくと、小坂井は、じろりと、見返して、

「そんなことを聞いて、どうするんだ？」

「ただ、知りたいんです」

十津川が、いうと、小坂井は、笑って、

「ただ、知りたいか」

「そうです。あの連続殺人事件のことが、今、どうなっているのかも知りたかったんです」

「どうもなっていないさ。アル中の青年が、犯人として逮捕され、事件も、解決しているよ」

「その青年は、今、どうなっているんですか？」

「裁判では、心神喪失で無罪になり、病院に入ったが、去年、亡くなったそうだ」

「その青年が、真犯人だったんですか？」

「君は、何が知りたいんだ。あの事件から、もう七年たっているんだよ」

と、小坂井は、いった。

「しかし、小坂井さんの中では、まだ、終っていないんじゃありませんか？」

十津川が、きいた。

小坂井は、すぐには、答えず、黙って、二杯、三杯と、盃を、重ねていたが、

「そうだねえ」

と、当惑した眼になった。

「小坂井さんは、石崎という男を、犯人として、追っておられたんでしょう？」

「そうだ。辞めてしまった佐々木君とね」

「小坂井さんは、今でも、石崎という男を、真犯人と、確信しておられるんじゃないんですか？」

と、十津川は、きいた。

小坂井の表情が、動いて、

「そう思っている人も、何人かいるらしい。だから、おれが、いつも、面白くなさそうな顔をしているんだとね」

「違うんですか？」

「君にだけ話すんだが、それなら、悩みはしないよ。おれは、正しかったんだと思い、これからの事件に、体当りしていけるからね」
「よくわかりませんが、小坂井さんは、アル中の青年も、犯人ではないと、思っておられるんでしょう？」
「あれは、警察が、体面を保つためと、マスコミを納得させるために、逮捕したんだと、思っているよ」
と、小坂井は、いった。
「もし、この青年が、シロなら、小坂井さんや、佐々木さんが正しくて、石崎が、真犯人だったということじゃないんですか？」
十津川は、首をかしげて、小坂井を見た。
「最近まで、そう考えていたんだがねえ」
「違うんですか？　小坂井さんたちも、間違っていたというわけですか？」
「はっきり、そう思っているわけじゃないんだがねえ」
小坂井は、急に、口が重くなってしまった。十津川に、喋ってしまったことを、後悔しているようでもあった。
十津川は、小坂井が、何を隠しているのだろうと、思いながら、
「あの事件は、あのあと、どうなったんですか？」
と、きいた。
「あのあとというのは、どういうことだね？」
「石崎が、自殺し、アル中の青年が、逮捕されたあとです。若い女に対する連続殺人事件は起きなくなったんですか？」
「ぴったりと、起きなくなったよ。だから、刑事部長なんかは、アル中の青年が、犯人だという何よりの証拠だと、自信を深めたし、マスコミも、納得したんだ」
「それなら、もし、この男が犯人でなければ、小坂井さんと、佐々木さんが、逮捕しようとした石崎が、真犯人ということになるんじゃありませんか？　あ

あいう事件は、犯人が、一種の病気で、急に、やめられるものじゃないと、聞いていますから」

と、十津川は、いった。

「まあ、そうだろうね」

「それなら、この二人のどちらかが、犯人だと、思いますよ。そして、小坂井さんは、アル中の青年が、犯人の筈はないと、確信しておられるんでしょう？それなら、小坂井さんは、正しい犯人を、指摘しておられたわけではありませんか？」

と、十津川は、きいた。

「そうならいいと、ずっと、思い続けて来たんだがねえ――」

小坂井は、語尾を濁した。

どうやら、小坂井は、あの時の自分の推理に、確信が、持てなくなっているように見えた。

しかし、小坂井は、最後まで、確信が持てなくなった理由や、それなら、真犯人を、誰だと考えているのかについては黙っていた。

その後、十津川は、小坂井に、あの事件について、聞くチャンスがなかった。

小坂井は、若い十津川が、気に入ったのか、時々、一緒に飲みに連れて行ってくれたが、そんな時でも、あの話は、しなかった。十津川の方でも、強いて、聞くこともしなかった。

さらに、何年かして、十津川は、警部補になり、警部に昇進した。

あの事件の時、今の十津川のように、若手の警部だった小坂井の方は、すでに、警察を辞め、酒好きが、たたって、病床に伏せるようになっていた。

病院に入院している小坂井から、会いたいという伝言を貰ったのは、事件から十九年目、つまり、去年の夏、八月の末だった。

残暑の厳しい日で、十津川は、夜に入ってから、病院に出かけたのだが、それでも、三十度を越す暑さだった。

台風が近づいていたが、雨は降りそうで降らない。

それで、余計、むし暑かったのかも知れない。
病室に入ってみると、小坂井は、意外に元気そうに見えた。
「今日、佐々木君が、見舞いに来てくれてね」
と、小坂井は、いった。
「佐々木さんというと、元、捜査一課におられた方ですね」
「そうだよ。例のあの事件の直後に、責任をとる形で、辞めた男だ」
「今は、何をしておられるんですか？」
「平凡なサラリーマンをしていたが、停年を過ぎて、嘱託になったと、いっていたね」
「そうですか」
「佐々木君と、十九年前のあの事件の話になってね。いろいろと、話し合ったよ。彼も、あの時、すっぱり、警察を辞めたが、時々、あの事件を、思い出していると、いっていたよ」
「それだけ、佐々木さんにとっても、大きな事件だったということでしょうね」
「その通りだよ。私と、佐々木君にとって、あの事件は、まだ、過去のものになっていないんだ」
「佐々木さんとは、どんなことを、話し合われたんですか？」
十津川は、興味を持って、きいた。もし、それが、繰り言だったら、わざわざ、十津川を呼んだりはしないだろう。
「彼と議論したよ」
といって、小坂井は、笑った。
「事件についてですか？」
「佐々木君は、今でも、石崎が真犯人に違いないと、信じているといった。だが、私はね、それは、違うよと、いったんだ。それで、議論になった。だが、最後には、私の意見に、耳を傾けてくれたよ」
「石崎という男は、本当に、真犯人じゃないんですか？」
「断定は出来ないが、私は、少しずつ、石崎犯人説

に、自信を失い、真犯人は、別にいるのではないかと思い始めた。この十何年かの間にね。それを、佐々木君に、話したんだよ」

と、小坂井は、ベッドに、起き上った姿勢で、いう。

「もちろん、アル中の青年が、犯人でもないわけですね？」

と、十津川は、念を押した。

「そうさ。あれは、犯人なんかじゃない」

「じゃあ、犯人は、誰なんですか？」

「それは、わからないが、私が、石崎を追いかけていた時、一人の若い女が、訪ねて来た。その女が、石崎は、犯人じゃないと、私に、いった。人を殺せるような人間じゃない。私の父も、石崎さんに、助けられたとね」

「その女の言葉を、信じたんですか？」

「もちろん、その時には、信じるものか。前に、警察のOBなんかを使って、圧力をかけて来ていたから、今度は、泣き落しかと、かえって、反撥したくらいだ。ところが、問題の石崎が、自殺してしまった。そのあと、妙に、彼女の言葉が気になり始めたんだ。しかし、どこの誰なのか、わからなかった。名前は、聞いていたんだが、どうせ、嘘っぱちの話だと思ったから、まともに聞いていなくて、忘れてしまっていたんでね。そうしていると、彼女から、手紙が届いた。これが、その手紙だよ」

小坂井は、枕の下から、古びた封筒を抜き出して、十津川に、見せた。

十津川は、変色した便箋を取り出して、眼を通した。

「書いてあることは、石崎は、犯人じゃなかったということですね。しかし、『北海道にて』とあるだけで、名前は、書いてありませんね」

「そうなんだ。彼女が、帰京すれば、電話をしてくるんじゃないかと、思っていたんだが、いつまで、待ってもなかった。それに、小樽の運河に、若いO

Lが、水死体で、浮んでいたというニュースがあった。新聞にのった顔写真を見ると、私を訪ねて来た女に、よく似ていたんだよ。しかし、同一人だという確証はなかった。それに、事件は、もう終ってしまったことになっていたので、私は、くわしく調べることが出来なかった」

「小坂井さんは、その若いOLが、ひょっとして、殺されたんじゃないかと、考えられているわけですか？」

十津川が、ずばりと、きくと、小坂井は、顔を紅潮させて、

「その可能性があると、考えたんだよ。彼女が、私に会い、また、北海道から、その手紙をくれた女で、何か知っているために、消されたのではあるまいかとね」

と、いった。

「もし、それが、正しければ、石崎犯人説は、怪しくなりますね」

「佐々木君も、私の話を聞いたあと、同じことを、いったよ」

「小坂井さんは、ずっと、その疑問を、持ち続けて来られたんですか？」

と、十津川は、きいた。

「いや、だんだんに、私の胸の中で、その疑問が、大きくなっていったんだよ。私は、石崎を、犯人と確信して、追い詰めていった男だよ。それに反するような考えを、すぐ、受け入れるものか。だから、徐々にだよ、変っていったのは」

「もう一度、あの事件を、調べ直す気は、なかったんですか？」

「あったよ。非番の時に、何度か、調べ直そうとした。ところが、その度に、刑事部長に呼びつけられて、バカなことをするなと、叱責された。まるで、監視されているみたいに、すぐ、呼びつけられたね。脅迫電話も、かかったよ」

と、小坂井は、いった。

「どんな脅迫電話ですか？」
「無言の電話もあったし、すでに解決している事件を、むし返すなと、男の声で、いわれたこともある」
「なぜ、そんな脅迫電話が、かかったんですかね？」
と、十津川は、きいた。
「わからんね。日本の警察のことを思う人の忠告かも知れないし、あの事件を、掘り起こされると困る人間がいるのかも知れない。どちらか、私にも、わからなかった。今も、わからん」
小坂井は、首を小さく振った。
「今、事件の関係者は、どうしているんですか？」
「どうしているのかな。石崎の後楯になっていた堀江代議士は、あのあと、もう一度、大臣になったが、五年前に、亡くなっている。息子さんが、その地盤を引きついで、三年前の選挙で、当選した筈だよ」
「警察のOBの方が、圧力をかけて来たと、聞きましたが――」
「あの人は、まだ、健在で、今や、政界の長老だよ。確か、七十何歳だと、思うんだが」
「その人なら、名前は、知っています」
と、十津川は、微笑した。
松田確一郎である。警察のOBというより、旧内務官僚といった方が、いいだろう。法務大臣にもなったことがあり、大声で、威圧するような喋り方をする男だった。
「堀江さんの顧問弁護士は、どうなりました？」
「あの人も亡くなったよ。今は、同じ法律事務所にいた、竹内弁護士が、堀江家の顧問弁護士になっていると、聞いたよ」
「名前は、聞いたことがあります。なかなか優秀な弁護士という噂です」
「何よりも、困るのは、もう二十年近くたってしまっていることなんだ」
と、小坂井は、いった。
彼は、急に、疲れた表情になった。
「真犯人が、生きているとしても、すでに、時効が、

成立していますね」
と、十津川は、いった。
「そうなんだが――」
「大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ。それに、君に話したので、少し、気が楽になったよ。今日まで、ずっと、事件のことが、棘みたいに、ささっていてね」
小坂井は、肩を落とすようにして、いった。
「石崎が、シロで、無実の男を、自殺にまで追いやってしまったという自責の念のためですか？」
と、十津川は、きいた。
「それもあるが、私の自慢は、手がけた事件は、全て、解決してきたということなんだ。ところが、たった一つ、この事件だけは、解決していない。それどころか、今、君がいったように、無実の人間を、自殺に追いやってしまったのかも知れない。それが、何とも、残念でね」
「これから、どうされるつもりですか？」
「この病気が治ったら、ひとりで、もう一度、事件を、掘り起こしてみようと、思っているんだがね」
と、小坂井は、いった。
「大丈夫ですよ。すぐ、治りますよ」
と、十津川は、励まして、別れたのだが、小坂井が、急死したのは、二日後だった。
直接の死因は、肺炎だったが、医者の話では、小坂井の身体は、すでに、ボロボロになっていて、抵抗力を、失ってしまっていたのである。
葬儀には、三上刑事部長をはじめとして、警視庁の何人かが、参列したが、そのほとんどが、焼香をすませると、そそくさと、帰って行った。
そのことが、警視庁の中での小坂井の立場を、よく現わしているようだった。
十津川が、残っていたのは、佐々木が、来るのではないかと、思ったからである。
佐々木は、おくれて、ひとりで、やって来た。
その佐々木を、十津川は、つかまえて、病院で、

小坂井の話を聞いたことを、いった。
「佐々木さんの話も、出ましたよ」
「そうですか――」
「病気が治ったら、あの事件を、もう一度、調べ直したいとも、おっしゃっていましたがね」
「私にも、同じことを、いわれていたんですがねえ」
と、佐々木は、眼をうるませた。
「佐々木さんは、どうなさるんですか？」
「私ですか？」
と、佐々木は、きき返してから、
「さあ、どうしたら、いいですかねえ。私一人では、何も出来ない気もすると――」
「しかし、警察を辞められてからも、あの事件のことは、気になっていたんじゃありませんか？」
と、十津川は、きいてみた。
佐々木は、少し考えてから、
「気にならなかったといえば、嘘になりますがねえ。私が、警察を辞めた時、家内に、今後は、家族のことだけを考えて、働くと、約束しました。娘も、幼なかったですからね。あの事件のことは、極力、忘れようと、努めて来ました」
「小坂井さんを病床に見舞われて、何か、話されたんでしょう？」
「ええ。いろいろとね」
「もちろん、あの事件のこともでしょうね？」
「ええ」
「今もいったように、小坂井さんは、あの事件のことを、話してくれましてね。私が意外だったのは、石崎という自殺した男を、真犯人とは、思っていないように、いわれたことなんですよ」
と、十津川は、いってから、相手の反応を見るように、佐々木の顔を、のぞき込んだ。
しかし、佐々木は、十津川の言葉には、のって来なかった。
「いろいろと、話をしました。当然、警察時代の思い出が多くなりましたから、あの事件のことも、話

題になりましたよ。今、あなたがいわれたようなことも、聞きました。しかし、何分にも、もう、二十年近く昔のことですからね。私自身も、普通の生活に入って、約二十年です。もう、忘れたといってもいいことです」

「小坂井さんの遺志をついで、あの事件を、もう一度、調べ直してみる気はありませんか？」

と、十津川は、きいた。

佐々木は、あっさりと、首を横に振って、

「その気はありませんね。確かに、小坂井さんは、私の上司でしたし、二人で、コンビを組んで、仕事をよくしました。しかし、何といっても、すでに、二十年近い空白があるんです。今更、何かしようと思っても、昔みたいに、頭も、身体も、動きませんよ」

と、いって、笑った。

そのまま、佐々木と別れたのだが、十津川は、彼の態度に、疑問を持った。

十津川が、捜査一課に入った時、すでに、佐々木は、辞めてしまっていたが、彼の人となりについては、聞いたことがあった。

それによると、佐々木は、生真面目な性格で、中途半端なことは、嫌いだということだった。

あの事件は、佐々木にとって、中途半端な解決だった筈である。性格的に考えれば、あの事件を、何年かかっても、解決したいと、思うのではないか。

それなのに、なぜ、そっけない態度を示したのだろうか？

（本音だったのだろうか？）

しかし、その後一年、佐々木は、何の動きも見せないようだった。

十津川自身も、現在の事件に追われて、あの事件のことも、佐々木のことも、忘れがちになっていた。

事件と、事件の合い間に、小坂井や、佐々木のことを考えることはあったが、小坂井が、すでに亡くなってしまい、佐々木が、あの様子では、事件は、

やはり、過去のものとして、忘れ去られてしまうのだろうと、思った。

十津川は、亀井と、あの事件について、話し合ったことがある。

亀井は、佐々木に、興味を持っていた。

小坂井と佐々木の関係に、自分と、十津川の関係を当てはめて考えていたのかも知れない。

「佐々木さんが、あの事件のことを、諦めているとは、思えませんね」

と、亀井は、いった。

「しかし、もう、自分とは、無関係みたいな口振りだったがねえ」

十津川は、佐々木との会話を思い出しながら、亀井に、いった。

「二十年近い空白のせいですか」

「ああ、そうだ。もう忘れたし、調べ直す気力もなくなっていると、いっていたよ」

「それは、刑事の性格に反しますよ」

と、亀井は、いった。

「反するかね？」

「彼は、典型的な刑事だったと思うんです。昔気質の刑事です。自信家で、一直線に進む男です。だからこそ、二十年前に、あっさり辞めてしまったんだと思いますね。警察の方針に、我慢ならなかったんでしょう。そんな人間は、一つの信念を、ずっと、持ち続けているものです。二十年たったって、同じですよ」

「しかし、約二十年間、彼は、何もしなかったんだ。ひたすら、平凡に、普通のサラリーマン生活を、してきたんだよ」

「知っています。しかし、何か、きっかけがあれば、彼は、また、二十年前の事件でも、調べ直しますね。それは、確実だと、私は、思っています」

と、亀井は、いった。

「そうかな」

十津川は、まだ、亀井の言葉を、信じかねていた。

亀井の方が、十津川より、年長だし、苦労しているだけに、人間を見る眼は、確かだろう。それでも、佐々木が、また、あの事件を、調べ始めるかどうか、十津川には、わからなかった。

それから三日後、十津川は、突然、三上刑事部長に、呼ばれた。

口やかましい三上に呼ばれた時は、碌なことはないので、十津川は、覚悟して、部長室へ行った。

三上は、やはり、不機嫌だった。

「妙なことに、首を突っ込むのは、止めたまえ」

と、三上は、いきなり、いった。

とっさに、何のことかわからなくて、十津川は、

「妙なことといいますと？」

「十九年も前の事件のことだよ。すでに、解決した事件のことを、君は、まさか、再調査しようと考えているんじゃあるまいね？」

三上は、詰問する口調で、いった。

「とんでもありません」

「しかし、以前捜査一課にいた小坂井君を、病院に訪ねたり、佐々木君に会って、話をしたりしていると、聞いたがね。あの二人と、十九年前の事件のことを、話し合ったんじゃないのかね？」

「連続女性殺人事件のことを、おっしゃっているんでしょう？　それなら、話は、聞きました」

「それで、君は、何をするつもりなのかね？」

「ただ、話を聞いただけです」

「彼等の考えに、賛成したのかね？」

「興味はありましたが、別に、賛成はしていません。第一、あの事件は、私が、警察に入る前に起きた事件です。詳しい事情を知らない私に、あれこれ、判断が出来る筈がありません」

と、十津川は、いった。

三上は、それで、いくらか、表情を柔らげたが、なおも、釘を刺すように、

「君は、少くとも、警察の人間だ。それを忘れては困る。もし、佐々木君が、あの事件を、掘り起こす

ようなバカな真似をしたら、それを、止めてくれなければ、いかんのだよ。そういう立場にいることを、自覚して欲しいのだ。わかるかね？」

「彼も、もう一度、調べる気はないように思いますが」

と、十津川は、いった。

「本当に、そう思っているのかね？」

「違うんですか？」

「それなら、私が、心配することはないが、いろいろと、調べてみると、佐々木という男は、思い込むと、一途になる性格らしい。小坂井君が亡くなって、その遺志を継ごうなどというバカな考えを持つかも知れない。もし、彼が、あの事件を、再調査し始めたりしたら、マスコミが、どう考えると思うね？」

「わかりませんが――」

と、十津川は、わざと、とぼけて、いった。

三上は、また、難しい顔になって、

「マスコミは、いつも、事あれかしと、待ち構えているものだ。それに、佐々木君にだって、元警視庁捜査一課刑事の肩書きが、ついて廻る。その人間が、昔の事件を、調べ直しているとなれば、あの事件には、何かあったのではないかと、痛くもない腹をさぐられることになるんだよ。警察の威信に、傷がつくんだよ。わかるかね」

と、三上は、いった。

十津川が、部屋に戻ると、亀井が、心配そうに、近寄ってきて、
「何かあったんですか？」
と、きいた。
十津川は、刑事部長の話を、亀井に、伝えた。
「部長は、そんなことを、心配しているんですか？」
亀井は、呆れたような表情をした。
「しかし、カメさん。部長の心配も、もっともなところがあると思うんだよ」
「佐々木さんが、また、あの事件を、掘り返すと、本気で、思っているんですかね？」
「思っている」
「しかし、佐々木さんに、その気はないと、私は、思いますがね」
と、亀井が、いう。
「私も、同じように考えていたんだが、違うかも知れない」
「と、いいますと、佐々木さんは、やる気なんですか？」
「部長の話で、知ったんだが、佐々木さんの奥さんが、亡くなったらしい」
「そうですか。しかし、それが、例の事件と、どんな関係があるんですか？」
亀井が、わからないという顔で、十津川を見た。
「佐々木さんは、警察を辞めてから、奥さんや、子供に心配をかけまいと思い、ひたすら、新しい仕事に、打ち込んで、今日まで、やって来たんだ。もちろん、あの事件のことも、忘れてだ。奥さんが亡くなって、その一つのカセが外れたようなものだし、それに、幼なかった娘さんも、もう、二十歳を過ぎている。だから、部長は、佐々木さんが、あの事件

を、また、掘り返すんじゃないかと、心配しているんだよ」

「なるほど」

と、亀井は、肯いたが、

「それにしても、部長は、佐々木さんのことを、いろいろと、調べていたわけですね？　佐々木さんの奥さんが、亡くなったことまで、知っているというのは――」

と、感心したように、いった。

「それだけ、部長が、心配しているということなんだろうね。それも、無理はないと思うんだな。あの事件では、石崎という男を、自殺に追い込んで、当時、マスコミの集中攻撃を受けている。それを、むし返されては、堪らないということだろう。また、マスコミに、あれこれ、書かれるのは、目に見えているからね」

「しかし、佐々木さんは、今は、一人の民間人です。彼が、何をしようと、それを、止めることは、出来ないんじゃありませんか？」

と、亀井が、きいた。

「だから、部長は、もし、佐々木さんが、調べるようなことを始めたら、君からも、やめるように忠告してくれと、いったよ」

と、十津川は、三上の表情を思い出しながら、亀井に、いった。

「部長の心配も、わからないことは、ありませんが――」

亀井は、そういったが、まだ、完全には、納得できない顔で、

「佐々木さん一人で、何が出来ますかねえ。それに、もう二十年近くも、時間が、経過してしまっているんです。この空白は、大きいですよ。佐々木さんは、死んだ小坂井さんと同じで、石崎という男や、中西勇が、犯人とは思っていないとしても、真犯人を見つけ出せるとは、思えないんです。その点、部長が、心配することはないんじゃありませんか？」

「その点なんだがねえ――」
と、十津川は、語尾を濁して、少しの間、考えていたが、
「部長は、はっきりいわなかったが、佐々木さんのことを、心配している感じだったね」
「それは、どういうことなんでしょうか？」
と、亀井が、きく。
「これは、あくまでも、私の推測でしかないんだがね。あの事件の関係者で、まだ生きている人たちもいるし、警察の威信を何よりも大切に考え、それを、毀そうとする人間を、激しく憎む人もいる。そういう人たちの反撥を、部長が、心配しているんじゃないかと、思ったんだよ」
「つまり、佐々木さんが、危険にさらされるかも知れないということですか？」
「部長は、暗に、そういっていたような気がしたんだ。もちろん、部長の第一の心配は、警察の威信ということだろうと思うがね」
と、十津川は、いった。
「それで、警部は、どうなさるおつもりですか？」
亀井が、真剣な表情で、きいた。
「私はね、正直にいって、あの事件を、自分なりに、調べてみて、疑問を持った。だから、佐々木さんが、もう一度、調べ直すのなら、それを、見守っていきたいと、思っていたんだがね。部長の危惧も、見逃がせないんだ。だから、佐々木さんのために、何もしないように、忠告したい気持にも、なっているんだよ」
「警部も、佐々木さんが、危険だと、思われるんですか？」
と、亀井が、きいた。半信半疑の表情だった。
「そんな気がするね」
と、十津川は、正直に、いった。
死んだ小坂井は、石崎は、犯人ではなかったのかも知れないと、いった。
小坂井の考えが、果して、正しいかどうか、十津

川には、わからない。

十津川が、あの事件を調べたといっても、十九年前、捜査一課が、どんな捜査をしたか、その記録を、読んだだけである。ただ、勘で、疑問ありと、思っただけなのだ。

だから、正しい判断は出来ないのだが、佐々木が、あの事件をむし返せば、いろいろな方面に、波紋を投げかけるだろうことは、想像できた。

今年になって、十津川の危惧が、現実になった。

二十年間勤めた会社を辞めた佐々木が、あの事件を、また、調べ始めたのである。

二十年前には、五歳だった一人娘も、二十五歳になり、また、彼に、事件のことは忘れて下さいといった妻も、亡くなっている。

佐々木にしてみれば、何の心配もなく、あの事件を、調べられるという気になったのだろう。

佐々木が、動き出したという話を聞いて、十津川は、心配になり、彼の家に電話をかけたのは、今年の七月九日の夜である。

電話に出たのは、佐々木の娘の季見子だった。

佐々木は、旅行に出ているという。

十津川は、心配になって、帰宅したら、すぐ、連絡してくれるように頼んだのだが、その返事が、なかなか、来なかった。

十津川は、もう一度、電話してみた。

今度も、季見子が出て、佐々木は、まだ、帰って来ないといい、七月八日の夜に、佐々木が、置手紙をしていった、その手紙を、電話口で、読んでくれた。

〈用事があって、小樽へ行ってくる。十日の夜には、帰れる筈だ〉

小樽という地名で、十津川は、佐々木が、やはり、あの事件を、調べ始めたという確信を、持った。

生前、小坂井が、小樽の運河で、死んだOLのこ

とを、話してくれていたからである。
そのOLは、小坂井に向って、石崎は犯人ではないと、いったという。
佐々木は、明らかに、二十年前、小樽の運河で死んだOLのことを、調べに行ったに、違いないのである。
恐らく、そのOLの死にも、疑問を持っていたのだろう。
十津川の心配した通り、佐々木は、置手紙の十日になっても、帰って来なかった。
娘の季見子が、心配して、十津川に、電話して来た。
彼女は、帰って来ない父を探しに、北海道へ行くという。
十津川は、当惑した。
佐々木は、二十年前のあの事件を調べ直して、危険にさらされていると、十津川は、思っている。
その佐々木を追いかければ、当然、娘の季見子にも、危険が、迫ってくる。
二十年前のあの事件を、掘り返されたくない人間がいて、佐々木を、どうかしたのだとすれば、娘の季見子も、危いのだ。
十津川は、わざと、お父さんが帰るのを、待ちなさいと、そっけなく、いった。
だが、気の強い季見子が大人しく引きさがるとは思えなかった。
それで、彼女に、護衛をつけた。
若い日下刑事を、彼女の家の近くに、張り込ませたのだ。
十津川の不安は、適中して、季見子が、襲われた。
彼女の家の中を、家探ししていた男にである。
日下刑事が、飛び込んで、季見子を助けたが、危いところだった。
「犯人は、ただの物盗りとは、思えませんね」
と、その時、亀井が、十津川に、いった。
「カメさんも、そう思うか？」

「佐々木さんが、あの事件を調べ始めたので、どこまで、調べたのか、それを知ろうと、忍び込んだんじゃないかと、思いますね」

と、亀井は、いった。

十津川も、同感だった。が、この事件は、単なる物盗りの事件として、処理された。

それが、上の方の考えだったし、十津川も賛成した。

これ以上、佐々木季見子を、危険にさらしたくなかったからである。

だが、季見子が、それで、納得するとは、思えなかった。

だから、彼女は、行方不明になった父を探しに、北海道へ出かけて行った。

「困ったよ」

と、その時、十津川は、眉をひそめて、亀井にいった。

「ますます、彼女が、危くなりますね」

「と、いって、北海道に行くのを、やめさせるわけにはいかない。父親を探したいというのは、娘としたら、当然の願いだからね」

「どうしますか？」

「やはり、誰かを、北海道に行かせて、かげから、見守るより仕方がないだろうね」

と、十津川は、いい、日下を、行かせることにした。

北海道でも、十津川の危惧は、適中した。季見子は、襲われなかったものの、彼女が、父親のことを聞こうとした行商の女性は、自殺に見せかけて、殺されてしまったからである。

更に、東京に戻っていた佐々木が、井ノ頭公園で、殺されてしまった。

佐々木は、十津川の自宅の電話番号を書いたメモを持っていた。何かを、十津川に知らせようとして、殺されたのである。

明らかに、あの事件のことで、佐々木は、何かを

見つけて、それを、十津川に、知らせようと思ったのだ。

捜査本部が、出来た。

しかし、捜査を始めてすぐ、犯人と名乗る男が、自首してきて、この事件は、あっさり、解決してしまった。

北原という、どう見ても、チンピラにしか思えない男が、金が欲しくて、通りかかった佐々木を襲い、殴り殺したのだという。

（信じられない）

と、十津川は思ったのだが――

北原が、どんな男なのか、あまり詳しくは、調査されなかった。

通り魔的な犯罪だし、被害者の佐々木と、何の関係もない男だから、犯人について調べることは、意味がない。捜査本部は、そう判断したのである。

普通の場合なら、それでいい。犯人は、自供しているし、凶器も見つかったからだ。

しかし、十津川は、首をかしげていた。二十年前の事件のことがあったからである。

佐々木は、あの事件を、再び、調べ始めていた。

そして、佐々木は、殺される直前、十津川に、電話しようとしていたのだ。

捜査本部が、解散してしまったあと、十津川は、佐々木が殺されていた井ノ頭公園に、足を向けた。

どんよりとした曇り空で、今にも、雨になりそうな気配のせいか、まだ、午後四時を過ぎたばかりだが、人の気配は、ほとんどなかった。

急に、「警部」と、呼ばれて、振り向くと、亀井が、手を上げて、近づいてくるところだった。

「きっと、ここに来ておられると思っていましたよ」

と、亀井は、十津川と、並んで、歩きながら、笑顔を見せた。

「別に、ここで、何かを調べようという気はないんだ」

と、十津川は、いった。

「わかっています。犯人は、北原に間違いありませんからね」
「そうなんだ。彼が、佐々木さんを殺したことは、間違いないさ。問題は、誰が、やらせたかだよ」
「そうですね。北原は、傷害の前科がありますが、物盗りで、相手を殺したことはありません。誰かに指示されて、佐々木さんをやったことは、間違いないと、私も、思います」
「しかし、あの顔を見ていると、そのことは、話さないだろうね。よほどのことが、ない限りね」
「それに、もう、地検に身柄が行ってしまっています」
「わかってる。二十年前のあの事件が、動機になっていると思うんだが、カメさんも、同じかね？」
「もちろんです。彼が、物盗りで殺された筈がありませんから、考えられる理由は、ただ一つです。二十年前の事件を、彼が、掘り返していたからですよ」
「犯人が、それを好まず、チンピラを使って、佐々木さんの口を封じたか？」
「ええ、そう思います」
「佐々木さんは、何かを見つけたのかな？」
これは、自問の形だった。
亀井は、黙っているし、十津川も、黙って、しばらくの間、二人は、並んで、公園の中を歩いていた。
小雨が降り出した。
二人は、近くの喫茶店に入って、コーヒーを注文した。
「やはり、あの事件の犯人は、自殺した石崎じゃなかったんだよ」
と、十津川は、コーヒーを、ゆっくりかき廻しながら亀井に、いった。
「佐々木さんが、殺されたからですか？」
と、亀井が、きいた。
「そうだ。二十年前の事件で、警察は、変質者を、犯人として逮捕した。この男も、病院で亡くなった。小坂井さんと、佐々木さんは、石崎を追い、追われ

た石崎は、自殺した。もし、この二人のどちらかが、犯人だったとしたら、二十年後の今、佐々木さんが、いくら、動き廻っても、誰も、不安にはならない筈だよ。真犯人が、別にいたからこそ、佐々木さんが、邪魔になって来たんだ」

「もう一つ、考えられることがあります」

と、亀井が、いった。

「何だい？」

「石崎が、犯人だったとしても、もし、あれが、自殺でなければと、思うんです」

「石崎が、殺されたということかね？」

「そうです。彼が、女性を何人も殺した犯人として、逮捕されるのは、まずいと考えた人間が、彼を、自殺に見せかけて、殺してしまったということも、考えられますよ。二十年後の今、それを知られたくないので、佐々木さんを、殺したんじゃないでしょうか？」

と、亀井が、いう。

「石崎が、犯人で、逮捕されると、傷がつく人物というと、堀江代議士だが」

「そうです。堀江代議士です。石崎は、堀江代議士の可愛がっていた男です。大臣までやった人です。もし、石崎が逮捕されたら、いやでも、堀江代議士の名前が出ます。それも、猟奇的な事件の犯人として、石崎が逮捕されるわけですからね。堀江代議士が、石崎を殺したとは思えませんが、取り巻きの人間が、自殺に見せかけて、殺したんじゃないでしょうか？」

「警察に、犯人扱いされたので、死んで、抗議した形にしてか？」

「そうです。しかし、二十年後の今、佐々木さんが、あの事件を掘り返して、その仕掛けが明るみに出るのが怖くて、口を封じたことも考えられると思います」

と、亀井が、いった。

「しかし、堀江さんは、もう、亡くなっているよ」

「二十年前に、石崎を、自殺に見せかけて殺した人間は、まだ、生きているんじゃないかと、思います」
「その頃、堀江さんの取り巻きだった人間の一人か？」
「そうです」
と、亀井が、いう。
「その推測も、なかなか、面白いがね――」
と、十津川は、考え込んだ。
「カメさんの意見と、私の考えが、どちらも正しいことも、あり得るよ」
と、十津川は、いった。
亀井は、眼を大きくして、
「二つを兼ねるといいますと？」
「石崎は、犯人じゃなくて、別にいた。それは私の意見だ。カメさんは、堀江代議士の取り巻きが、堀江代議士に、災いがかかるのを心配して、石崎を、自殺に見せかけて、殺したのだと、いった。この二つを、つないでみたらどうかと、思ったんだよ。犯人は、別にいた。しかし、その真犯人が捕まると、堀江代議士に迷惑がかかる。その途中で、食い止めなければならない。そう考えた人間が、石崎に自殺させ、それを、警察に対する抗議の死ということで、圧力をかけて来たのではないかと、考えてみたんだがね」
「同時に、石崎の口も封じたということでしょうか？」
「多分、それもあったろうね。つまり、真犯人がいたとすると、その人間を、石崎が、知っていたことになる」
「石崎の身近かにいた人間ですか？」
「そして、堀江代議士の知り合いなんだと思うね。だから、その人間が、犯人として、逮捕されては、堀江代議士の名声に、傷がつくと、判断したんじゃないかね」
「佐々木さんは、真犯人が、わかったんでしょうか？」

「いや、もし、わかっていたら、何か、残している筈だし、小樽へ行ったくらいでは、わからなかったと思うね。ただ、ヒントになるようなものは、見つけたんじゃないか。だから、私に、電話して、相談しようと思ったのじゃないかと、考えているんだがね」

と、十津川は、いってから、急に、疑わしい顔になって、

「その佐々木さんが、殺されたことを考えると、二十年前の空気は、まだ、残っているとみなければいけないな」

「石崎を自殺させて、事件を、強引に、葬ってしまった空気ということですか？」

「そうだ。小坂井さんや、佐々木さんに、調べられては困る空気が、二十年前にあった。それが、まだ、あるんじゃないかと、思うんだよ。とすると、それは、危険なことでね。佐々木さんが消されたように、あの事件をもう一度、調べようとする人間に、危険が及ぶことが、考えられるんだ」

「佐々木さんの娘さんのことですか？」

と、亀井が、きいた。

「今のところは、彼女が、一番、危いね。気の強そうな娘さんだから、一人でも、父親の事件を、調べようとするだろう。そして、嫌でも、二十年前の事件に、ぶつかる。その時が危いな」

十津川は、本当に、心配そうに、いった。

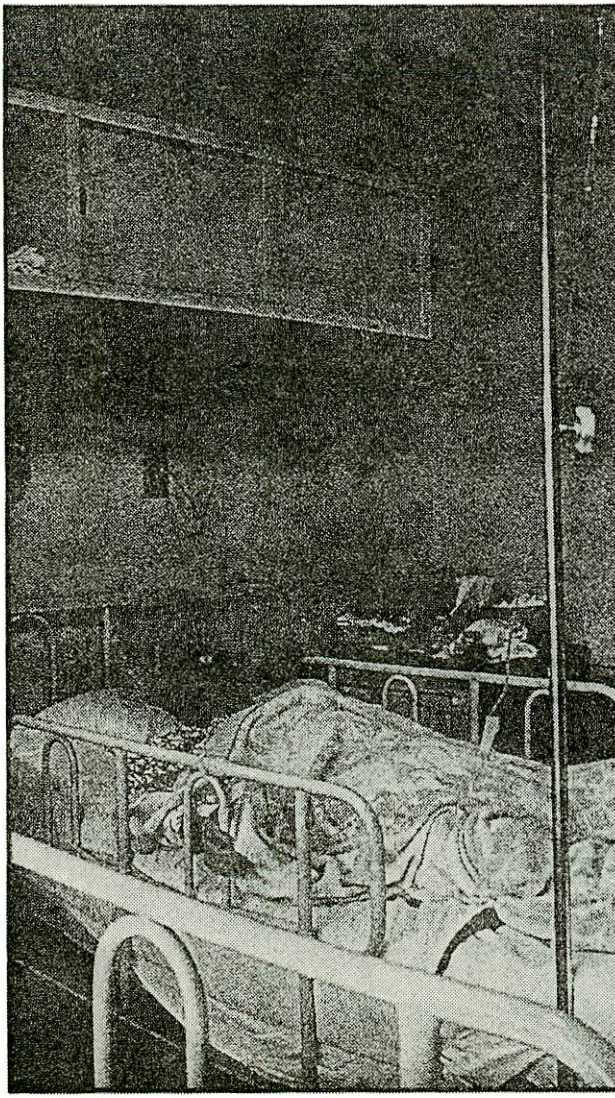
「どうしますか？」

と、亀井が、きいた。

「彼女には、調べるのは、やめるように、いったんだがねえ」

「彼女は、承知しませんか？」

「佐々木さんが、無事だったら、無事で、あの事件を掘り返すのをやめていたら、われわれも、安心して、いられたんだが、逆になってしまった。佐々木さんは、殺され、彼女は、意地でも、父親の死の真相を知ろうとするだろうね」



「北原が、殺したということで、彼女は、納得しませんか？」
と、亀井が、きいた。
「一時的に納得はするかも知れないが、どうしても、疑問を持つようになるさ。それは、眼に見えてるよ」
十津川は、肩をすくめるようにして、いった。
亀井は、煙草に火をつけ、公園の池に、眼をやった。
「何とかして、彼女を、助けてやりたいですね」
と、亀井が、いった。
「そりゃあ、助けてやりたいがね。彼女を助けるとなると、自然に、われわれも、二十年前のあの事件に、ぶつかることになるよ」
と、十津川は、いった。
「許されませんかね？」
亀井が、きく。
「上の方は、絶対に許さないさ。佐々木さんを殺したのは、北原だ。それで、解決している。もちろん、二十年前のあの事件もだよ。部長だって、解決済みの事件を、掘り返すのは、喜ばんさ」
と、十津川は、重い口調で、いった。
「しかし、佐々木さんの娘さんを、放ってもおけませんよ」
亀井は、強い調子で、いった。
十津川は、そんな亀井を、見つめた。苦労人で、思慮分別のある男だが、同時に、激しい性格も、持ち合せている。
それを、十津川は、「カメさんの方が、私より若いね」と、いうのだが、純粋ということでもあるのだろう。
「私も、彼女を、守ってやりたいと、思っている」
と、十津川は、いった。しかし、続けて、
「しかし、われわれに、何が出来るだろうか？　私も君も、警察という組織の一員だし、上の指示には、従わなければならない。他の事件が起きれば、その解決に、走り廻ることになって、彼女のことを、見

守っているわけには、いかなくなるからね」
「それは、よく、わかっていますが――」
「カメさんに、お願いがあるんだよ」
十津川が、いうと、亀井は、「わかっています」と、いった。
「私に、勝手に動くなといわれるんでしょう？」
「ああ、そうだ。カメさんは、私より年上だが、私より、純粋だからね。心配なんだよ」
「大丈夫です」
と、亀井は、笑った。
静かな日が、何日か続いた。
佐々木元刑事が、井ノ頭で殺された事件は、表面上は、忘れられていくようにみえた。
新聞や、テレビは、もう、この事件を、取りあげなくなったし、犯人が、北原というチンピラだったことも、忘れられようとしていた。
しかし、いつまでも、忘れない人間もいたし、いた筈だった。
十津川も、もちろん、その一人だった。
事件に追われながらも、頭の隅に、佐々木の死や、彼の娘のことが、いつも、ちらついていた。
殊に、佐々木季見子のことが、気になって仕方がなかった。
彼女が、事件の結末に、満足している筈がないと、思うからである。
彼女は、父親が、二十年前の事件を、急に、調べ始めたのを知っていた。その父親が、物盗りのチンピラに殺されて、それで、終りだということを、素直に、受け取ってはいないだろう。
（下手に動き廻らないでくれればいいが）
と、十津川は、思っていた。
前には、若い日下刑事を、彼女の護衛に差し向けたのだが、他の事件が起きれば、そんなことも出来なくなってしまう。
その日下が、十津川に、
「彼女を、新宿で見かけました」

と、いったのは、新宿歌舞伎町で起きた殺人事件を、追っている時だった。
「彼女って、佐々木季見子をか？」
「そうです。今日の午後十時頃です」
と、日下は、いった。
「ひとりだったのかね？」
「そうです」
「映画でも、見に来ていたのなら、どうということは、ないがねえ」
と、十津川が、いうと、日下は、急に、真剣な眼つきになって、
「それが、気になったもので、しばらく、尾行してみました」
「それで？」
「彼女は、N組の人間を、探しているようなんです」
「N組って、あの辺を縄張りにしているヤクザなのかい？」
「そうです」
「例の北原が、N組に、いたんだな？」
「N組の方では、北原が犯人として逮捕されたあと、すでに一年前に、破門していたといっていますが、本当かどうか、わかりません」
「やはり、彼女は、物盗りの犯行とは、信じてなかったんだな」
「北原が、誰かに頼まれて、父親を殺したと考えているんでしょう。それを証明したくて、N組の連中に、近づこうとしているんだと思いますね」
「危いな」
「危いですよ」
と、日下は、いった。
佐々木が殺された事件に、N組が、関係しているかどうかは、わからない。
だが、素人の佐々木季見子が、N組の人間を見つけて、北原のことを、あれこれ聞こうとするのは、危険この上なかった。
と、いって、現在、別の殺人事件を追っているの

に、十津川が、N組に、乗り込んで行くわけには、いかなかった。
「N組の事務所は、どこだったかな？」
と、十津川は、日下に、きいた。
「歌舞伎町のKビルの二階です」
「彼女は、そこには、行かなかったんだろう？」
「行っていません。さすがに、彼女も、N組の事務所に入る勇気はなかったようですが、これから先は、わかりません」
「困ったな」
と、十津川は、呟いてから、
「今、調べている事件だがね」
「はい」
「N組が関係している様子はないかね？」
「ありません。それは、警部も、よく、ご存知だと思います。容疑者は、殺されたレストランの主人の周辺の人間です」
「日下君」
「はい」
「ひょっとするとということもあるじゃないか。念を入れろということもある。今から、君は、一人で、N組の様子を、探ってくれないかね。N組の人間を訊問しなくていい。ただ、N組に出入りする人間を、チェックしてくれるだけでいい、頼むよ」
と、十津川は、いった。
日下が、ニッコリして捜査本部の新宿署を出て行ったあと、十津川は、難しい顔で、窓の外を、見やった。
「心配ですか？」
と、亀井が、声をかけてきた。
「一度、よみがえった過去というやつは、引き退らないものらしいね」
十津川は、窓の外の暗闇を見つめたまま、いった。
「関係した人間が、生きている限り、無理でしょうね」
と、亀井が、いう。

「佐々木季見子が、もう少し、臆病であってくれたらいいんだが、真相を知りたくて、危険も、冒しかねない。困ったものだよ」
「彼女が、殺されでもしたら、われわれは、嫌でも、二十年前の事件に、引きずり込まれるかも知れません」
「カメさん。脅かさないでくれよ」
と、十津川は、いった。
「しかし、警部は、彼女が殺されたら、上の方が、何といおうと、やるでしょう？　二十年前の事件を、佐々木親娘に代って、掘り返すんじゃありませんか」
「まだ、彼女は、死んではいないし、死なせたくないんだ」
と、十津川は、いった。

襲撃

歌舞伎町で起きた事件が、犯人の逮捕で、解決した日の夜、捜査本部のある新宿署で、祝杯が、あげられた。
どの顔にも、一つの事件が解決したという満足感が、表われていたのだが、十津川は、その中に、日下刑事の顔がないことに、気がついた。
腕時計を見ると、すでに、夜の十二時に近い。
日下には、それとなく、佐々木季見子を守ってやれと、いってある。それで、N組のビルへ行っているのだと思ったが、時間が時間なので、気になった。
捜査本部長の音頭で、乾杯したあと、十津川は、小声で、亀井を、呼んだ。
「ちょっと、心配なんだ」

「日下刑事のことでしょう？」
「見て来てくれるかね？」
「行って来ましょう。N組のビルを、見張っている筈でしょう？」
「彼女が入ろうとしたら、止めるように、いってある」
と、十津川は、いった。
亀井が、一人で、飛び出して行ったあと、十津川も、今度の事件での捜査の反省点などを話したのだが、いつもと違って、気分がのらなかった。
日下のことが、気になるからである。
亀井からは、なかなか、連絡が、入らない。十津川は、西本刑事を呼ぶと、
「君も行ってくれ」
と、送り出した。
本部長が、変な顔をして、寄って来ると、
「どうしたんだね？」
「何でもありません」
と、十津川が、いった時、電話が、鳴り、受話器を取った清水刑事が、
「カメさんから、警部へです！」
と、大声で、いった。亀井の声に、ただならぬ気配を感じたからだろう。
十津川も、あわてて、受話器を受け取ると、
「どうだった？　カメさん」
「やられました！」
と、亀井が、電話の向うで悲痛な声を出した。
「何があったんだ？」
「日下が、刺されました。今、救急車で病院に運んだところです」
「どこの病院だ？」
「新宿二丁目のS病院です」
「すぐ行く」
と、十津川は、いい、電話を切ると、本部長に、断って、新宿署を、飛び出した。
通りかかったタクシーを拾い、S病院に、急いだ。

（日下に、あんなことを頼んだのは、いけなかったのかな？）

その思いが、病院に着くまで、重く、十津川の胸に、のしかかった。

病院の外に、亀井が、立っていた。

「どんな具合だ？」

「今、手術中です」

と、亀井が、いう。

十津川は、亀井と、病院関係者入口と書かれた小さな入口から、中に入った。

すでに、待合室の電気も消えて、中は、ひっそりと、静かである。

「彼は、助かるんだろうね？」

十津川は、青白い顔で、きいた。

「そう思います。私が、発見したときは、意識不明でしたが」

「どこで、見つかったんだ？」

「歌舞伎町の細い路地の奥です。背中を刺されて、倒れていたんです」

「N組の入っているビルの近くか？」

「そうです」

「刺したのは、N組の連中かな？」

「わかりませんが、可能性は、ありますね」

「やっぱり、あんなことは、やらせるんじゃなかったな」

と、いって、十津川は、唇を噛んだ。

「大丈夫、日下は、助かりますよ。それに、あの仕事を、彼は、楽しんでいたと思います。日下は、彼女に好意を持っているようですから」

と、亀井は、話を、明るい方に、持って行った。

一時間ほどで、手術がすみ、医者や、看護婦が、手術室から、出て来た。

「助かりますか？」

と、十津川は、医者に、きいた。

「今のところは、何ともいえませんね。何しろ、傷が、背中から、心臓近くにまで、達していますから」

五十二、三歳の医者は、そういった。
「助からないと、困るんですよ」
と、十津川が、いうと、医者は、微笑して、
「私だって、助かって貰いたいですよ」
「彼に、会えませんか？」
「駄目ですね。目下、意識不明の状態ですから」
と、医者は、いった。
十津川は、亀井と、暗い待合室に、並んで、腰を下した。
「日下君を見つけた時、近くに、佐々木季見子は、いなかったかね？」
と、十津川は、きいた。
「救急車を呼んで、彼を、ここに運ぶのがやっとで、気がつきませんでした」
「日下君が、そこにいたということは、近くに、彼女も、いたということかも知れないな」
「日下が刺されたとなると、彼女も、危いですか？」
亀井が、落ち着かない顔で、きいた。
「わからないが、君のあとから、西本君を、行かせたから、彼女を、見つけてくれるかも知れないんだが」
と、十津川は、いった。
（だが、見つけられなかったら――）
日下の昏睡状態が、続いている。
十津川は、隠しておくわけにはいかず、病院から、電話で、本多捜査一課長に、報告した。
本多も、声に、驚きのひびきを見せて、
「犯人の心当りは、あるのかね？」
「全くありません」
と、十津川は、わざと、いった。
ここで、佐々木季見子の名前を出せば、捜査に、制約を課せられる心配があったからである。
とにかく、日下刑事を刺した犯人を追いかける過程で、佐々木殺しの真相を、つかみたいと、十津川は、思ったのだ。
「しかし、日下君は、新宿歌舞伎町で、何をしてい

たのかね？　今度の事件は、片がついたんだろう？」
と、本多が、きいた。
「彼は、犯人の証拠がためをしていたんです」
「それは、おかしいじゃないか。証拠がつかめたから、逮捕したんだろう？」
「彼は、慎重な男ですから、まだ、不十分だと思ったんだと思います」
と、十津川は、いった。
本多は、半信半疑のようだったが、十津川のいうことなので、
「君がいうのなら、そうなんだろうが――」
「日下君を刺した犯人の捜査は、ぜひ、私にやらせて下さい。お願いします」
と、十津川は、いった。
電話をすませると、十津川は、亀井のところに戻った。
「日下君の事件は、われわれが、調べることになったよ」
「それは、よかったですね」
「ただ、問題がある」
「わかっています。二十年前の事件に、ぶつかる可能性があるということでしょう？」
と、亀井が、いった。
「そうだ。今のところ、日下君を刺したのが誰かわからないが、佐々木季見子を助けようとして、刺されたのだとすると、犯人を追って行くと、どこかで、二十年前の事件にぶつかるだろうね」
「その時、どうするか、今から、考えておく必要がありますね」
「かなりの覚悟が、必要になってくると思うんだよ。相手は、元刑事を殺し、今度は、現役の刑事を、刺している」
と、十津川は、いった。
「二十年前と同じように、上から、捜査を中止しろという圧力が、かかるかも知れませんね」
「ああ、そうだな」

「その時は、どうします？」
「圧力があれば、二十年前、あの事件が、本当に解決していなかったことの証拠になるじゃないか」
と、十津川は、微笑した。
「やるんですね」
と、亀井が、緊張した顔で、いった。
新宿署に、また、捜査本部が、設けられた。
日付が変って、午前三時を過ぎたが、日下刑事は、昏睡状態のままだった。
十津川と、亀井は、病院から、新宿署に、戻った。
佐々木季見子のことも、心配だったからである。
彼女は、まだ、自宅に、帰っていなかった。
十津川は、刑事たちに、手分けして、季見子を、探すように、指示した。日下が、歌舞伎町の路地で刺された時、彼女も、近くにいたと思われたからである。
先に、歌舞伎町周辺を調べていた西本刑事から、電話が入ったが、季見子は、見つからないという。
十津川と、亀井も、探しに出ることにした。彼女まで、口封じに殺されては、大変だと思ったのと、彼女を見つけたら、自重するように、忠告するためだった。
さすがに、この時刻になると、歌舞伎町周辺も、人通りが、ほとんどなくなっている。
それでも、雑居ビルのところに、灯がついていたり、二十四時間営業のコンビニエンスストアに、客がいたりするし、酔っ払いが、わめいていたりする。
「彼女は、こんな時間に、どこで、何をしているんですかね？」
亀井は、歩きながら、腹立たしげに、いった。
「彼女は、彼女なりに、一生懸命なんだろう」
「おかげで、日下刑事が、やられましたよ」
と、亀井が、いった。
N組の入っているビルも、シャッターを下してしまっていた。
まさか、彼女が、N組に監禁されていることはな

いだろうが、夜が明けても、見つからなければ、乗り込んで、調べる必要が、出て来るかも知れない。
とうとう見つからずに、十津川たちは、捜査本部に、引き揚げた。
他の刑事たちも、次々に、戻って来た。
もう夜が、明ける。
十津川は、もう一度、季見子の自宅に、電話してみたが、応答は、なかった。
午前九時。
朝早くから、店を開けている近くのラーメン屋から、ラーメンをとって、食べているところへ、電話が、鳴った。
日下の運ばれた病院からだった。
「日下さんが、意識を取り戻しましたよ」
と、教えてくれた。
「ありがとうございます」
と、十津川は、ほっとして、礼をいった。
「今、日下さんのことを心配して、若い女の方が、来ているんですが、名前をおっしゃらないんです。二十五、六の方ですが」
(佐々木季見子だ)
十津川は、亀井と、病院に、駆けつけた。
待合室に、やはり、佐々木季見子が、ぽつんと、腰を下していた。
十津川は、ほっとするよりも、無性に、腹が、立った。
「どこにいたんです?」
と、十津川は、思わず、大声できいた。
季見子は、びっくりしたような眼で、十津川を見、亀井を見た。その眼が、やたらに赤いのは、昨夜、眠っていないのか。
「どこにって――?」
「ずいぶん、探しましたよ。日下刑事だけじゃなく、あなたまで、刺されてしまったんじゃないかと思ってね」
「じゃあ、日下さんは、私のために刺されたんです

か？」
「多分ね。あなたのことが、心配だから、日下刑事に、守るように、いってあったんです。今まで、どこにいたんですか？」
「高円寺ですわ」
「高円寺で、何していたんです？」
亀井も、怒ったような声を出した。
「いわなければ、いけないんですか？」
「日下刑事は、あなたのために、刺されたのかも知れないんですよ」
「尾行して、行ったんです」
「尾行？　誰のです？」
「私は、どうしても、父が、北原というチンピラに、殺されたというのが、信じられないんです。それも、金を盗もうと、殺したなんて。それで、北原という男のことを、調べました」
「N組のビルのまわりをですか？」
「ええ」
「昨夜も、あの辺を、歩き廻ったんですね？」
「ええ」
「それで、どうしたんですか？」
「北原と、親しくしていた女の人がいるということを、聞いたんです。歌舞伎町のバーで働いている女です。それで、その店に行って、様子を見ていたら、彼女に、電話があって、急に、店を出て行ったんです」
「それで、尾行した？」
「ええ。タクシーを拾ったので、私も、タクシーに乗りました。そしたら、高円寺のホテルへ入ったんです。私は、ずっと、ホテルの外で、見張っていたんですけど」
「何か、わかったんですか？」
「女の人が、ひとりで、あんな時間に、ホテルに入る筈がないから、誰かが、先に来ていたんだと思いますけど、出てくるのを見る前に近くの喫茶店で、朝食をとっていたら、テレビのニュースで、日下さ

んが、刺されて、病院に運ばれたと知ったんです。私のせいかも知れないと思って、駆けつけたんですけど――」

「その女の名前は、何というんですか？」

と、十津川が、きいた。

「本名は、知りませんけど、お店では、ミユキさんと、呼ばれていましたわ」

「北原の彼女ということは、間違いないんですか？」

「新宿歌舞伎町では、何人かの人が、知っていましたわ」

と、季見子は、いった。

「それなら、間違いないでしょう。彼女を尾行して、何を知ろうと思ったんですか？」

十津川が、きいた。

「父が、なぜ殺されたのか、それが知りたかったんです。北原という男は、きっと、誰かに頼まれて、父を、殺したに違いないと、思うんです。北原の彼女を尾行すれば、それが、わかるかも知れないと思って」

「気持は、わかりますが、もう、おやめなさい」

と、十津川は、優しくいった。

「なぜですか？」

「危険です。北原は、暴力団N組の人間です。北原のことを、あれこれ調べられるのを、面白くないと感じる人間も多い筈です。そうした人間が、日下刑事を、刺したかも知れない。だから、もう、やめた方がいいと、思いますね」

「でも、警察は、父が殺された事件は、もう終ったと、思っているんでしょう？」

と、季見子が、十津川の顔を、まっすぐに見て、きいた。こういう眼は、苦手である。正直に答えなければいけないのだろうが、捜査一課の十津川が、この段階で、疑問を持っているというわけには、いかない。

「とにかく、危険な行動は、慎んで下さい。あなたが、そうした行動をとると、放っておけないので、

誰かを、ガードにつけなければなりません。また、日下刑事のような事件が、起きる可能性があります」
「日下さんには、申しわけないと思いますけど、私が、頼んだことじゃありませんわ。父のことで、真相を調べようとしない警察は、私のことも、放っておいて欲しいと思いますわ」
と、季見子は、激しい口調でいい、病院を出て行った。
「どうしますか？」
と、亀井が、十津川を見た。
「どうというと？」
「日下刑事の代りに、誰かを、彼女の警護につけますか？」
「いや、つけないで行こう」
「危険ですよ」
「つけたいが、彼女のいったミユキという女を、われわれが、調べるんだ。佐々木季見子も、どうせ、彼女のことを調べるだろうから、間接的な警護には、なる筈だよ」
と、十津川は、いった。
彼は、西本と、清水の二人の刑事に、ミユキという女を、調べるように、命じた。
次は、日下を刺した犯人の捜査である。
「まず、意識を回復した日下刑事から、話を聞いてみようじゃないか」
と、十津川は、亀井を誘い、日下のいる三階の病室へあがって行った。
一人部屋のベッドの上に、日下は、寝かされていた。
日下は、青白い顔で、十津川を見た。
「申しわけありません」
と、日下は、細い声で、いった。
十津川は、微笑みかけながら、
「君が、謝ることはないさ。悪いのは、あんな仕事をさせた私だよ」
「しかし、不覚でした」

「話をして、大丈夫かね？　傷口が、痛まないかね？」
「話をするだけなら、大丈夫です」
と、日下は、いった。
「それなら、刺された時の状況を、話してくれないか」
「警部の指示で、佐々木季見子を、見張っていました。彼女は、N組のビルにこそ、入りませんでしたが、あの近くのバーや、スナックに顔を出しては、北原のことを、聞いて廻っていました」
「やはりね」
「その中に、北原の女のことを、探り出したんです」
「ミユキという女だね？」
「そうです。だんだん、危険になってくるなと思いました。北原の背後にいる人間は、一歩でも近づけば、相手は、彼女を消そうとするかも知れないからです。そこで、私は、彼女より先に、ミユキという女のことを、調べてやろうと思ったんです」
「それは、なぜだね？」
「佐々木季見子より、もっと強く、北原のことを、嗅ぎ廻っている人間がいるとなれば、相手は、彼女より、私を、マークするだろうと思ったからです」
「それで、君が、襲われたか？」
「そう思います」
「ミユキという女について、何が、わかったのかね？」
「彼女は、北原の女ですが、単純に、ホステスと、そのヒモという関係ではないようなのです」
「と、いうと？」
「はっきりはつかめなかったんですが、彼女を通じて、北原に、かなりの小遣いを与えていた人間がいたみたいです」
「何かの時に役立てようと、ミユキという女を使って、チンピラを養っていたことになるのかな？」
「そう思います」
「そのスポンサーを見つけ出せば、何かわかるかも

知れないな」
「とにかく、ミユキという女に当ってみようじゃありませんか？」
と、亀井が、十津川を促した。
陽が落ちてから、十津川と、亀井は、ミユキの働いている新宿歌舞伎町のバーに、出かけて行った。
雑居ビルの中にある店だが、ビルの入口に、西本刑事が、立っていた。
「どうしたんだ？」
と、十津川が、声をかけると、
「まだ、来ていません」
「ミユキのことか？」
「そうです。いつもなら、七時には、来ていると、いうんですが」
「今、七時半か。清水君は？」
「彼女のマンションに、行っています。小田急線の豪徳寺にあるそうです」
と、西本は、いった。
十津川と、亀井は、店の中に入ることにして、西本には、清水と合流して、彼女の自宅マンションで、聞き込みをやるように、いった。
店の中に入ると、洒落ているが、ホステスが、四、五人の小さなバーである。
十津川と、亀井は、カウンターに腰を下し、ビールを、頼んだ。
三十歳ぐらいのママが、二人の顔を、見ていたが、
「警察の方でしょう？」
と、きいた。
十津川は、苦笑して、
「わかるかね？」
「そりゃあ、わかりますわ。お断りしておきますけど、あたしの店は、別に――」
「そんなことで、来たんじゃないんだ。ここにいるミユキというホステスさんに、聞きたいことがあってね」
と、十津川は、正直に、いった。

「そういえば、ミユキちゃんは、まだ、来てませんねえ」
「彼女のつき合っている男のことを、知りたいんだよ」
「一人、いましたけど、今度、警察に、捕まってしまいましたよ」
「北原というチンピラのことは、わかっているんだ。われわれの知りたいのは、別の人間のことでね。彼女のスポンサーみたいな人間がいる筈なんだが、知らないかね？」
十津川が、きくと、ママは、大げさに、眼を見張って、
「ミユキちゃんにそんな人がいたなんて、初耳ですわ。いつも、金持ちのパトロンが欲しいって、いっていたくらいなんですから」
「おかしいな。スポンサーがいたことは、間違いないんだがね」
「本当に、知りませんよ」
と、ママが、いった時、カウンターの上に置かれた電話が、鳴った。
ママが、受話器を取ってから、「十津川警部さん？」と、きいている。十津川が、「私だ」といって、受話器を、受け取った。
「清水です」
と、相手が、いった。
「彼女は、マンションにいません」
「いつからいないんだ？　こっちへ来る途中かも知れないが」
「管理人の話では、どうも、昨日から、帰っていないようなんです」
と、清水刑事が、いう。
「間もなく、西本刑事が、そっちへ着く筈だから、二人で、そのマンションの聞き込みをやってくれ。それから、高円寺へ廻って、昨夜、彼女が、どんな人間と、ホテルへ泊ったか、調べるんだ」
十津川は、それだけ、声を秘めて指示して、電話

を切った。
ママが、じっと、十津川を見ている。
「昨夜、彼女は、途中で、帰った筈なんだが？」
と、十津川は、ママに、きいた。
「ええ、外から電話が、あって、看板前に、帰りましたよ」
「誰からの電話だと、いっていたのかね」
「逮捕された北原のことで、弁護士に、会うのだと、いっていましたわ」
「弁護士ねえ」
十津川は、首を振った。弁護士と相談するのに、高円寺のホテルに行ったというのか。
「ママさんは、その弁護士に、会ったことがあるの？」
と、亀井が、きいた。
「いいえ。会ったことは、ありませんけど」
「ミユキさんの写真が、ないかね？」
「写真ですか？　あったかしら？」
と、ママは、首をひねりながら、奥に消えた。そのまま、二十分近く戻って来なかった。
やっと顔を出すと、
「ずいぶん、探して、一枚だけ、ありましたわ」
と、一枚の写真を、十津川に、渡した。
ママと一緒に写っているものだった。背景は、どこかのホテルらしい。
「去年の夏に、みんなで、沖縄へ行った時のものですよ」
と、ママが、説明した。
「彼女のことは、何でもいいから、話してくれないかね」
と、十津川は、頼んだ。
「何でもといわれても、よく知らないんですよ。ホステスのプライバシイには、一切、タッチしないというのが、あたしの方針ですから」
「ここで、どのくらい働いているのかね？」
「去年の四月頃からだから」

と、ママは、いった。
一年半ぐらいのところか。
「北原とは、どんなことで、関係が出来たのかな？」
「北原さんが、うちに、飲みに来ていてでしょうけど、あたしも、最近なんですよ。二人の関係に気がついたのは」
「北原が、殺人をやったことを知って、ミユキさんは、何か、いってなかったかね？」
「何も。あたしも、聞きませんでしたからねえ」
と、ママは、いった。
十津川と、亀井は、仲間のホステスたちにも、ミユキのことを聞いてみたが、反応は、同じだった。
プライベイトなことは、知らないというのである。
ただ一つ、わかったのは、ミユキは、ここで働く前は、ＯＬだったというのである。それも、どんな会社で、働いていたのかは、わからなかった。
十津川たちは、彼女が、現われたら、すぐ連絡してくれるように、ママに頼んで、捜査本部の新宿署に、戻った。
西本と、清水の二人が、帰って来たのは、夜半近くである。
「高円寺のホテルに、廻って来ました」
と、清水が、十津川に、報告した。
「どんなホテルだったね？」
「ラブホテルかと思ったんですが、普通のホテルでした」
「それで、彼女が、どんな人間と会ったか、わかったかね？」
「それが、わかりません」
「わからないって、なぜだ？」
「昨日、泊り客は、全部で、五十二人でした。その中、一人で泊っていた客は、二十七人です。彼女は、その中の一人に、会いに行ったと思うんですが、フロントで、何号室とも聞かずに、入っているので、相手の名前が、わからないんです」
「しかし、彼女は、そのホテルに、相手と一緒に泊

った筈だよ。相手が、女とは、ちょっと思えない。二十七人の中、男の泊り客は、何人なんだ？」

「二十三人です」

「その二十三人の名前と、住所は、わかるんだろう？」

「宿泊カードを、写して来ました」

と、清水がいい、西本と二人で、書いて来た名簿を見せた。

二十三人の名前と、住所が、書いてあった。それに、四人の女性のもである。

「明日、全員で、手分けして、この泊り客を、調べることにする。東京以外の人間については、各県警に協力要請だ」

と、十津川は、いった。

「偽名で、泊っている人間もいるかも知れません」

と、西本が、いった。

「いるだろうが、そんな人間が、一番、怪しいんだよ」

と、十津川は、いった。

翌日、全員で、この泊り客の調査を始めた。東京以外の人間が多いので、それは、十津川が、電話で各県警に、調査を頼んだ。

偽名の泊り客がいるだろう、当然、住所も、その場合は、でたらめに違いない。それは、覚悟していたのだが、意外にも、二十三人の男も、四人の女も、全て、本名だった。

しかし、この二十七人の中に、ミユキと関係があると思われる人物は、浮んで来なかった。

行方不明

捜査は、壁にぶつかった。

肝心のミユキというホステスが、姿を消してしまったのだ。

それに、高円寺で、彼女が会った相手も、わからない。

「この段階で、捜索令状をとって、彼女の部屋を、調べるわけにもいかないな」

と、十津川は、腕をこまねいてしまった。

一日や、二日、マンションに帰らず、店にも出ないからといって、家宅捜索は、出来ない。

「家族が、捜索願でも、出してくれれば、いいんですがね」

と、亀井が、いう。

「家族が、いるのかな？」

十津川は、机の上に置いた写真を見つめた。

バーのママから借りて来た写真である。背は、一六五センチくらいあるらしいが、平凡な顔立ちの女に見える。

佐々木を殺した犯人として、北原が自首して来た時、この女のことは、浮んで来なかった。

確か、あの時は、北原が、他の女の名前をいったのだ。その女のところに、聞き込みに行ったのは、覚えている。ソープランドの女で、彼女は、あっけらかんとした顔で、何度かつき合ったことがあると、いった。

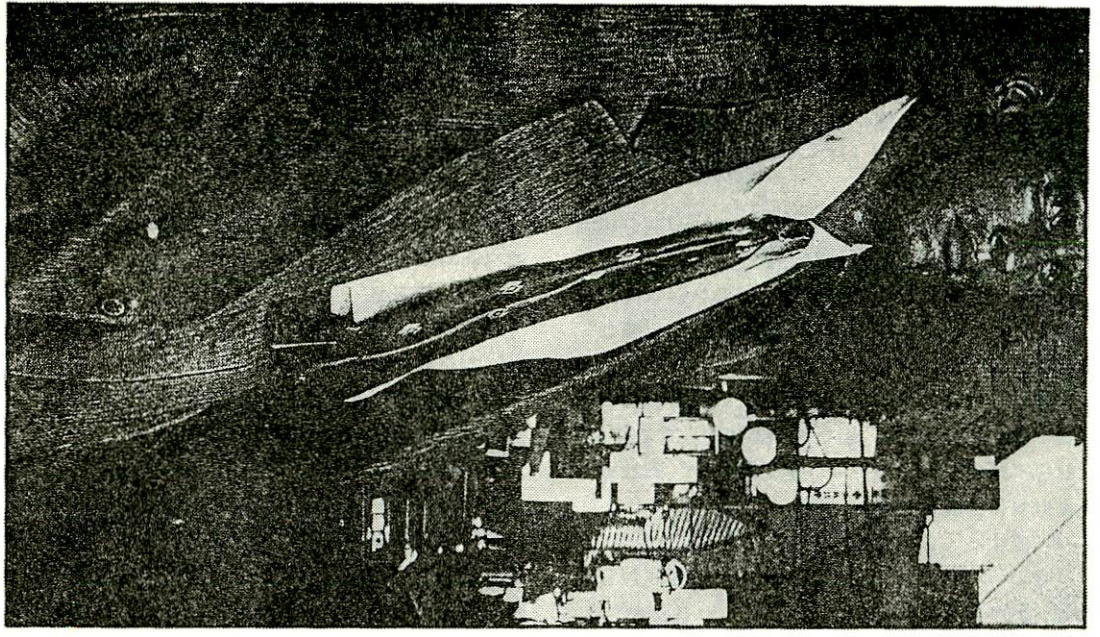
今から考えると、あの女はダミーで、ミユキという女の方が、本命だったのかも知れない。

三日たった。

が、ミユキは、現われなかった。家族を探して、捜索願を出させようにも、その家族の構成も、居所も、不明だった。

「彼女に、何かあったに違いありません。マンションの彼女の部屋を、調べましょう」
と、亀井は、主張した。
十津川も、同じ思いで、捜査本部長に、相談した。
「君は、ひょっとすると彼女が、殺されているんじゃないかと、思うのかね？」
と、本部長が、きいた。
「その危惧は、あると、思っています」
と、十津川は、いった。
「わかった」
と、本部長が、いってくれた。
しかし、令状が出る前に、ミユキのマンションが、火事になった。
しかも、火元は、五階の彼女の部屋である。
十津川と、亀井が、駈けつけた時、その部屋は、黒焦げになっていた。
消防の放水で、水びたしになった部屋の中に、二人は、消防隊員と一緒に入って行った。
壁も、家具も、燃えてしまっている。
「死体は、ありませんね」
と、亀井が、小声で、いった。
十津川は、黙って、肯いた。或いは、焼跡から、ミユキの死体でも見つかるのではないかと思ったのだが、それがなかったのは、救いだった。
「灯油を撒いて、火をつけたみたいですね」
と、消防隊員の一人が、十津川に、いった。なるほど、それらしい強い匂いがしている。
完全な放火なのだ。
そう思いながら、十津川は、強い眼で、燃えてしまった室内を、何度も、見直していた。
（犯人は、なぜ、放火したのだろうか？）
それが、第一の疑問だった。
部屋の主を殺しておいて、火をつけるということは、よくある。
だが、この場合は、違っていた。
主人のミユキは、行方不明になっている。それも、

三日前から、姿を消してしまっているのだ。
その留守宅が、放火されたのである。
何のために、誰が、放火したのか、わからなかった。
ミユキ本人の仕業ということも考えられるのだ。
十津川は、焼け焦げた三面鏡の引出しを、開けてみた。
手紙か、写真でも、残っていたらと思ったのだが、中身も、完全に、燃えてしまっていた。
「駄目だな」
と、十津川は、手の中で、焦げた破片になって、くずれていく燃えかすを見て、呟いた。
「それが、狙いですかね？」
と、亀井が、いう。
「かも知れないな。念入りに、灯油を撒いておいて、火をつけたんだ。だから、全て、燃えてしまった。ミユキという女の身元とか、交友関係を証明するようなものは、全て、焼いてしまおうと、思ったのかも知れないね」
「それにしても、肝心のミユキは、どこへ消えてしまったんですかね？」
「殺されたかな？」
「それとも、誰かが、われわれの手の届かないところに、逃がしてしまったのか」
「海外ということかね？」
「そうです。そうしておいて、彼女の持ち物を、全部、焼き捨ててしまったんじゃないでしょうか？焼却炉へ投げ込む代りに、マンション自体に、火をつけてです」
と、亀井は、いった。
「せめて、彼女の本名でも、わかればな」
「区役所へ行って、住民登録が、どうなっているか調べてみましょう」
と、亀井は、いった。
しかし、戻って来た亀井は、
「駄目でした。あのマンションは、別の人間の名義



になっていますね」
と、いった。
ミユキは、その人間から、借りていたらしい。
十津川と亀井は、持主に、会ってみたが、驚いたことに、マンションを、その人から借りていたのは、北原だった。
いや、北原が借りていたというより、北原の名前で、借りていたというべきだろう。
北原が、捕まった時の住所は、このマンションではなかった。それを考えると、明らかに、北原は、名前だけを、貸していたのだ。
実際に、このマンションの部屋代を払っていた人間が、恐らく、北原に、佐々木を殺させたのだろう。
「その人間は、あくまでも、陰に廻って、正体を、つかませない気ですね」
と、亀井が、いまいましげに、いった。
「しかし、こっちは、何としてでも、その人間の正体を、知りたいね」
と、十津川は、いった。
「北原は、知っている筈ですが、今の状態では、絶対に、話さないと思いますね」
「高円寺のホテルで、ミユキに会ったのは、恐らく、この人物だと思うんだがね」
「私も、そう思います」
「もう一度、あのホテルの当日の泊り客を、洗ってみようじゃないか」
と、十津川は、いった。
「しかし、警部。一度、調べて、これはという人物は、見つかりませんでしたが」
と、亀井が、戸惑いの色を見せて、いった。
「あれは、間違えたと思うんだよ」
「どこがですか？」
「ひとりで泊っている人間だけを調べたことさ。むしろ、宿泊カードに、二人で泊っている人間を、調べるべきだったんだよ。その人間は、あとから、ミユキが来るとわかっているわけだから、フロントで

は、多分、ツインルームをとり、宿泊カードには、
——他一名と、書き込んだ筈なんだ」
「なるほど」
「西本刑事たちに、もう一度、あのホテルへ行って、二人で泊っていた人間を、チェックしてくるように、いってくれ」
と、十津川は、亀井に、いった。
今度は、最初から、カップルで泊っていた人間を、リストアップした。
それも、男女の名前が書き込んであるものより、——他一名と、宿泊カードに記入した人間を、重視した。
前の時と同じように、各県警に、協力して貰っての調査になった。
今度は、手応えがあった。
偽名の人物が、一人、浮び上って来たからである。
〈長田博他一名〉
と、宿泊カードに書かれている人物だった。住所は、大阪となっていたが、その住所は、でたらめと、わかった。
西本が、フロントやボーイ、ルーム係などに、その男を覚えているかどうか、聞いた。
フロント係は、この長田博について、年齢は、三十五、六歳、身長一八〇センチくらいと、いった。かなり大きな男である。
十津川は、ホテルの従業員たちに協力して貰って、この男の似顔絵を作成することにした。
男は、フロントに現われた時も、ボーイに、部屋に案内される時も、チェック・アウトの時も、常に、サングラスをかけていたという。
従って、似顔絵も、サングラスをかけたものになった。
そのせいか、男の顔は、かなり、きつい感じだった。サングラスをとると、意外に、優しい感じなの

かも知れないが、出来あがった似顔絵では、一見、ヤクザ風である。

他に、従業員が覚えていたことを、全て、注意書きとして、注記しておいた。

男としては珍しく、ダイヤを埋め込んだ指輪をしていた。

部屋に案内したボーイに、千円のチップをくれたが、その時、取り出したサイフは、朱色のカルチェだった。

声は、低い方である。

訛りは、感じられなかった。

頭髪は、豊かで、かるくウエーブが、かかっている。

背が高いので、大股に、早く歩く。事実、部屋に案内したボーイが、置いていかれそうになったと、証言している。

宿泊カードに、住所を、大阪と書いているが、スーツケースも、ボストンバッグも、持っていなかった。

三つ揃いの背広は、かなり上等な感じがしたと、これは、フロント係の証言。

十津川と、亀井は、出来あがった長田博の似顔絵を、改めて、見直した。

もちろん、長田博は、偽名だから、本名はわからない。

「持ち物がなかったということから考えて、東京の人間の可能性が、強いと思いますね」

と、亀井が、いう。

「その点は、同感だよ」

と、十津川も、いった。

「われわれや、佐々木季見子が、ミユキのことを、調べ始めたので、この男は、あわてて、高円寺のホテルに、彼女を、呼びつけたのかも知れませんね」

「そして、どうしたかだな。口封じに、消してしまったのか、どこかに、姿を隠すように、指示したのか」

と、十津川は、いう。疑問は、同じところに戻ってしまう。

「この似顔絵を、歌舞伎町で、配ってみますか？　一度ぐらいは、ミユキの働いていたバーに、現われているかも知れませんから」

と、亀井が、いった。

「やってみてくれ」

と、十津川は、いった。

似顔絵が、何枚もコピーされ、刑事たちは、それを持って、歌舞伎町周辺の聞き込みに当ることにした。

特徴のある顔だから、すぐ、反応があると思ったのだが――。

見事なほど、目撃者が、出て来ないのである。

刑事たちの聞き込みは、空振りばかりだった。

「これは、おかしいですよ」

と、亀井が、眉を寄せて、十津川に、いった。

「確かに、妙だね。特徴のある顔だからね」

「まるで、誰かが命令を出して、一斉に、口を閉ざしてしまったみたいです」

と、亀井が、いう。

「しかし、歌舞伎町周辺の人間全部の口を封じることは、不可能じゃないかね」

十津川は、首をかしげて、いった。

「あの辺を縄張りにしている組織なら、出来るかも知れませんよ」

「と、いうより、この似顔絵が、その組織の人間ということも、考えられる」

「例のN組のですか？」

「ああ、N組の幹部とすると、北原に、命令して自首させることは、容易だから、納得出来るんじゃないかね」

と、十津川は、いった。

十津川は、捜査四課の花井警部に会って、例の似顔絵を見せた。

「歌舞伎町周辺を縄張りにしているN組の幹部に、

この男がいるんじゃないかと思ってね」
と、十津川が、いうと、花井は、じっと見ていたが、
「三村という幹部によく似ているねえ」
「やっぱり、そうか」
「奴が、何かやったのか？」
「いや、まだわからないんだが、ひょっとすると、うちの日下刑事がやられた事件に、関係しているかも知れないんだ」
と、十津川は、いった。
「うちで、三村のことを、調べてみようか？」
と、花井が、いった。
「その必要が出たら、頼むよ。今は、三村という男のことを、いろいろと、知りたいんだ。どんな男なんだ？」
「年齢三十六歳。前科五犯。通算して、七年間刑務所に入っている。日頃は、大人しいが、いざとなると、危険な男でね。まあ、怖がられているといっていいね。あとで、三村の経歴を送るよ」
と、花井は、いった。
「殺人の前科はないのか？」
「傷害はあるが、殺しまでは、やっていないね。ただ、三村に、日本刀で、腕を切られたなんて男もいる。それから、男なのに、宝石を身につけるのが好きな奴だよ」
「それなら、三村に間違いないと思う。住所は、わかるかね？」
「それも、調べて知らせるよ」
と、花井は、約束してくれた。
一時間ほどして、捜査本部に、メモが、送られて来た。
三村博。三十六年の経歴と、住所の書かれたメモである。
十津川は、亀井と、そのメモに書かれた住所を訪ねてみた。
新大久保近くのマンションである。

管理人に会って、三村の名前をいうと、急に青い顔になって、
「また、何かあったんですか？」
と、いった。暴力団の幹部ということは、知っているらしい。
「いや、ただ会って、話を聞きたいだけだよ」
と、十津川は、いった。
最上階の七階だというので、エレベーターで、あがって行った。
七〇八号室だが、表札は出ていなかった。
インターホンを、押してみたが、返事がない。
「新宿の組事務所の方にいるんじゃないのか？」
と、十津川が、いうと、亀井は、
「いや、事務所に電話しましたが、ここ二、三日、顔を出していないということでした」
と、いい、もう一度、インターホンを押してみた。
相変らず、返事がない。
十津川は、不安に襲われた。佐々木が殺された時から、相手が、次々に、先廻りしているからだった。
北原という犯人が現われ、次に、ミユキという女を見つけようとすると、行方不明になってしまった。
今度は、三村である。
今、午後十一時に近い。普通の人間なら、家に帰っている時間だろう。
「どうしますか？」
と、亀井が、振り向いて、十津川を見た。
「ドアをこわして、入るわけにもいかないだろう。明日、もう一度、来てみよう」
と、十津川は、いった。
翌日、今度は、昼前に、亀井と行った。が、相変らず、応答がない。
「留守ですかね？」
亀井が、きく。
「いや、昨夜来た時と同じ勢いで、電気のメーターが、廻っているよ」
と、十津川は、いった。

カギ穴からのぞくと、電気が、点けっ放しなのがわかった。
何かおかしいのだ。
「ドアを開けてみよう」
と、十津川は、決心して、いった。
近くのキー・ショップから、専門家に来て貰い、鍵を、分解して貰った。
ドアを開けて、十津川と、亀井が、中に入った。
2LDKの部屋の、奥の寝室をのぞいた十津川の顔が、ゆがんだ。
(やられた!)
と、思ったからである。
蒲団の上で、中年の男と、若い女が、折り重なって、倒れていた。
死の匂いが、部屋に漂っていた。
男は、ナイトガウン姿で、女は、下着姿だった。
男は三村、女は、ミユキと思われる。
枕元には、レミーマルタンのびんと、グラスが二つ置かれている。それを飲んで、死んだという形になっていた。
「死因は、毒物死だな。かなり時間がたっているよ」
と、十津川は、亀井に、いった。
恐らく、青酸中毒だろう。
「心中に見せかけた殺しといったところですか?」
と、亀井が、二つの死体を見下して、いう。
「そうだろうね。本物の心中なら、出来過ぎだよ」
と、十津川も、いう。
遺書も、見つからないし、第一、探していた二人が、こんな形で死んでいるというのも、おかしいのだ。
鑑識が、やって来て、写真を撮り、指紋の検出に当る。
男は、管理人が、三村と、確認した。女の方は、写真のミユキと、同じ顔をしていた。
解剖のために、運び出される二つの死体を見送ってから、十津川は、難しい顔になっていた。

「誰かが、心中に見せかけて、殺したのは確かだが――」

十津川は、言葉を切って、考え込んだ。

その誰かが、問題だし、今、十津川が、考えているのは、その人間の強烈な意志ということだった。

絶対に、警察の手を近づけるものかという強い意志である。そのためには、何人殺しても構わないと考えているように見える。

「やはり、二十年前の事件が、尾を引いていると、お考えですか？」

亀井が、きく。

「そう考えざるを得ないね。あの事件を追っていた佐々木さんが殺された。犯人は、北原というチンピラだが、彼が、誰かの指示でやったことは、はっきりしている。それを突き止めようとしたら、今度は、日下君が襲われ、三村とミユキが死んだ。全部、つながっていると思っているよ」

「逆に考えれば、われわれは、真相に近づいていることになりますね。二十年前の事件の真相にです」

「そう思いたいがね」

十津川は、あまり自信のないような声を出した。

三村とミユキの遺体は、東大病院で、解剖が、行われた。

死因は、十津川の予想通り、青酸中毒だった。

死亡推定時刻は、二日前の午後十時から十一時の間だという。

二日間、あの死体は、放置されていたのだ。

レミーマルタンのびんの中に、青酸カリが、混入されていた。当然、二つのグラスに少し残っていたブランデーからも、青酸が、検出された。

警察は、心中に見せかけた殺人と、断定した。

意外なことに、N組は、三村は、すでに、組を離れた人間であり、彼の死には関心がないという態度を、表明した。

三村は、N組の幹部だった男である。本来なら、盛大な葬儀を計画し、警察ともめるところなのだが、

今度のN組の態度は、十津川には、不可解だった。
そのあたりを、捜査四課の花井に、調べて貰った。
「三村が、組を離れた人間だというのは、嘘だね」
と、花井は、十津川に、いった。
「しかし、N組は、そういっているがね」
「何か理由があって、もう関係のない人間だと、主張しているんだと思うよ。そうすることが得策だと判断したんだろう」
「殺人事件に関わりたくないということかね？」
と、十津川がいうと、花井は、笑って、
「そんな殊勝な連中じゃないさ。彼等は、利害関係で、動くんだ。もし、得になると思えば、殺人事件にも、首を突っ込んでくるよ」
「すると、関係がないと主張することで、何か利益があるということかな？」
「君は、N組が、殺したとは考えていないみたいだね？」
と、花井が、きいた。
「ああ、今のところ、思っていない。そんな単純な事件ではないと見ているんだ」
と、十津川は、いった。
「もっと、複雑な事件か」
と、花井は、呟いてから、
「君のところの日下刑事が襲われた事件に、関係していると思っているわけだな？」
「ああ」
「それだけじゃないんだろう？」
花井は、十津川の顔を、のぞくように見た。
「今のところ、私にも、よくわからないんだ」
とだけ、十津川は、いった。今でも、二十年前の事件は、タブーになっていたからである。
十津川は、花井との話のあと、考え込んだ。
三村と、ミユキの死が、殺人とすると、どういうことになるのか？
警察は、ミユキを追っていた。
それを知って、三村が、自宅マンションに、彼女

を、隠したのだろう。

だが、ある人物は、それだけでは、不安になった。そこで、三村とミユキの口を封じてしまうことにした。

青酸入りのレミーを、二人に渡しても、果して、飲むかどうか、わからない。一人だけ飲んで死亡し、大さわぎになってしまう可能性もあるからだ。とすると、犯人も、その場に居合せたのか？

恐らく、誰か――つまり、犯人が、レミーを持って、三村のマンションにやって来た。青酸入りのレミーである。

そして、三村と、ミユキに、それを飲ませた。

ミユキが、下着姿で飲んだとは思えないから、彼女が死んだあと、下着姿にしたのだろう。もちろん、心中らしく見せるためにである。

「二人が、何の疑いもなく飲んだとすると、犯人は、二人が信頼していた人物ということになりますね」

と、亀井が、いった。

「さもなければ、絶対に、そんなことはしないと思われる人物だよ」

と、十津川が、補足した。

「N組の組長ですか？」

「考えられるね」

「他にいますか？」

「例えば、有名人がいるよ。社会的な有名人なら、まさか、殺しなんかしないだろうと考えるからね」

「なるほど」

「まず、N組の組長から、調べてみるか」

「名前は、確か、寺本卓造です」

「一度、会ったことがあるよ。小柄だが、眼つきの鋭い男だという印象がある。まともにぶつかっても、白状はしないだろう。彼の身辺を洗うことから始めよう」

と、十津川は、いった。

十津川は、もう一度、捜査四課の花井に会って、寺本卓造のことを、聞いてみた。

「寺本か。年齢は、四十八歳。十年近く刑務所に入っていた筈だよ。頭のいい男で、N組の組長だが、別に、政治結社N会を作って、こちらの会長も、兼ねている。これからは、ただのヤクザでは、駄目だと考えたんだろう」

と、花井は、いった。

「政治結社をねえ」

「将来は、N組を完全に解散して、政治結社N会一本にするんじゃないかね。寺本が、何かしたのか？」

「ひょっとすると、殺人をね」

と、十津川が、いうと、花井は、首をかしげて、

「寺本が、今、殺人をやるとは、思えないねえ。今もいったように、彼は、N会を作って、政治の世界に食い込もうとしているんだ。本気でね。幹部の三村が、死んだのに、早々と、無関係の声明を出したのも、そのためだと、おれは、睨んでいるんだよ」

「寺本は、殺人に、無関係か」

と、十津川は、呟いた。

「今の時期には、よほどのことがなければ、危いことには、手を出さん筈だよ」

と、花井は、いった。

（本当だろうか？）

十津川は、考え込んでしまった。

三村やミユキに、毒入りのレミーを飲ませたのは、寺本ではないのか？

しかし、N組の北原が、佐々木を殺して自首して来ている。

それは、N組の指示ではなかったのか？

もし、組長の寺本が、指示したのなら、三村とミユキを殺したことに、彼が無関係とは、考えにくい。

寺本が、直接、手を下さないまでも、承知していたに、違いないのだ。

N組の幹部が、三村とミユキのところに行き、「組長の差し入れだ」といって、レミーを出せば、三村と、ミユキは、別に、疑わずに飲むのではないか。

「もし、寺本が、犯人だとすると、どういうことに

なってくるんでしょうか？」
と、亀井が、きいた。
「どういうことって、なぜ、そんなことをしたのかということかい？」
「そうです。動機です」
「もちろん、北原の件があるからだろう。北原に、命じて、佐々木さんを、殺させたことがわかるのが嫌だから、三村と、ミユキの口を封じたんだ。他には、考えられないよ」
「すると、なぜ、北原に、佐々木さんを殺させたかという問題になって来ます」
と、亀井が、いう。
「二つ、考えられるね」
と、十津川は、いった。
「どんなことがですか？」
「寺本自身が、佐々木さんを殺したいと思い、それを、幹部の三村に命令した。三村は、自分の女と関係していたチンピラの北原を脅して、やらせたという図式だよ」
「と、いうことは、寺本が、二十年前の事件に、関係していたということになるんじゃありませんか？」
亀井が、眼を光らせて、いった。
「二十年前というと、今、四十八歳だから、二十八歳か。連続婦女殺人事件の犯人としても、おかしくはないね」
と、十津川は、いった。
「もう一つは、どんな動機ですか？」
「寺本は、二十年前の事件とは、何の関係もなかった。ただ、金を積まれて、佐々木さんを殺してくれと、誰かに、頼まれた。そこで、幹部の三村に、命じ、三村は、チンピラの北原に、殺させた。あとは、第一の場合と同じだ」
「どちらが、正しいですかね」
「二十年前の事件の時、寺本が、どこで、何をしていたか、調べてみようじゃないか。そうすれば、二

十年前の事件に、関係があるかどうか、自然に、わかって来る筈だ」

と、十津川は、いった。

部下の刑事たちは、寺本のことを、調べにかかった。

主として、二十年前の寺本の経歴である。

二十年前、寺本は二十八歳。その頃から、彼は、N組の前身であるS組で、動き廻っている。ピストルの不法所持で、逮捕されてもいた。

この作品は「産経新聞」（夕刊）に昭和62年7月7日から昭和63年7月16日まで「傷痕の時」のタイトルで連載された。

日本音楽著作権協会（出）許諾第8857081－801号

十津川警部の挑戦(上)
昭和六十三年 十月二十日　初版発行
昭和六十三年十一月二十日　4版発行

著者　西村京太郎
発行者　増田義和
発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〒一〇四
〇三（五六二）二〇五一（編集）
TEL
〇三（五三五）四四四一（販売）
振替東京一―三二六
支局　大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六（三一二）一五七三
印刷　大日本印刷　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN4-408-50112-3
©K. Nishimura　1988
Printed in Japan

JOY NOVELS

急行奥只見殺人事件
西村京太郎

早春の奥只見で連続変死体。加えて秘境・大内宿では刺殺体…。十津川警部と地元警察の意見対立。

特急北アルプス殺人事件
西村京太郎

雪深い飛騨高山で殺人事件発生。アリバイを崩そうと犯人に肉迫する十津川警部の前にまた死体が。

神話列車殺人事件
西村京太郎

出雲、筑紫、高千穂と三大神話の地を結んで特急列車が走る。抗いがたい憎悪と愛と殺意を秘めて。

七人の証人
西村京太郎

誘拐された十津川警部が目を覚ますと、そこは絶海の孤島。七人の男女が過去の証言に生死を賭す。

殺しの双曲線
西村京太郎

雪山の奥で展開する六つの惨劇は、はたして双生児の兄弟が立てた報復計画か。迫真の書下し長編。

イレブン殺人事件
西村京太郎

ホテル荒し、エリート商社マン、若手公務員……うかつにも、予期せぬ死のトラップにつかまった。

EF63形機関車の証言
西村京太郎

駅ホームでのスナップ写真のアリバイが崩せない十津川警部は、列車の現場でついに……。

急行もがみ殺人事件
西村京太郎

東北の温泉地を結ぶ連続殺人事件！　巧妙な列車トリック。冷徹な犯人を十津川警部たちが追う！

定価各680円（昭和63年10月現在）